Chaos_Mythology_Online

アマノガサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｃｈａｏｓ＿Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ＿Ｏｎｌｉｎｅ

【Ｎコード】

Ｎ８２７４Ｙ

【作者名】

アマノガサ

【あらすじ】

通常のＭＭＯＲＰＧと互換性を持って発売されたＶＲＭＭＯＲＰＧのキラータイトル”Ｃｈａｏｓ＿Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ＿Ｏｎｌｉｎｅ”。その日、大鳥圭介は行きつけのアクセスポイント喫茶からゲームへログインしていた。いつもの仲間と過ごす楽しい時間。しかし、それは唐突に終わりを告げる。ボスモブ討伐直後に急激なめまいに襲われた圭介は意識を失い、次に目が覚めたときにはゲームの世界に囚われてしまっていた。意識のない間に過ぎ去った空白の一ヶ月。ログアウトが出来ないという現状。今までのゲームとは

若干異なるリアル感。そして、いつの間にか変更されて”黄色表示”となった頭上のネーム群。不可思議な事だらけの中、圭介はプレイヤー『鳳牙』として仲間と共にＣＭＯの世界に、そして自分たちに起こった謎を追う。仮想と現実、双方の苦難が行く先に立ち塞がる事も知らずに。

序章

序章

「ヴオオオオオッ！！」

眼前の巨大な漆黒の狼の放つ咆哮が耳朶を打つ。

ビリビリと感じる空気の振動。五メートル級以上の獣族モンスター固有スキル、気絶効果（スタン）を持つ獣咆（ビーストロア）だ。効果範囲はモンスターによってまちまちだが、今回は相手を中心とした半径六メートルほどまで効果が及んでしまうらしい。

「ぐおっ……！」

十分な距離をとっていたつもりだったのだろう。鈍色の西洋鎧を着込む剣士は驚きの声を漏らして片膝をつき、その背後で僧服姿の女が腰を抜かしてぺたんと座り込む。

「くっそ！　何でこんな所にフェンリルシャドーなんて出てくるんだよ！」

何とか体勢を立て直した剣士の、声からして男は、震える手で両手剣を構えなおす。

幅広のグレートソードは実用性と見栄えのよさから両手剣士に好まれる汎用装備だが、その重厚な存在感も目の前の凶獣に対するにはあまりにも心許ない物だった。

剣士はちらりと背後の様子を探る。腰を抜かした僧侶はまだ立ち

直れていない。

敵とのレベル差のせいもあるが、僧侶は剣士に比べてスタミナ(ST)を消費する物理系特技(フィジカルスキル)に弱い。見た目はマナポイント(MP)を消費する魔法(マジックスキル)系特技のようで、獣咆は前者に属していた。

「ミリア！　回復までどれくらいかかる！？」

「ごめんキール！　気絶ゲージまだ半分以上も残ってるの。全然動けない！」

半分以上という言葉を聞いて、剣士――キールの胸中に絶望が宿る。自身が立ち直るまでに要した時間から計算しても、それはあまりに長すぎた。おそらく、物理系に弱い相手に対する特殊効果が付与されているのだろう。

僧侶――ミリアの支援をあてにできなくなったキールは、急いで自分の持ち物を確認する。

自己回復用のヒールポット(POT)を持ってはいるが、これは使用後にクール(CT)タイムが存在するため連続使用が出来ない。

戦闘開始直後の不意を突かれて受けたダメージは、たったの一撃でキールのヒットポイント(HP)を三分の一も奪い去ってた。ミリアの回復魔法であれば二回で全快出来るが、ポットでは三回は使用しなくてはならない。

ジリ貧は必至の展開だ。

このままでは共倒れになると判断し、わずかな逡巡の末にキールは自分を囮にミリアを逃がすことを選択した。

「ミリア！　俺が何とかこいつを引き付けるから、君はその間に逃

げてくれ！」

覚悟を決め、キールは大剣を背負うようにして構えて漆黒の巨狼に突撃を仕掛ける。

「キール！？」

背後からミリアの悲鳴が聞こえてくる。何とかして、彼女が気絶から立ち直れるだけの時間を稼がなければならない。

デスペナルティはそれなりに痛いが、最悪ソロでのレベル上げが簡単な戦士系である自分の方が取り戻しやすいだろうという判断だった。

「うおおおっ！」

キールは巨狼の眼前で急制動をかけ、前へとつんのめる勢いをそのままに背負い構えていたグレートソードを一気に振り切った。

「ヴオッ！」

ザシュッ、というヒットサウンドと剣閃をイメージしたエフェクトが生じ、巨狼のヒットポイントゲージがわずかに減少する。

「げっ！　『地割（ちかつ）』使ってこれかよ！　洒落にならねえ！」

『地割』は現在キールが使えるスキルの中で最大の攻撃力があった。だというのに、それをもってしても毛筋ほどのダメージしか与える事が出来ない。

本来であればこのフィールドにいるモブ（Mob）はキールの『地割』一撃

で倒せるはずだったのだ。下見の段階でおおよそのモブと戦闘を行い、無理なく捌けると判断したからこそ、キールはミリアとのレベル上げにこの場所を選んだのだ。

だというのに、ポップ（POP）するはずの無いモブが突然襲撃を仕掛けてきて、今の状況へ繋がっている。

「ぐあっ！」

それでも多少なりともいける可能性を期待していたキールは、最大の一撃がまるで通用しないことに動揺し、フェンリルシャドーの反撃をまともに受けてしまう。

大きな前足に払われ、地面を転がった。

「いやあっ！　キール！？」

ミリアの悲鳴が聞こえる。駄目だ、助けなければ。

軋む体に鞭を打ち、キールはグレートソードを杖代わりに立ち上がって、ふと自分の上に影が差したのを感じた。

嫌な予感と共に見上げれば、そこには大口を開けた巨狼の姿。なおかつその口の中に炎の塊が生じているのが見える。

「やべ、火炎の息（フレイムブレス）か！」

先の獣咆と違い、火炎の息は純粋な魔法系スキルだ。剣士であるキールとはすこぶる相性が悪い攻撃である。

「悪いミリア！　俺死んだわ！　何とか逃げ切ってくれ！」

「キール！」

覚悟を決めた剣士キール。その名を叫ぶ僧侶ミリア。二人の死は免れない状況。

そのはずだった。

「どこかの映画のワンシーンみたいな状況だよな」

「……え？」

キールはどこかのんびりした口調の声を聞いて、思わず周りを見渡した――直後、

「ギャンッ！

大砲をぶっ放したかのような轟音が鼓膜を震わせたかと思うと、目の前にいたはずの巨狼が犬みたいな悲鳴を上げて吹っ飛んでいくさまを目撃した。

キールがあまりの状況に呆然としていると、その目前に急に人影が降ってきて、彼は反射的に間合いを取った。

武器を構えつつ、目の前の人影を観察する。

身長は百八十センチで設定しているキールよりもやや低い。服装として、上は薄手の黒いノースリーブ。背中側は布面積が少なく、大きく肌が露出している。下は改造された黒い袴のようなズボンで、紅とオレンジのファイアパターンがアクセントになっていた。両前腕には手甲か何かの上に黒布が巻かれ、左上腕には赤味がかった金色のリングを付けており、背後から見た髪の色は銀色をしていた。

しかし、特筆すべきはそんなものではない。

「え？　いや、まさか……」

キールの視線は二つの場所を行ったりきたりしている。

一つ目はその綺麗な銀髪にそびえる二つの耳。いわゆる獣耳というやつだ。ピンとたった二つの耳は、何かに反応するように時折ぴくぴくと動いている。

もう一つはその腰の辺り。髪の毛の色と同じ銀色の毛を持つふさふさの尻尾。それがパタパタと左右に揺れていた。

「あんたもしかして――」

極めつけはキャラの頭上に表示される所属ギルドとキャラクターネームの黄色い文字色。

その特徴的な風体から、キールは一つの名前を思い出す。

「――黄色表示（イエローネーム）、銀狼（ぎんろう）の鳳牙（ほうが）か！？」

「……だったら、何？」

ゆらりと振り返った獣耳の男性キャラクターは、その銀色の瞳を半目にし、ややうんざりしたような表情をしていた。

序章（後書き）

※Ｈ２３｜１１｜２５　文章レイアウト変更

その1

第一章

二十二世紀の終わり頃、アメリカから輸入した技術を応用し、日本で人類史上初となる仮想世界、ヴァーチャル・リアリティ・ワールド（通称ＶＲＷ）が構築された。

現実世界の東京都をまるまる模したその世界は『裏東京』と仮称され、専用の機器を利用することであたかも本物の世界であるかのように様々な現象を体感する事が出来た。

脳科学の発展によって人体の五つの感覚全ての仕組みが解明され、デジタル化することに成功していた事が最大の成功要因だ。

人々は現実世界に限りなく近い生活を、仮想世界でも行えるようになった。

時が進み、ＶＲが一般大衆にとって当たり前の存在となった頃、ゲーム業界がこの仮想世界に目を付けた。

現実世界を模した世界はその莫大なデータ要領からとんでもなくコストがかかってしまうが、必要最低限の見ため（ハリボテ）が実現すれば世界として成り立つゲームにおいて、この懸念は何の制約にもならなかった。

インターネット上で普及するＭＭＯ－ＲＰＧをはじめとするネットゲームとＶＲが結びついたのは、必然と言ってよかっただろう。

ＶＲを用いたネットゲームはたちまちのうちに大ヒットを飛ばし、日本各所でＶＲ機器を設置した漫画喫茶ならぬＡＰ（アクセスポイント）喫茶や、ＶＲ機

器完備のビジネスホテルが大流行した。
金銭的に余裕のある者の中には自宅にＶＲ機器を設置して利用するものもいたが、大方の利用者はスペース的な問題も含めて外部に機器の設置を求めた。
大鳥圭介（おおとりけいすけ）もそんな大勢の一人だ。自室にＶＲ機器を設置する余裕などあるはずもなく、ゲームの記録媒体である専用カードだけを持ち歩くほうが気楽だった。
加えて、特定のアクセスポイント喫茶は各ゲーム企業の出資で経営されているため、食事などを利用しなければ基本料金が無料というありがたい状態だった。ただし、当然ながら該当企業のＶＲゲーム利用者に限ってのことである。ただ寝るためなどの利用は認められない。
圭介は行きつけのＡＰ喫茶に立ち寄り、手続きを経て個室へと至っていた。
昔のＳＦ映画に出てきそうな冷凍睡眠カプセルを思わせるＶＲ機器。
圭介は慣れた手つきでＶＲ機器の上部カバーを開け、中に納まっているリクライニングに腰掛ける。同時にカバーが閉じられて一切の光が届かなくなるが、すぐに周辺機器が鮮やかな色合いで発光を始めるため、光量としては十分だった。
右手のタッチパネルから”Ｃｈａｏｓ｜Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ｜Ｏｎｌｉｎｅ”のアイコンを選択してタップすると、ＣＭＯというロゴが表示され、ログイン画面へと移行する。
圭介はパネル下部のスリットにカードを差込むと、配線だらけのヘッドマウントを被り、手はリクライニングと一体なっている専用

のポケットに突っ込んだ。

そのまま目を閉じてゆったりとした姿勢で待つ。数秒の後、ピリッとした痛みが全身に走ると同時に、圭介は爽やかなそよ風をその身に感じた。

目を開けばそこは、狭いＶＲ機器の中などではなく、見渡す限りの広大な草原の真っ只中だった。

◆

「ああ、それで鳳牙はそんなところにいたってわけか」

「そういう事です。最後にログインしたのがテスト前で、みんなとイベントやった後でしたから、ちょっと忘れてました」

圭介――鳳牙は、酒場の椅子に腰掛け、目の前のグラスの中身をあおった。酸味の利いた爽やかな柑橘系の味が口の中に広がる。

新製品という事で頼んだものだが、なかなか好みの味だった。鳳牙は思わずパタパタと尻尾が振る。

「鳳牙はリアルだと高校生だもんな」

鳳牙の隣に座るのは、金色の糸で魔力文字の刺繍が施された丈の長い純白のローブを着込む青年だった。今は座っているが、立った時の身長は鳳牙と大差が無い。翡翠色の髪の毛に黄色の瞳をしており、鼻の上にスクウェア型でアンダーリムの眼鏡を引っ掛けている。

実に優等生然とした出で立ちであった。

「で、学期末テストの具合はどうだった？　僕が張ったヤマは当たってたかい？」
「はい、フェルドさんに教えてもらったところはバッチリだったかと。英語が相変わらずでしたけど、赤点ではないと思います」

翡翠髪の青年――フェルドは都内の大学に通う大学生一年生であり、鳳牙の高校のＯＢでもあった。恩師がまだ教鞭を執っていると知ったフェルドが、テスト勉強に悩む鳳牙に策を授けたのである。

「そっか。という事は、村やんのテスト傾向は未だ伝統に沿ったままってことだな」
「そうみたいです、ね」

鳳牙はぐーっと腕と身体を伸ばし、しばらくキープしてから脱力してカウンターに寄りかかった。
ややささくれた木の感触が頬を。塗られたニスの香りが鼻をくすぐり、頭でいくら理解していても、それが現実ではないという事を忘れてしまいそうになる。

ゆっくりと身を起こして周囲を見回せば、西部劇に出てきそうな内装の店には鳳牙とフェルド以外に人影はなく、椅子は全てテーブルの上に逆さまに乗せられていた。

「しかし、この酒場はいつも寂しいですね。近くにいい狩場も人気のボスモブもいないせいなんでしょうけど」
「そうだね。ＶＲログインをしてない人とか、複数アカウントログインしている人の放置露店キャラもいないってところが、もうなんともね」

鳳牙は無言で頷いて同意を示す。

この閑古鳥は何も酒場に限った事ではない。現在位置の『月森の町トリエル』は隣接するフィールドへの冒険の拠点となるタウンエリアなのだが、その隣接フィールドエリアの人気が無いために誰もいないのである。

「まあ、そのおかげでギルドに入っていない俺でも雑音を気にせずゆっくり会話出来るんですけどね。ギルドチャットも便利そうですけど、あれって旧来のチャットウィンドウみたいなのが開いて音声会話するんでしたっけ？」

「うん。そのウィンドウを選択しているかいないかで自分の通常音声チャットとギルド音声チャットを使い分けるんだ。大体の人が普段はウィンドウを開きっぱなしで音声だけカットしてるみたいだね。ちなみに、僕もそうしてるよ」

フェルドが鳳牙から見て何もない場所を指で示している。つまりは、そこにウィンドウを置いているという事なのだろう。

ゲームを始めてから一度もギルドに属したことのない鳳牙にとっては、完全に未知の代物である。

「でも、ギルドの話なんてどうしたんだい？　鳳牙。もしかして、僕んとこのギルドに入る決心がついたとか？」

「あー……いえ、毎度毎度ですみませんけど、やっぱり俺はギルドに入る気は無いです」

鳳牙が苦笑いを返すと、だよねぇとフェルドがわざとらしく肩を落とした。

ふと、鳳牙はフェルドの頭上に表示される白字のネーム群を眺め

る。二段構成になっており、上段が所属ギルド名『アルメリア騎士団』。下段がキャラクター名『フェルド』だ。

アルメリア騎士団はＣＭＯ古参ギルドの一つで、登録人数が二百人を超える大所帯ギルドだ。丁寧な初心者支援をするギルドとして有名で、直接的な関係がほぼ無い鳳牙もソロ活動中に何度か辻回復魔法（ヒール）や辻蘇生魔法（リザレクション）を受けた事がある。

「あの一件以来、僕んとこのマスターから鳳牙をなんとしても引き入れてくれって結構な頻度で催促がくるんだよね。本人にその気は無いですって何度も言ってるんだけど、ほら、鳳牙は元々『リミテッドスキル』持ちだったのに加えて唯一のレア職業キャラになっちゃってるからね」

「フェルドさんもリミテッド持ってるじゃないですか。レア職業はイベントの褒章品で、偶然なれただけですよ」

ぽりぽりと、鳳牙は人差し指で頬をかく。

「ためしにって『獣人（ライカンスロープ）』に転職したのはよかったんですけど、ＶＲプレイヤーにとっては本来の自分にない物が付加されてる分、最初は感覚の違いに慣れるのに時間かかりましたよ」

鳳牙はぴくぴくと頭の上についている獣耳を動かしたり、ふさふさの毛を持つ尻尾をパタパタと器用に操ってみせる。

実のところ、鳳牙はこれらの自然な動作を習得するのに二ヶ月近く時間を使っている。上手くコツを掴んで以降は違和感なく操れるようになったので良かったのだが、今では現実世界にいるときでもふとした拍子に無いはずのものを意識している事があり、幻肢に近い感覚を持っていた。

「もっとも、もう一個の能力の方に比べたら、尻尾くらいわけないと思えましたけどね」
「ああ、あれね。うちの女性ギルメンに絶大な人気を誇ってたよ。何か『裁縫師（テーラー）』とか『宝石細工師（ジュエルメイカー）』にチョーカーの作成依頼に走ってた人もいたから、誘拐されないように気をつけてね？」
「俺は犬じゃなくて狼なんですけどね」
「いや、そういう話じゃないから。まあ、誘拐云々は冗談なんだけどさ」

あははとフェルドがやや渇いた笑いを漏らす。

「ま、とにもかくにもテストは終わったってことだもんね」
「はい。えっと、そういえば一週間ぶりですか？　こうやってフェルドさんと話すのは」
「うん。それくらいかな。……あ、マスターさっきの二杯お願いします」

ニコニコ顔で頷くフェルドがカウンターの向こうにいる強面のバーテンに声をかけると、すぐさまグラスが鳳牙とフェルドの前に出される。

「え？　フェルドさん？」
「思いつきだけど、試験終了祝いってやつだよ。好みの味だったんだろう？」

自分の分も注文されたことを不思議に思った鳳牙に対し、フェルドは片目をつぶってウィンクをしてくる。

「ま、一応君って僕の後輩なわけだし、おごらせてもらうよ」

「あ、なるほど。それじゃあ、せっかくなんで遠慮なく」
鳳牙はそっとグラスを持ち上げ、顔の位置に掲げてフェルドに向き直る。
それを確認すると、フェルドも同じようにグラスを掲げ、コホンと咳払いをする。
「えー、無事にテストを乗り越えた鳳牙と」
「あ、えーっと、助力を惜しまなかったフェルドさんとの」
「「再会を祝して」」
チン、と小気味いい音を立てて二つのグラスが打ち合わされ、互いに一息に中身をあおる。
「……ふー。うん、これ確かに美味しいね」
「そうですね。普通、渋みというか苦味があるはずなんですけど、これはすごく爽やかな後味なんですよね」
味覚のデジタル化によって、仮想世界で食べたり飲んだりする物はたとえゲームであっても味が再現され、直接楽しむ事が出来るようになっている。
ただし、あくまで感じるだけで空腹を満たしたり栄養の補給などが出来るわけではない。
「下手に仮想世界でうまい物食べると、リアルに戻った時にショックだよね」
「ああ、それ分かります。でも、こっちではいくら食べてもお腹膨れな――」

『ハローおはろーこんにちはこんばんはおはようございまーす』

突然、鳳牙の言葉に被って元気な女の子の声が直接頭の中に響いてきた。

特定の相手に声を届ける【ささやき】という会話機能だ。複数名にも設定できるため、その声はフェルドにも届いたようだった。彼は苦笑しながら肩をすくめている。

『なんですよう。鳳兄（ほうにい）ログインしたんなら教えてくださいよね。今日こそボスからレアアイテムドロップさせるんだから。って、そういえば今何処ー？』

『相変わらず元気そうだな、小燕（シャオイェン）。今はトリエルの酒場でフェルドさんと一緒だよ』

チャット設定を変更して、鳳牙も小燕に【ささやき】を返す。

『おー、フェル兄も一緒かー。あいさー。十分くらいで行くから待っててちょーだい』

『分かった』

通信が終わり、鳳牙はチャットの設定を元に戻した。

「小燕が十分くらいで来るそうです」

「うん。じゃあ、後は――」

「拙者をお探しか？」

「「うおあっ！」」

突如天井から逆さまに生えてきた黒装束に驚き、鳳牙とフェルドはそろって椅子から転げ落ちた。

「うぬ。すまぬで御座る。『煌星(きらぼし)忍軍』の報告会を終えてすっ飛んで参ったので御座るが、少々驚かせ過ぎ申したか」

しゅたっ、と腕を組みつつ床に降り立つその姿は、一部の隙もなく一目見て忍者と呼称せざるを得ないものだった。

ただし、筋骨隆々ではち切れんばかりの巨体をどうにかこうにかぴっちぴちに収めているという、何かの冗談のような状態だったが。

「鉄馬(てつま)！　お前わざとやってるだろ！？　何をどうすっ飛んでくれば天井から生えてくるんだ！」

床に尻餅をつきながら、フェルドが筋肉忍者に対して怒りをあらわにしている。現実世界で二人は同じ大学に通う友人同士なので、普段は物腰の柔らかいフェルドもことこの忍者に対してはかなり素が出てしまう事がある。

「フェルド殿。今の拙者は鉄馬では御座らん。アルタイルで御座る」

装束から唯一見える青い瞳が、不平を伝えるようにわずかに細まった。

「あ、ああ悪いついいつもの調子で――って、そうじゃなくてだな……」

「アルタイルさん、その巨体で忍ばれて驚かされると、ちょっと心臓に悪いです」

フェルドがなんと言ったものかと悩んでいるのを見て、鳳牙が助け舟を出す。普段から気心が知れていればこそ言い方に悩む事もあ

るのだろう。こういう場合は他人から言った方が効果的である。

「うぬ。鳳牙殿がそう言うのであれば、今のような登場は金輪際止めておくで御座る」

アルタイルががっしりした腕を組んだまま鷹揚に頷いた。

「ところで、今の天井から来たのってもしかして『壁歩き』ですか？　忍者のマススキルの」

「うむ。鳳牙殿がテストの間、フェルド殿に付き合ってもらって忍びの里の首領と一騎打ちをし申してな。見事忍者のマススキル解放と相成ったわけで御座る」

アルタイルがボディービルダーのようなポージングを取る。伸縮性に富む素材のはずの黒装束がみちみちと悲鳴を上げているような気がした。

「へ、へえ。『壁歩き』って天井も歩けるんですね。地下迷宮の天井から見下ろしたら面白いだろうなぁ」

「うぬ。それは考えなかったで御座る。今度やってみて、スクリーンショットをブログにでも貼るで御座る。む、亭主。拙者にもこちらと同じ飲み物を頼むで御座る」

アルタイルが注文と同時に現れたグラスを大きな手で掴むと、

「遅れ申したが、テストご苦労だったので御座る。鳳牙殿」

椅子から落ちても手放さなかった鳳牙のグラスにチンと合わせてくる。

「ありがとうございます」
「さすれば、次はもう夏休みで御座るな。フェルド殿、拙者らはいつからが夏季休業であったか？」
「え？　ああ、えっと――」

服に付いた埃をパンパンと払いつつ、フェルドが中空を見つめる。鳳牙からは見えないが、今フェルドの前にはカレンダーが表示されているはずだ。

「今日が六日で海の日が十九日だから、今日を入れて後十四日だな。鳳牙も同じじゃない？」
「そうですね。海の日からですから同じです」
「はいはいはーい。小燕ちゃんもその日から夏休みでーす」

突然、元気のいい声が会話に混ざってきた。

三人そろってその声のした酒場の入り口へ視線を向けると、全身ごてごてのフルプレートメイルにフルフェイスのカクカクしいヘルメットまで装備した、それでいてものすごくちんまい背丈のキャラがビシッと右手を上げているが視界に入ってくる。

頭上には『小燕』というネームだけが白い字で表示されており、彼女もギルド未所属であることがうかがえた。

「うぬ。小燕殿で御座るか」
「きっかり十分だね。えらいえらい」
「小燕、そのバケツみたいな頭防具、何？」

アルタイル、フェルド、鳳牙が三者三様の返事を返すと、

「はいはい小燕ちゃんですよ。えへへ、褒められちった。バケツとは何だバケツとはー」

小燕から忙しく三通りの返事が返ってきた。

彼女うんしょうんしょとヘルメットを取り払うと、ルビーのような紅い瞳をさらけ出す。髪の毛はポニーテールになっており、彼女が首を振るのにあわせて左右に揺れていた。まさに子どもといった可愛らしい顔立ちで、ぷっくりとしたお餅のような頬には、左側にだけ薄赤の太線でデフォルメされた雲のような刺青が施してある。

「あー、何か喉かわいた。マスター、皆が飲んでるの頂戴。お酒だったら別のでいーや」

注文と同時にカウンターに現れたグラスを取り、鳳牙は小燕に手渡してやる。

「ありー。んぐんぐ。あ、これ美味しい。でも結構高いなぁ。お財布ががが。ま、狩りで稼げばいいんだろうけど」

グラスを見つめて眉をひそめる小燕。鳳牙はその態度に違和感を覚え、

「小燕。君、結構お金溜め込んでたよね」

「あ、うん。でも欲しいもの出来て使っちった」

てへっ、と舌を出しつつ小燕が自分の頭をコツンと小突いた。

「欲しいもの？」

「そそ。御影（みかげ）じーちゃんの銘入り防具一式ってか、今着てるやつ」

小燕がガシャガシャと音を立てながら自分の体を示してくる。よくよく見れば、その防具のデザインに鳳牙は見覚えが無い。

こんなデザインのプレートメイルがあっただろうかと鳳牙が首をかしげていると、

「鳳牙殿のテスト期間中に武具追加のアップデートがあったで御座る。その様子では、まだ掲示板などを見てはおらぬようで御座るな」

アルタイルに言われて、鳳牙はそういえばとゲーム内から閲覧と書き込みが可能な専用掲示板の存在を思い出した。

ゲーム内掲示板では個々人が様々な内容のスレッドを作成し、それに対して不特定多数の人がレスをつけていくことで連絡を取り合っており、ツリー形式で表示される。

鳳牙はもっぱら見て読む（ＲＯＭ）専門で、物品の相場に関するものとモブ情報関係のスレッドをたまに閲覧している。

「その日のうちに御影さんが全部のレシピ見つけて、生産関係のスレッドに細かく書き込んでたよ。その中で僕らに関係ありそうなのが今小燕の着ている――」

「各装備箇所ごとに魔法防御ＵＰの効果が付いてるマジックプレートメイルなのだ。この装備のおかげで小燕ちゃんの耐久性は当社比一・二倍だぞー」

フェルドの言葉をかっさらった小燕は、がおーと両手を顔の横に構えて歯をむき出しにしている。

「へえ、魔法防御が上がるのは美味しいな」

そんな小燕に微笑みながら、鳳牙はまじまじと新装備を着込む彼女を観察する。

小さい成りで『重戦士（ウォリアー）』を選択している小燕は、物理攻撃力と防御力において圧倒的な性能を誇るが、唯一魔法系統に対する脆さが難点だった。

物理系特化職業の宿命なのだが、それを装備品である程度克服出来るとなれば、小燕はまさに移動要塞の如き実力を発揮するだろう。

「あ、ちなみにこのマジックプレートメイルって、フル装備時の防御力のうち三分の一はこのヘルメットに偏ってるんだよ。だからバケツとか言っちゃだめー」

「……え？」

小燕の言葉に、鳳牙は一瞬言葉を失った。そしてまじまじと彼女の持つヘルメットを凝視する。

詳しい能力値はまだ分からないが、鳳牙の知識にあるプレートメイルの総合防御力を参考に計算して、その数値の三分の一がヘルメットに集中しているという事実に驚愕する。

「……うえ……」

「うぬ。気持ちは分かるで御座る。この偏りのせいで、頭だけそれを装備する効率重視の連中が増えたで御座る」

「狩場にあの頭だけで残りは裸の集団が現れた時はちょっとシュールだったね。何処のホラーコメディーかと思ったよ」

フェルドとアルタイルがそろってしみじみと頷く。鳳牙としても

想像するだにシュールだ。とても酷い光景だろう。

「頭だけなんて邪道だよじゃどー。全部装備してこそ鎧じゃん。ま、全部そろえるとミスリルインゴット計百八個と各部位で一個ずつ玉鋼とダイヤモンドを使うから大変っちゃ大変だろうけどさー」

「え？　それミスリル製なのか？」

「うん。ほいこれ　マジックプレートヘルメット＜天之御影命＞の性能」

小燕が言うや否や、喋った言葉と同じ文字が吹き出しと共に彼女の頭上に出現し、その一部が下線付きの直リンク文字として表示される。吹き出しは出現直後から徐々に透過されて消え始めていた。

鳳牙が吹き出しの直リンクに触れると、目の前に装備品の性能表が出現する。そこの材質の部分に、確かにミスリルという表記があった。

「ほんとだ。ミスリル製品だから耐久値も高いし見た目よりずっと軽い……ってか何だこのアーマー（AC）クラス！　五十・一とかどんだけだ！」

「他の部位はふつーよかちょっと硬めかな。えっと　マジックプレートキュイラス＜天之御影命＞　マジックプレートスポールダー＜天之御影命＞　マジックプレートガントレット＜天之御影命＞　」

新たな吹き出しの中に三つのリンクが張られる。文章量に制限があるので、小燕がそこで一度文章を切って、

「んでー、マジックプレートフォールド＜天之御影命＞　マジックプレートタセット＜天之御影命＞　マジックプレートグリーブ＜天之御影命＞　いじょー」

残りを新たな吹き出しとして出現させた。

鳳牙は小燕の頭上に羅列される装備の性能を順次確認して行き、段々と渋い顔になる。

「えっと今こうだから最後にこれを足して……合計百五十三・七……だと？　最大強化オリハルコンプレートで固めても最高百三十一・四だってのに……。これ強化したら何処まで行くんだよ」

「あー、強化出来ないよこれ。残念だけどさすがにそういうバランス調整ががが」

「強化出来れば壊れ性能だったんだけどね」

「うぬ。すでに壊れた性能と見る事も可能で御座る」

それぞれが新装備の性能に関して感想を述べていく。

と、続けてアルタイルが、

「拙者としては回避の性能が上がる『疾風（はやて）の指輪』が欲しいところで御座るが……」

鳳牙の知らないアイテム名を口にし、彼の興味はそちらへ移る。

「アルタイルさん。その指輪も新装備ですか？」

「うぬ。指の装飾品で御座ってな。今拙者の装備している風の指輪が回避＋五の性能で御座るが、疾風の指輪は回避＋九の性能があるで御座る」

「うっわ。それは回避マニアとしては手に入れたいですね」

鳳牙の言葉に然りとアルタイルは大きく頷き、しかし直後にしょ

んぼりした顔のエモートを出現させると、腕を組んで唸り始めた。

「どうしたんですか？」

「うぬ。実は製作に必要な『風雲石（ふううんせき）』の持ち合わせが一つしかない故、残り四個をどうにかして集めねばならんので御座る」

「『風雲石』ですか？　確か俺が最後にログインした時に御影さんに渡そうと思って野良ＰＴのドロップ分配でそれ選んだような……えっと、ちょっと待って下さい」

鳳牙は強面のバーテンへ向き直ると、メニューから銀行を選択してアイテムボックスを開いた。

緑色の鉱石アイコンを選択し、自分の持ち物ボックスへ移動させ、銀行ウィンドウを閉じる。

「ほら　風雲石　これですよね？　何の因果か四つあるんですけど」

「「「おおっ！」」」

鳳牙がリンクを貼って見せると、フェルド、小燕、アルタイルの三名がそろって驚きのエモートを出現させる。

「鳳牙殿。して、いくらにてお譲り頂けるで御座るか？」

「え？　いやいいですよ。俺が持っててもお御影さんにあげるくらいですし、せっかくだから使って下さい」

鳳牙はそのままアルタイルをターゲットしてトレードコマンドを実行する。

「む。待つで御座る。貴殿にとって不用品なれど、それは確かにレアドロップで御座る。対価も無しに受け取るわけには行かぬで御座

る」
「んー……じゃあ、何か欲しいもので来た時に手伝ってくれればいいですから。先行投資って事ではどうです？」
「うぬ。しかし……」

鳳牙はすでにアイテムをセットして了承のボタンを押している。しかし、アルタイルの決心がつかないためにトレードウィンドウが開きっぱなし状態だった。このままでは数十秒で自動的にキャンセルがかかってしまう。

「いいんじゃないか？　アルタイル。好意は素直に受け取るものだよ？」
「くーっ。さすが鳳兄。あたしたちが出来ない事を平然とやってのける。そこに痺れる憧れるぅ。いいなー。あたしもなんか欲しー。具体的にはお金欲しー」

外野がやんややんやと後押しするが、それでもアルタイルは迷っているようだった。

これでこのままキャンセルがかかってしまうと、もう一度トレードを申し込むはかなり微妙である。さてどうしたものかと鳳牙は考えを巡らし、

「……そうだ。アルタイルさん」
「うぬ？」
「もしも俺が今これを持ってなくても、どうせみんなで狩りに行って揃えようって事とかになるんでしょうから、早いか遅いかの違いだけじゃないですか？」

かなり苦し紛れだと鳳牙自身自覚もあるが、とにもかくにも受け

取ってもらいたい気持ちに変わりはない。宝の持ち腐れにするよりも、必要とする人の元に渡ってこそのアイテムだ。

「……うぬ。鳳牙殿の気持ち、確かに受け取ったで御座る」

その言葉と同時にトレードウィンドウは閉じられ、無事トレードが終了した旨のアナウンスが流れる。

「しかし、この恩はいずれ必ず返すで御座る」

「期待してます」

無事受け取ってもらえた事に、鳳牙は内心で胸を撫で下ろす。

「うぬ。しからば御影殿に連絡を取る故、しばしだんまりで御座る。ついでに鳳牙殿の件も伝えるで御座るよ」

「え？」

「了解」

「はいよー」

鳳牙のみ疑問符を返し、フェルドと小燕はそのまま受けた。

どういう事かと鳳牙がフェルドに視線で問いかけると、

「御影さんから鳳牙がログインしたら連れてくるように言われてたんだよ。いつも通りここに集まったのはそういう理由もあっての事ってわけ。ここが一番御影さんの工房に近いからね」

「なるほど。でも、御影さんが俺に何の用なんですか？」

「さあ？　僕らも連れてくるようにしか聞いてないんだ」

フェルドが慣れた仕草で肩をすくめ、ついと眼鏡の位置を直した。

「あたし的にはきっとサプライズな何かがあると見てるわけですよ」
「……サプライズ、ねぇ」
鳳牙は左目に古傷を持つ巌のような男を思い出す。気に入った相手としか取引をしない職人気質な人が、はたしてサプライズなど考えるだろうか。
少なくとも鳳牙の記憶に残る人物は、そういった趣向を凝らす人間ではなかった。
――なんにせよ行ってみれば分かるか。
そう結論付けて、鳳牙はぐいっと体を伸ばし、パタパタと尻尾を揺らした。

◆

その１（後書き）

Ｈ２３－１１－２５　文章レイアウト修正　一部分章修正

その2

昼間でもやや薄暗いカルテナの森は、丘陵地帯に巨木が乱立する視界の悪いフィールドエリアである。
いつも不気味なほどにひっそりとしており、他のプレイヤーの姿も特定の場所以外ではめったに見ない。

人気が少ないのは、生息する植物系・亜人系及びアンデッド系モブの平均レベルが高めである事と、三種類のボスモブ以外のドロップが渋い上にそのボスモブにすら美味しいドロップ品があまりないという点が上げられる。
このＭＡＰでしか採れない食物系アイテムも存在するが、それらは月森の町トリエルからの入り口付近にオブジェクトモブが分布しているため、奥まで来ようとする物好きは極めて少ないのが現状だ。

「その数少ない物好きがここに四名ほどいるわけだけど、ね！」

不気味な声と共に繰り出された骨剣士（ボーンファイター）の斬撃を、フェルドは流れるような体捌きでかわし、手に持つ杖でカウンター気味の攻撃を加える。
打撃の効果エフェクトが光り、続いてクリスタルを打ち鳴らしたような澄んだ音と共に骨戦士の胸元で白い爆発が起こった。
フェルドの職業、『司祭（ビショップ）』のマスタースキル『聖浄付加（エンチャントホーリー）』の効果だ。
本来は他のプレイヤーキャラにアンデッド系モブに対する特攻を

付加する魔法だが、会得者本人には恒常的にその効果が付与され続ける。

「縛鎖陣（バインド）！」

爆発で骨剣士が怯んだ隙に、フェルドは即座に拘束魔法を詠唱し、地面に浮かび上がった魔法陣から伸びる魔力の鎖が敵を絡めとる。

司祭は唯一蘇生魔法を行使できる回復魔法のエキスパートとして知られているが、その他にもステータスアップ・ダウン魔法や攻撃補助の付加魔法をはじめ、行動妨害の魔法もこなせる職業である。

パーティーに一人の司祭がいるかいないかで、その生存率は三割以上違うとさえ言われていた。

「アルタイル！」

「うぬ！」

フェルドの声に応じ、がんじがらめで身動きの取れない骨戦士の背後からアルタイルが右手に持つ刀を一閃させる。その一撃で、骨剣士の残りＨＰを全て平らげ、物言わぬ骸へと還した。

「さりとて物好きといえば――小燕殿！」

言いながら、アルタイルは刀を左手に持ち替える。空いた右手を懐に手を入れ、抜き出すと同時に何かを投げ放った。

放たれた丸い物体は放物線を描いて地面に落ち、両手剣を構えて骨剣士二体と、その一・五倍は大きい鉄鎧を着込んだ斧装備の骨戦士長（ボーンキャプテン）一体の同時攻撃を防いでいた小燕の方へ転がっていく。

「今の小燕ちゃんに傷をつけるのは至難だぞ、っと」

足元に至った丸い物体を確認して、小燕は骨剣士たちの攻撃を力ずくで押し返し、その反動で自身は後方へと逃れる。

その後を追おうとして、骨剣士たちがそれまで小燕の立っていた位置へ足を踏み入れた。途端、爆音とともに突如として大きな火柱が地面から立ち昇り、骨剣士たちを飲み込む。

先ほどアルタイルが投げた火柱の罠玉（わなだま）の効果だ。

アルタイルの職業『忍者（ニンジャ）』は刀剣系の武器職に属するが、その真骨頂は多彩な攻撃方法にある。

強力な攻撃を避けて無効化する回避能力を盾に、刀による刺突・斬撃の他、目眩まし・目潰し・トリモチなどの各種ステータスダウンを引き起こす『投玉（なげだま）』、火柱・毒煙・痺れ撒菱（まきびし）など設置型のトラップを仕掛ける『罠玉』を使い分け、戦局を有利に展開させるオールラウンダーである。

「アル兄ナイス！　よっしこれでも喰らえっての！」

自分の身長よりも長大な大剣を小枝のように振り回し、間合いをつめた小燕が横薙ぎの一閃で火柱ごと敵を叩き切る。重戦士の放つ高威力の一撃で哀れな骨剣士はバラバラに砕けて地面に転がったが、防御力に長ける骨戦士長だけは健在のまま、行動直後の硬直で動けない小燕に狙いを定めて大きく斧を振り上げていた。

しかし、彼女はそれに焦るでもなく、

「物好きといえばなんと言っても、だよね？　鳳兄！」

「応！」

小燕の横を、銀の風が走り抜ける。鳳牙は跳躍と同時に骨戦士長の鎧を蹴りつけ、強引に後退させた。

結果、骨戦士長の攻撃は小燕にも鳳牙にも届かず、何もない地面を叩くだけに終わる。

「やっちゃえ鳳兄！」

小燕が言うのとほぼ同時に鳳牙は隙だらけの骨戦士長に肉薄し、

「はあああっ！」

その四肢を霞ませる連続攻撃を叩き込んでいく。

鳳牙は『獣人』だが、基本的な戦い方やスキルは『拳闘士（グラップラー）』の上位職『拳王（フィストマスター）』と変わりはない。

全職業中最速の攻撃速度と、全ての物理系スキルをモーションキャンセルで連携出来る利点を生かし、瞬間火力で圧倒するのがオーソドックスな戦闘スタイルである。

ただし、その回転率の良さによってスタミナの消費が激しいため、何らかの形でスタミナの回復手段を用意出来ないとすぐにガス欠になってしまう欠点がある。

スタミナをカラッポにしてしまった場合は、最大スタミナの一割まで回復しないとその場から動けなくなるペナルティがあった。

戦闘においては致命的な隙になるため、戦闘職はスタミナ管理能力が不可欠になるのだ。

特に物理防御が高い相手には自然と必要となる手数が多くなるため、スタミナ管理に失敗するとガス欠の危険性が大きくなる。

だが、こと鳳牙に関してはその心配は無用だった。スタミナ管理能力はもとより、鳳牙の持つリミテッドスキルが定石を覆す。

「ふっ！」

大きく息を吐き出すと同時に連撃を止めた鳳牙は、骨戦士長の反撃を後方に跳躍してかわす。その時にちらりと相手の残りヒットポイントを確認し、ニヤリと鋭い犬歯を覗かせた。

骨戦士長が怨嗟の声を上げながら鳳牙に近づいてくる。鳳牙は相手が自分を間合いに捉え、攻撃のために斧を振り上げて防御が疎かになった次の瞬間、渾身の踏込で相手の懐に潜り込み、続く動作で相手の鎧にそっと掌を押し当てた。

「破っ！」

気合の声と共に静かなる一撃が叩き込まれ、三分の一近く残っていた骨戦士長のヒットポイントゲージが一瞬で空になる。

骨戦士長は数瞬の沈黙の後、糸の切れた操り人形のようにその巨躯を大地に横たわらせた。

「ふえー。やっぱりそのスキルつえー」

先に仕留めた骨剣士からドロップ品を回収（ルート）していた小燕が、口笛を吹くように賞賛する。

「まあ、何せリミテッドスキルだしね。でも、密着しないと当たらないからこれはこれで結構使いどころが難しいんだよ」

同じように鳳牙も骨戦士長のドロップを確認し、

「ちぇっ。レアはなんもなしか」

渋いドロップに顔を歪める。

そこへ、分散して応戦していたフェルドとアルイタイルがやって来た。

フェルドがずれた眼鏡の位置を直しつつ、

「リミテッドスキル『徹(とお)し』。防御力無視の五倍物理ダメージだっけ？　僕のリミテッドスキル『栄光への一撃(ワンショットアットグロウリー)』でダメージ倍化しなくてもこれだもんなあ」

「うぬ。ダメージログに一撃で八百近いダメージが出ているので御座る。ギガンテスが十発足らずで落ちそうな威力で御座る」

「防御力無視ってのがミソだよね。鳳牙は素手職だからどうしたって武器職に比べて基本攻撃力が劣るけど、そうであってもとんでもない威力だよ」

「マスタースキル使えばもうちょっと威力出ますけどね。元々このスキル、素手職限定ですから。武器持ちに同じスキルあったらやばいですって。もしも小燕が使えたら、素でダメージ四桁超えますよ？」

「おー！　四桁いいねー。あたしの場合ランク十スキルでも三百届かないからなー」

「「「十分だよ（で御座るよ）」」」

「おー。はもったはもった」

けらけらと小燕が笑う。本当は可愛らしく笑う彼女はＰＴの和み系担当なのだが、今はその顔もバケツメットの下に隠れてしまっており、全く和めない。どころか不気味ささえ覚える有様だった。

「なあ、小燕。せめてフィールド移動中はそれ外さない？」

「何で？」

小燕がちょこんと首を傾げ、疑問符のエモートが頭上に出現する。

可愛いはずなのにあんまり可愛くないことに、鳳牙だけでなくフェルドとアルタイルも静かに肩を落とす。

「いや、ほら、ちょっと癒しが欲しいかなーって」

「えー……。うーん……じゃあ、鳳兄がそのモフモフをあたしの気のすむまで触らせてくれるならいいよー」

すっと小燕の指が指すその先には、獣人たる鳳牙の銀毛たっぷりの尻尾がぱたぱた振れていた。

「えっと、それは――」

小燕の申し出にどう答えたものかと鳳牙が思案しようとした時、

『安いもんじゃないか。それでこのＰＴの和み担当が復活するのなら、是非取引に応じるべきだ』

『その通りで御座る。ＰＴの精神の安定のためにも、ここは漢を見せるで御座る』

フェルドとアルタイルから鳳牙への【ささやき】が送られてくる。

「な――」

反射的に返事を返そうとして、鳳牙は今の言葉が小燕には届いていない事を思い出して言葉を飲み込んだ。

「……な？　な、がどうしたの鳳兄？」

「え？　ああ、いや、ちょっと待って」

鳳牙はチャットを【ささやき】に切り替え、

『何を言ってるんですか！』

『何って、そりゃ提案だよ。どうやって小燕の愛らしい姿を観察し、日々の心の疲れを癒すかという、崇高な目的のね』

『うぬ。拙者、小燕殿があの装備を手に入れてからというもの、めったな事では外してくれない事に憤りを感じていたところで御座る。さすれば鳳牙殿、これは千載一遇の機会に御座る』

『けど、この尻尾ってリアルの自分にある物じゃないんで触れられると、その、結構来るんですよ？』

『大丈夫。どんな事になったって』

『鳳牙殿は鳳牙殿で御座る』

反論してみたものの無駄に終わった。フェルドとアルタイルの二人は結託して鳳牙に承諾を迫って来ていた。

「鳳兄？」

呼ばれて、鳳牙が再び小燕に視線を向ければ、彼女はヘルメットの奥でキラキラと目を輝かせている。

手詰まりだった。

「……分かった。取引成立だ」
「おおっ！」
小燕が両手を挙げて喜びを表現し、フェルドとアルイタイルがパンとハイタッチを決めた。
「じゃ、早速」
ガシャガシャと金属の篭手を外して素手になった小燕は、すすすっと鳳牙の背後に回りこみ、一切の躊躇いなくふさふさの尻尾を握り締めた。
「――っ！」
声にならない悲鳴がカルテナの森に響き渡り、しばらくの間途絶える事はなかった。

◆

「っで、さっき流れ切れちったけどさー。本当の物好きって御影じーちゃんみたいな人のことだよねー」
約束どおりにヘルメットを外して素顔を晒す小燕が、どこか上機嫌かつつやつやした顔で隣のフェルドに話しかける。
「そうだね。いくら基本素材を自給できるからって、カルテナの森に限定アイテムで工房作るなんて御影さんくらいだと思うよ。とい

うか、実際町中以外で工房持ってるの御影さんだけでしょ」

くいっと眼鏡の位置を直しつつ、フェルドが応じる。時折襲い掛かってこようとする雑魚モブに催眠魔法をかけて黙らせつつ、一行はさらに森の奥へと進んでいた。

先ほどとは違って戦闘を行わずに回避しているのは、

「うぬ。鳳牙殿、少しは回復されたで御座るか？」

「……すみません。まだ無理です。俺本体のヒットポイントがギリギリです」

アルタイルに背負われている鳳牙が小燕の尻尾攻めに撃沈し、ぐでんぐでんになっているせいである。

攻めが終わった後は全身に力が入らず、歩く事すらままならなくなっていた。

「うぬ。すまぬで御座る。よもや小燕殿にそちらの攻めの才能があるとは思わなかったで御座る」

「……」

鳳牙としては悪夢の時間だった。そのせいか記憶の封印が行われたようで、わずか数分前の事だというのに何があったのかほとんど覚えていなかった。

ただ、『ここかー？　ここがええのんかー？』という小燕の謎の台詞だけが頭の中にこびり付いて離れない。しばらくは夢に見そうだった。

「ご迷惑おかけします」

「遠慮はいらんで御座る。なに、もう何度も通った道。戦闘を避ければ何の問題も御座らぬ故、しばし休まれるといいで御座る」
「ありがとうございます。お言葉に甘えます」
「うぬ。頼り頼られ助け合う。それが仲間というもので御座るよ」

仲間という言葉に、鳳牙は温かみを感じる。この場にいる四人は全員同じギルドに属しているわけではないが、それでも確かな仲間である。
ゲーム開始当初からさしてギルドに興味を持っていなかった鳳牙だが、最近になってもしも気の合う仲間でギルドを作れればもっと楽しいだろうかと思う事もあった。

「アルタイルさん」
「うぬ？　何で御座るか？」
「アルタイルさんの煌星忍軍って、どういったギルドなんですか？」

だから、というわけでもないのだが、鳳牙は思わずそんな質問をしていた。

「うぬ。鳳牙殿がギルドについて聞くのは珍しいで御座るな」
「そう、ですか？」
「うぬ。まあそれはさておき拙者のギルドで御座るが、なに、いわゆる特化ギルドというやつで御座る」
「特化ギルド……？」

聞きなれない言葉に、鳳牙は疑問符のエモートを出現させる。

アルタイルがはっはっはと大きく笑い、

「難しい事は御座らん。煌星忍軍への参加条件は二つに御座る。そ

の一、職業が忍者であること。その二、キャラクターの名前が星に関係するものであること。それだけで御座る」
「……えっと、それはつまり、ギルドの構成員が全員忍者だけってことですか？」
「然り。現在総勢で十二人が登録されているで御座る。星の名前はそれなりに人気がある故、片仮名・平仮名・ローマ字表記と様々で御座るな」

アルタイルはつらつらと一等星の名前やら星座の名前を並べていく。鳳牙に聞きなれたものもあれば、初めて聞く名前もあった。

「月に一度は全員でイベントを行っているで御座る。忍者のみでのボスモブ討伐はなかなか熱いで御座るよ？」

快活に笑うアルタイルの背で、鳳牙は十二人揃い踏みの忍者軍団を想像する。

ある者は斬りかかり、ある者は投玉をぶつけつつ、四方八方から間断なく罠玉を設置して圧殺する。実に爽快な光景だろう。
専門の回復役はいない。盾役もいない。安定性に欠ける構成による狩り。

それは効率を考えれば決して成り立たないだろう。心底ゲームを楽しもうとするからこそ、また同じ職業同士という連帯感があればこそ成立する遊び方だ。

「いいですね、そういうの。すごい楽しそうです」
「うぬ。ＣＭＯはゲームで御座る。ゲームとは楽しんだ者が勝ちに御座るよ」

アルイタイルの言葉はもっともだった。ゲームとは楽しむものであって、楽しめないものはゲームではない。

初めてログインした時、鳳牙は確かにＣＭＯを楽しんでいた。キャラクター操作に慣れ、夢中になって強くしていった。強くなっていく過程が面白かった。

一人でやれることの大半をやりつくした頃、偶然にもリミテッドスキルを会得し、その威力に酔った。

それからの期間が、鳳牙にとって一番苦痛な時期でもある。

周囲から引っ張りだこになり、初めの内は喜んでそれに応じてもいた。だが、やがてそれらが単に効率的な面での鳳牙を求めただけで、決して鳳牙と楽しもうと考えている者はいないという事に気が付いてしまった。

そんな付き合いに辟易して、鳳牙は突発的な野良パーティーに参加する時以外、完全なソロプレイヤーとして活動していた。

あの日フェルドと出会い、流れでアルタイルを紹介され、狩場で小燕と出会うまで、鳳牙はずっと一人で――独りだった。

アルイタイルの大きな背中に体重を預けつつ、鳳牙はしばらくうとうとして精神的な疲れを癒して行く。

そんな起きているのか寝ているのかという境界をしばらく行ったりきたりしていると、

「着いたー」

という小燕の元気な声が聞こえてきて、鳳牙は意識を覚醒させた。

ひょいとアルタイルの肩越しに前方を見れば、巨大な焼き釜とそ

れに隣接するレンガ造りの家屋が見えた。最早見慣れた光景の一つだ。

「アルタイルさんありがとうございます」

「うぬ」

礼を言ってその背中から降りると、鳳牙は改めて目の前の工房を見つめる。すると、

『いつまでもそんな所におらんで、着いたのならとっとと入って来い』

ややしゃがれた壮年の男の声で【ささやき】が送られてきた。

「だそうですよ？」

「よく工房の中から外の様子が分かるよね」

「うぬ。只者では御座らんからな」

「生産職かと思ったら実は『武者（サムライ）』ですげー強いもんねー」

それぞれに反応を返しつつ、四人は歩を進める。工房の扉は頑丈そうな鋼鉄製で、家主と家主の許可が与えられた者以外には絶対に開けない仕様になっている。

鳳牙が扉に触れると音もなく扉が開き、四人はぞろぞろと工房の中に足を踏み入れた。

「来たか」

中へ入った四人へ向けて、工房の奥、作業台の向こうから声が聞こえてくる。

そこには鳳牙よりもやや背の高い、浅葱色の着流しを着た白髪の老人が立っていた。左袖は中身が無いためにぷらぷらと揺れているが、隻腕というわけではなく、左腕は胸元に収まりつつ懐の隙間に引っかかっている。

白一色の髪は腰まで伸び、刀の鍔を髪留めにしてまとめていた。だがもっとも目を引くのは、左の黒瞳を縦に走る裂傷の跡だろう。

さながら、時代劇に出てくる老年の侍といった風情の人物である。

頭上に表示されるキャラクターネームは天之御影命（あめのみかげのみこと）。長ったらしいのでみんな御影と縮めて呼んでいる。

職業はメイン職として『武者』なのだが、ステータス上は四つ以上の生産スキルを一定以上極めた上で転職可能な『匠（マイスター）』となっていた。

ＣＭＯにおいてはメイン職業として戦闘職八種類、生産職六種類、確認されている上位職が十六種類存在し、それぞれに職業専門スキルが存在する。これらの内、生産職の職業スキル鍛冶・裁縫・木工・宝石細工・料理・錬金術はメイン職業として選択していないでも複数、あるいは全部を鍛える事が出来る。

ただし、メイン職として生産職を選択した場合は様々な生産補助効果を受ける事が出来るため、通常職を選択した上で生産スキルを取るプレイヤーは少ない。

その中で御影は料理と錬金術以外の四つを極めた『匠』であり、補助効果無しで最高級品の『刻銘』武具を作成出来る強者であった。

「ふん。言いつけ通りに連れて来たみたいだな」

「ええ。御影さんの頼みとあれば、例え内容が分からない依頼であっても受けますとも」

フェルドが仰々しく礼をすると、御影は顔にしわを刻んでちっと舌打ちを漏らした。

「あ、えっと、お久しぶりです御影さん。今日は何か俺に用があると聞いたんですけど……」

割といつものやり取りなので、鳳牙は内心で苦笑しながら御影に話しを振る。こういうときの進行役は決まって鳳牙が受け持っていた。

「ん？　ああ、そうだ。ま、とりあえず適当にその辺に座れ」

顎で示されたところには、ちょうどよく四脚の椅子がある。各々促がされるがままに椅子に腰掛けた。

全員が腰掛けたのを確認して、御影がすうと小さく息を吸い込む。

「今日来てもらったのは他でもねえ。ちょっとした素材を取りに行って欲しいと思ってな」

「素材、ですか？」

鳳牙は内心で首を傾げた。御影から材料の調達を依頼される事は珍しい事ではないが、今回のように直接呼びつけられた上で依頼をされた事は一度もなかったからだ。

ただ単に依頼するだけならそれこそ【ささやき】などで伝えてもらえればすむ話である。

そう考えたのは他の三人も同じのようで、そろって疑問符のエモートを発生させていた。

「いったい何の素材ですか？」

「……火之迦具土神（カグツチ）の魂だ」

「……は？」

聞きなれないアイテム名に、鳳牙はぱちぱちと目をしばたかせて間の抜けた声を出す。

正確に言えばそのアイテムを持ってそうな相手に心当たりはあるが、そのようなアイテムをドロップするという話を聞いたことがないのだ。

それは他の面々にしても同じだろう。再び頭上に疑問符のエモートが出現していた。

「いや、別に火之迦具土神じゃなくてもいい。建御雷之男神（タケミカヅチ）でも闇御津羽神（クラミツハ）でも構わねえ。いずれにせよ、それら神々のいずれかの『魂』という素材を手に入れてきて欲しい」

「えっと、御影さん？」

こちらの状況に構わずぽんぽんと話を進める御影に対し、鳳牙がストップをかける。

「なんですかその神々の『魂』って。そんなものドロップしましたっけ？」

「ああ？　……あー、そうか。悪いな。お前らはレシピを見てないんだったな」

何かを思い出したようにポンと御影が手を打ち、しばらく止まっ

たかと思うと、

「ふむ。さしあたってこれだな。　鍛冶レシピ　轟炎拳カグツチ
確認してみろ」

御影の頭上に表示されるチャットウィンドウ。そこにはまたも見慣れない、おそらくはナックル系統の武器の名前があった。
言われるがままにリンク文字を選択すると、目の前に作成に必要な材料の一覧が表示される。

「えっと、基本武器がオリハルコンナックルで、他に紅蓮石（ぐれんせき）二十個とミスリルインゴット一個と……ああ、ここでさっきの火之迦具土神の魂が出てくるのか」
「なるほどね。でも、素材もそうだけどこんな武器聞いたことないな。神の名前を冠する武器、か。この前のアプデで追加されたものなのかな？」
「うぬ。しかし追加された物は公式発表では名前は伏せられ申したが、種類は公示されていたで御座る。それに沿ってまさに御影殿が全て発見済みでは御座らぬか」
「だよねー。過去のアプデだとしても今更出てくるなんておかしーもん」

鳳牙は表示されるレシピウィンドウの中から作成物のアイコンを選択し、その性能を確認しようとするも、全ての項目が疑問符で埋まってしまっていたので、やや拍子抜けしつつそのままウィンドウを閉じた。

「しかもこれ、性能が見れませんね」
「あ、本当だ。という事は、これはまだ一度も作られたことが無いって事になるよね？」

「ＣＭＯの仕様ではそういう事になるで御座るな」
「おー。全くの未知ってやつだねー。御影じーちゃん、これなーに？」
「それを調べたくてお前らを呼んだんだ。少数精鋭で『神殺し』を達成出来そうなやつなんぞ、知り合いにそうはいねえからな」
すりすりと右手で顎を擦りながら、御影はくああと大きな欠伸をした。
鳳牙はその欠伸が収まるのを待って、
「ところで御影さん、そもそもこのレシピどうしたんですか？」
「知らん」
即答だった。あまりの即答っぷりに、鳳牙は思わずそうですかと返事をして流してしまうところだった。
「えっと、いや、あの――」
「アップデートの日にいつの間にか工房の収納ボックスに紛れ込んでやがったんでな。それとなく生産仲間に聞いてみたが、他に出回ってる代物じゃ無さそうときた。で、面白そうだからちょいと隠しといたってわけよ」
かっかっかと御影が独特の笑い声を上げる。彼は作業台の上においてあったキセルを取り上げ、火をつけて口に加えた。
「運営に通知してもよかったんだが、せっかくの機会だと思ってな。連絡する前にちょいと作れるのかどうか試してみたいわけよ。まあ、やっこさんがちゃんと魂落とすかどうか分からんのが問題だがな」

御影がキセルを吸って、ぱかりと開けた口から紫煙を吐く。
「で、だ。そういう依頼なんだが、受けてみる気はあるか？」
どこか挑発的な物言いで、御影が鳳牙たちに問いかけてくる。鳳牙は左右を見て、それぞれの表情をうかがった。
フェルドは肩をすくめつつ、どちらでもという反応だった。アルタイルは腕を組んでじっと鳳牙を見つめ返してきた。小燕にいたっては、ドキドキワクワクという擬音が見えそうなほどそわそわしている様子だ。
そんな仲間たちの様子を確認して、
「いいですよ。正直新しいナックル系統の武器っていうだけで、俺に断る理由が無いですから」
鳳牙は御影にそう返答した。
「かかっ。お前さんはそう言うと思ったよ。なら話は早い。っと、そういやさっき火之迦具土神でなくてもいいとは言ったが、もしそれの討伐に行くなら餞別を渡せるぜ？」
「餞別ですか？」
「おうとも。ちょっと待ってろ。全員取れるように露店を開くからよ」
言って、御影はごそごそと何かを取り出すような仕草をして、
「よし、もってけドロボー」
その頭上に露店中を意味するアイコンを表示させた。

御影をターゲットして鳳牙がトレードを申し込むと、販売アイテム一覧というウィンドウが表示され、合計で四つの真紅の外套アイコンが表示される。
アイコンの下にはそのアイテムの販売金額が表示されるのだが、今の表示は〇ゴールド（G）となっていた。つまり無料である。

「うわ、これ『イフリートマント』じゃないですか！　御影さんこれ露店で買ったら五十万ゴールドはくだらないですよ！？」

突然、フェルドが大きな声で驚きの言葉を口にした。

慌てて鳳牙がアイテム性能の表示ウィンドウを確認する間に、

「なんと！　属性ダメージ二割削減のあの装備で御座るか！」
「すっげー。本物手に取んの初めてだー」

すでに露店から真紅の外套を入手していたアルタイルと小燕が手に持ってしげしげと眺めている。

「……ほんとだ」

遅ればせながら鳳牙も外套を〇ゴールドで購入し、その性能を確認する。

背中の装飾品扱いの防具で、付与効果は火属性攻撃のダメージを二十パーセント軽減するというものだ。一撃の重い神クラスのボスモブとの戦闘においては、この性能差は十分に生死を分ける。

これ以上ないくらいの餞別だった。

「御影じーちゃん。これもらっていいの？　それともレンタル？」
外套をぎゅっと胸に抱いて、小燕が自然な上目遣いで御影に尋ねる。思わずにやけそうになる可愛さだ。
だが、御影は特に顔をほころばせるでもなくふんと鼻を鳴らし、
「当然くれてやる。武具は使われてなんぼだ。金儲けなんぞくだらんくだらん」
実に太っ腹な宣言をする。生産職の鏡だった。
「そのかわり、火之迦具土神の魂は頼んだぞ。ああ、あとオリハルコンナックルは鳳牙、前にお前に作ってやったやつを寄越せ。どうせボス狩りくらいにしか使ってねえんだろ？」
「どころか『徹し』使う時に持ち替えで使うくらいですね」
「けっ。貧乏性だな」
「そうは言っても、耐久値が金属武具の中で最低なんですから無駄打ちが出来ないんですよ。それになんといっても維持費が高いです。修理にインゴット一個使うんですから」
オリハルコン製の武具は金属製の武具でもっとも高い性能を誇るが、その反面耐久値が最も低く設定されている。そのため、下手な使い方をするとすぐに壊れるのである。
特に鳳牙は『徹し』があるとはいえ、基本的には手数の多さで攻める戦闘スタイルだ。そのため、一度の戦闘で耐久値がゴッソリ削れる事も珍しくない。
ＣＭＯでは武具は壊れると消滅してしまうため、耐久値が〇になる前に修理をしなければならず、数値には常に気を配る必要がある。

「今の相場だとオリハルコンインゴット一つで八万ゴールドってところか。お前さんなら普通に狩って二・三日ってところだろう？」
「ＰＴ狩りで得た全部の稼ぎを独占してつぎ込めばですけどね」
実際は参加人数で分配するため、レアドロップでもない限りは何倍もの日数がかかる。
「ふん。それが嫌なら自分で採掘してくるんだな。生産職の俺でも採ろうと思えば採れるんだ。お前さんに出来ないどおりはねえだろうよ」
「御影さんは絶対生産職の枠組みから逸脱してると思います。というか、御影さんメインが武者じゃないですか」
「けっ。大昔から刀匠ってやつは名の知れた剣豪でもあるんだぜ？己で作った刀を己で使いこなせないで何が刀匠だ」
とんでもない暴論だった。生産持ちのキャラクターが全員御影並に強かったとしたら、鳳牙たち通常戦闘職のキャラに居場所が無い。
鳳牙はボスモブに群がって嬉々とした表情で素材を剥ぎ取る鍛冶師や裁縫師たちの姿を想像し、思わずぶるっと身を振るわせた。想像であっても悲しい悲鳴を上げるボスモブに合掌せざるを得ない。
「ま、とにかくだ。出来りゃ二・三日の内には持ってきてくれるとありがてえな。次の定期メンテで無くなっちまうかもしれねえしよ」
「ああ、それもそうですね。分かりました」
鳳牙は御影に対して頷き、仲間の方へ顔を向ける。
「それじゃ、準備して行ってみましょうか。『神殺し（クエスト）』は帝都で受けるんでしたっけ？」

◆

その3

ＣＭＯは『混沌神話』の名称の通り、世界各地の神話や説話などから様々な設定や名称をごちゃ混ぜに取り入れている。

ギリシャ、北欧、日本など古くからゲームの題材にされてきた有名どころはもちろん、あまり馴染みのない神話からの登場人物や神々も存在する。

彼らはクエストを与える役目を負っていたり、特殊なアイテム取引を行ってくれたりするノンプレイヤーキャラ（ＮＰＣ）としてＣＭＯの世界各地に存在していた。

だが、神々はそういった協力的な存在ばかりでなく、むしろ特殊なボスモブとして各地に配置されている方が圧倒的だった。

神々は特定のフィールドに存在する『神界門（スピリチュアルゲート）』から入場できる決戦用フィールドにおり、神界門の使用には専用のクエストを受注する必要がある。火之迦具土神討伐クエストは、ＣＭＯで最大規模のタウンエリア『帝都ウルフィス』で受注する事が出来た。

そういった理由から、鳳牙たちは神殺しに挑戦するため、御影の工房を後にして一路帝都へと向かうことにした。

フェルドとアルタイルは一足先に帝都へと飛んでいる。ＣＭＯにはギルド構成員のみが購入・使用の出来る『召喚状』という空間転移アイテムが存在し、これを使えば一瞬で所属ギルドが設定している『本拠地（ホーム）』への帰還が可能なのだ。

アルメリア騎士団も煌星忍軍も本拠地は帝都に存在するため、物資補給など事前準備の時間短縮の意味も兼ねて、先行したのである。

ギルドに所属していない鳳牙と小燕は、先の二人のような転移アイテムも『魔術師（ソーサラー）』の使えるような転移魔法も使えない。知り合いに魔術師がいれば対価を払う事でいわゆる転送タクシーの依頼を出す事も出来るが、あいにくソロがメインの二人にはそういった知り合いはいなかった。

つまるところ地道に徒歩で行くしかないのだが、帝都まではそれなりに距離があり、ＶＲの世界ではちょっとした旅と同じくらい時間がかかってしまう。

ではどうするのかといえば、実のところ鳳牙には秘策がある。『獣人』へ転職したとき、鳳牙は特殊な職業スキルを習得していた。それは――

「うっひょー！　はやいはやい！」

「喋ると舌を噛むぞ」

鳳牙はただっ広い草原を、文字通り風の如き速度でかけていた。その姿は今、全身を銀色の毛に覆われた大きな狼に変化している。

その背にまたがる小燕は、いけいけと嬌声を上げながら薄紫のポニーテールを風に遊ばせていた。ごてごてした鎧を持ち物ボックスに放り込んだのか、その格好は明るめの黒いアンダーウェアだけの何も装備していない状態になっている。

特殊上位職『獣人』には、『獣化（ビーストフォーム）』という職業スキルがある。モチーフとなる獣に姿を変える事が出来るスキルで、通常攻撃以外の攻撃手段がなくなる代わりに、普段の三倍以上の速度で移動することが出来るようになるのだ。

また、一人限定だが背中に乗せて運ぶ事も出来るため、ペアでの行動であれば都市間移動や狩場への移動時間が大幅に短縮出来る。

尻尾や獣耳といった本来の自分にない器官が付加されるどころではなく、姿形そのものまで人型から変化してしまうとんでもないスキルだが、尻尾と同じく身体の動かし方のコツを掴んでしまえば難しくはないスキルだった。

カルテナの森からトリエルを通過し、今はシルフェリシア大草原を横断中である。

ＣＭＯにおいてはキャラクターのステータスがそのまま身体能力に置き換わるため、鳳牙はスタミナが続く限り走り続ける事が出来る。

帝都ウルフィスへはあと三つのフィールドと一つの町を駆け抜ける必要があるが、鳳牙の感覚ではスタミナを十分に残しつつ三十分もあれば走破出来る計算だった。

途中で数人のプレイヤーキャラとすれ違う事があったが、皆一様に唖然とした表情で鳳牙と小燕を見送った。

小燕はそんな彼らに盛んに手を振っていたが、誰一人として手を振り返せるほどに短時間で衝撃から立ち直れるものはいなかった。

そもそもが現在は鳳牙以外に存在しない『獣人』の職業スキルである事に加え、鳳牙がめったに獣化を使わないため、他のプレイヤーがこの姿を見る機会など皆無に近いせいだろう。

めったに使わない理由は、通常攻撃しか出来なくなるという制限の他に装備品が全部外れてしまうという欠点もあるためである。獣

化して装備が外れた時、持ち物ボックスに余裕が無いとあぶれたものを地面に落っことしてしまうのだ。
狩りに行く時はまだしも、帰ってくるときはまず使用出来ないという、使いどころを選ぶスキルなのだ。

ちなみに背にまたがる小燕が鎧を脱いでいるのは、鎧のままだと鳳牙が痛いためである。決してやましい気持ちがあるわけではない。

「お……。小燕、そろそろ『交易都市バンボス』に入る。人を避けて建物の屋根とか走るから、振り落とされないようにしっかり捕まっとけよ」
「あいあいさー。こんな楽しーものを途中で降りてたまりますかっての」

元気な返事を返しつつ、小燕が鳳牙の背中にピタリと身体を押し付けつつぎゅっと銀色の毛を掴む。その感触を得て、鳳牙はフィールドとタウンエリアを繋ぐホログラムの立体映像のような半透明の紋章型トランスポーターに突進し、

「ふっ！」

視界が草原から石畳の町中へ切り替わると同時に跳躍。近くの建物の屋根に着地する。

突然出現した銀狼に周囲のプレイヤー達が慌てふためく声を無視し、鳳牙は建物の屋根から屋根へ次々に飛び移って町の中を進んでいく。

「おー。バンボスの町って上から見るとこんななんだ。あ、鳳兄鳳兄。掲示板で大騒ぎになってる。バンボスの街に銀色の狼モブが潜

入！　だってさ」

いつの間にか身を起こしていた小燕がそんな報告をしてくる。鳳牙が心配したほど強くしがみつく必要が無かったようで、景色を楽しみつつのんきに掲示板を眺めていたようだ。

「別に構わないさ。モブだと思われてるなら個人的に助かる」

「え～っと……にゃ、背中に乗ってる少女があられもない姿な件ついて……？」

スレッドの上から閲覧していたであろう小燕が、ぶつぶつとそんな事を口走っている。

確かに、初期装備である布の服すら装備していない状態で町中にいるキャラクターなどめったにいない。ゲームとはいえ下着姿を衆人環視にさらす度胸のある女性が多いはずが無い。

小燕も最初は鳳牙の乗り心地に興奮していて気にしていなかったのだろうが、ここに来て羞恥心が芽生えてしまったようだ。

「ほ、鳳兄……。鎧着ちゃダメ？」

「痛いから駄目。もうちょっとで町を抜けるから耐えろ」

予想していた小燕のお願いを、鳳牙は即答で一蹴する。

「お、鬼！　悪魔！　変態！　幼女趣味！」

「自分、狼なんで」

「鳳兄のバカーっ！」

小燕の悲鳴を後ろに流しつつ、鳳牙は一際大きく跳躍して、その勢いのままに次のトランスポーターに飛び込んだ。

◆

帝都ウルフィスは常に活気にあふれている。
それは単にＣＭＯにおける最大の都市であるというだけでなく、ゲームを始めたばかりのプレイヤーがまず最初に訪れる場所であり、大手ギルドの本拠地が数多く存在するせいでもあった。

ウルフィスは東西南北と中央区の五区に大別され、それぞれに違った毛色を持つ大都市だ。

北区は王侯貴族の居住エリアになっており、高難度のクエストが受注できる。

西区は一般的な居住エリアとなっており、中難度のクエストや特殊なクエストを受注する事が出来る。

南区は生産エリアで、ノンプレイヤーキャラから各種アイテムを購入する事が出来る。職人系のギルドはこちらに本拠地を置いている場合が多い。

中央区はマーケットエリアで、プレイヤーキャラの露店がひしめいていたり、パーティーの募集なども盛んに行われている。

最後の東区はギルドエリアとも呼ばれている。これは帝都ウルフィスで唯一ギルドの本拠地を設定できるエリアであるせいだ。
また、新規プレイヤーが転送されてくる最初のホームポイント地点であり、低難度のクエストを受注できる場所でもある。

ホームポイント付近では新人プレイヤーへの積極的なギルド勧誘が行われており、それはまるで大学のサークル勧誘を彷彿させるにぎやかなものだ。

フェルドはそんな東区にあるアルメリア騎士団の本拠地へ飛んだあと、その場にいたギルドメンバーへの挨拶もそこそこに本拠地である建物から外に出て、すぐさま中央区へ向かった。

帝都の中心部にある巨大な噴水を称える広場にはプレイヤー達の露店がひしめき、手売りをしているプレイヤーの威勢のいい声がそこかしこで上がっている。

喧騒の中、フェルドは人々の隙間を縫うようにして進みつつ、露店巡りをしていった。

同時期に帝都へ飛んでいるアルタイルとはすでに【ささやき】で連絡を取り、アルタイルが自分自身の物資補給を行っている間、フェルドが先行して四人分の回復薬や食料を調達する役割分担になっているのだ。

すでにフェルドの魔法でまかなえない部分のステータスアップ系食料は確保しているので、今は回復薬を探している最中である。

――市場の在庫が不安だけどフルヒールポット（ＦＨＰ）をそれぞれに五つは揃えておきたいな。

フェルドは司祭という職業の役割をしっかりと理解している。パーティーのパラメーターに常に気を配り、誰一人として死なせる事無く勝利に貢献する。いわゆるヒーラーという立場だ。

鳳牙、アルタイル、小燕との四人パーティーで狩りを行う時は、それぞれの技量が高い事もあって回復するというよりはステータスダウン系の魔法スキルを使う事が多いのだが、なにせ今度の相手は神である。

神系のボスモブは伝承上の弱点が明確な場合を除き、ほぼ全てのステータスダウンが通用しない。毒などの状態異常は低確率ながら効果があるが、それらのほとんどは司祭ではなく魔術師系の魔法スキルになる。

加えて、神モブは通常のボスモブよりも圧倒的に一撃が重い上、そのほとんどが範囲スキルである。生半可な実力で挑むと、それこそ一発で五人フルパーティーが蒸発する事態になりかねない。

場合によっては魔法詠唱が間に合わない事もあるため、ボスモブ攻略に回復薬の準備は怠ることの出来ないものである。

いくつかの露店を巡って、もっとも安く販売しているところから必要な分を購入していく。帝都は人数に比例して物価競争も盛んなため、面倒を厭わなければ賢い買い物が出来る。また、希少品は根気よく探さなければ見つけられない。

その過程で装備関係の露店も巡り、フェルドは愛用しているローブのストックを購入しつつ、特殊アイテムを販売している露店から今回の討伐の肝になるアイテムを一つ購入すると、一度酒場へと向かった。

銀行のアイテムボックスを開き、必要な物と必要ではない物を整理して、ついでに持ち金をすべて預けた。

『フェルド殿』

と、ちょうどアルタイルからの【ささやき】が来る。内容は準備

が整ったのでフェルドの方を手伝うというものだったが、

『いや、こっちももう終わった。先に集合場所に行っていてくれないか。僕もすぐ行くよ』

『承知したで御座る。……ところで、掲示板は見たで御座るか？』

もとよりフェルド以外には聞こえないというのに、アルタイルがまるでひそひそと話すようにささやいて来る。

そんな様子にフェルドは内心で首を傾げ、

『見てないけど、何か面白いのでもあった？』

掲示板を開く準備をしながら返事を返した。

『一頁目の上から三番目。エッジというキャラ名のスレッドを確認して欲しいで御座る』

相変わらずひそひそと話してくるアルイタイルに言われるまま、フェルドは掲示板のスレッド一覧を眺める。その中から、現状では四番目になっている『投稿者名：エッジ　バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！』というスレッドの全表示を選択した。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

投稿者名：エッジ　バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

やっべーぞバンボスにモブ侵入してきやがった！

投稿者名：迷探偵　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

いや、タウンエリアにモブ入って来ないから。

投稿者名：たすく　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜エッジ
どんなモブ？

＜＜迷探偵
何かのイベントじゃね？　突発的な都市襲撃イベントとかさ。

別ゲーとかだと割とポピュラー。

投稿者名：那須野与壱　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

うわマジだ。何か大きい銀色の狼が建物の屋根の上を飛んでったぞ。

投稿者名：エッジ　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜たすく
銀色の狼。結構でかい。

投稿者名：パパラッチャー　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

マジ？　誰かスクショ撮ってない？　撮ってたら貼って。

投稿者名：エッジ　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜与壱
ぎゃーす。負けた……

投稿者名：越前守　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

ちょい待ち。今知り合いが激写したって言って

るから貼るように言ってみる。

<<パパラッチャー

自分で撮れねーとか名前負けしてんじゃねーよ

（笑）

投稿者名：てすタメント　どーでもいいが……

問題の狼の背中に乗っている少女があられもない姿な件について。

投稿者名：リリィ　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

<<てすタメント

詳細を求める。詳細を求める！

大事なことなので二回言いました。

ってかどーでもよくないから。

むしろそっちメインだから。

投稿者名：旅烏　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

俺も激しく興味があるんだが。<<少女

投稿者名：てすタメント　このロリコンどもめ！

ぱっと見、多分装備全部外したアンダーウェアなんだろうけどな。

狼が相当な速度で動いてたから、ちょうどおいらの前を通過する時に

それがめくれて少女の可愛いおへそがこう、ばっちりとね？

投稿者名：ウニコ　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜てすタメント

当然スクショは万全なんですよね？

是非ともそれを貼り付けてください。今すぐに。

投稿者名：エム大佐　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

三分間待ってやる。

投稿者名：ヘブン　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

お・へ・そー！　お・へ・そー！

投稿者名：鹿之助　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

おおかみよ、我に少女のおへそを与えたまえ！

投稿者名：ラッタッタ　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜鹿之助
おお神よが狼よってか？　やかましいわ（笑）
鹿は狼に喰われてしまえ。

投稿者名：レフ　えと……？

越前守に言われてスクショを張りに来たわけだが、

何この状況？
空気読むべきなの？　読まなくていいの？
教えてエ〇イ人！

投稿者名：エマイト　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜レフ
呼ばれた気がしたので。
件の少女も一緒に映ってるならいいんじゃね？

投稿者名：レフ　Ｒｅ：バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

＜＜エマイト
ちょっと似ててフイタ（笑）
あー、うーん、ピンボケしてるけどまあいいか。
ほいさっさっと。　←　これね　←

――

非常に心当たりのある内容だった。フェルドは思わず眼鏡を外して眉間を指でつまむ。

ややあってから掲載されているスクリーンショットを確認し、フェルドはそっと掲示板を閉じた。思わず溜息を吐き出してしまう。

『フェルド殿？』

チャットを【ささやき】にしたままだったため、溜息が伝わってしまったようだ。アルタイルがおそるおそるといった感じで声をかけてきた。

『いや、なんでもないよ。時間的に見て、まあ後十五分もすれば集合場所に着くんじゃないかな』

『承知したで御座る。拙者は一足先に西区へ行っているで御座る』

『了解』

チャットの設定を通常に戻し、フェルドはもう一度大きな溜息を吐いた。

「……集合場所に行けば僕も見れるのかな？」

ぼそりと、誰にも聞き取れないような小さな声でそう言って、フェルドは酒場を後にした。

◆

その4

帝都ウルフィスへ繋がるトランスポーターの手前で小燕を降ろし、一度酒場でアイテム整理をするという彼女と別れた鳳牙は、獣化を解いて外れていた各種装備を確認しつつ装備しなおしていた。

カルテナの森での取得金やドロップ品はフェルドに預けて討伐費用の足しにしてもらっているため、正直なところ鳳牙はこれ以上整理する道具が無い。

鳳牙は寄り道をせずに真っ直ぐウルフィス西区へと向かう。

マーケットエリアを通る際に無遠慮な視線を投げ掛けられるが、努めて無視した。鳳牙は自分の容姿が恐ろしく目立つのをよく理解している。いちいち気にしていたら神経が持たない。

それでもなるべく人通りの少ない道筋を選んで集合場所へ急ぐ。

今回の討伐対象である火之迦具土神のクエストは、西区にいる伊邪那美（ザナミ）という女性キャラから受ける事が出来る。

内容的には火之迦具土神の討伐に行った夫の伊邪那岐（イザナギ）に『十握剣（とつかのつるぎ）』を届けて欲しいというものだ。

この十握剣が神界門の通行手形になる。ちなみに、先に討伐に向かった伊邪那岐は決戦フィールドの隅っこで怪我をして動けないノンプレイヤーキャラとして登場し、当然一切の助けにならない。

集合場所である伊邪那美の前には、すでにアルタイルとフェルドが待っていた。

伊邪那美の説明をすっ飛ばしてクエストを受注しつつ、フェルドから物資を受け取る。物資の内訳を確認している間に小燕も姿を見せ、同じようにクエストを受けつつ物資の受け渡しを完了させた。

一通りの準備を済ませ、ボスの潜むアグナ火山へ向かう。

アグナ火山はウルフィスからそれほど遠くはない。フィールドというよりはダンジョンに近いエリアだ。随所で湧き出るマグマが足場を限定したり、間欠泉の様に噴出してプレイヤーに炎ダメージを与えてきたりするので、比較的難易度の高いエリアだった。

生息するのは蜥蜴（リザード）系の獣族及び亜人族モブと、火の精・炎の精霊（ファイアエレメンタルイムスピリット）の精霊族（スピリット）モブだ。

通常配置のボスモブは三体おり、そのうち紅炎竜王（プロミネンスドラゴン）へ至るルートの分岐で逆へ向かうと神界門のある広間へ行き当たる。

神界門は青白い光の玉を囲う二つのリングが不規則に回転しているオブジェクトで表示されており、その大きさは巨大モブに引けをとらない。

鳳牙たち四人は神界門からやや離れた場所で車座に座り込み、ヒットポイントやスタミナの自然回復を行っていた。ボスに挑むにあたり、万全を喫するためである。

「さて、ここまでは問題なしだ」

フェルドがスッと眼鏡の位置を直した。周囲のマグマが発するオレンジ色の光が反射し、一瞬黄色の瞳が見えなくなる。

「一応確認しておくけど、神系モブは攻撃のほとんどが範囲攻撃で、下手に密集していると全員がそろって死亡する事態になりかねない。火之迦具土神の場合、その効果範囲は扇状に広くなっている」

フェルドの説明に、鳳牙、アルタイル、小燕は無言で頷く。

「今回の火之迦具土神戦の戦闘配置だけど――」

フェルドは近くに転がっていた大きめの石を一つと小さめの石を四つ取り上げ、目の前に並べ始めた。

「この大きな石を火之迦具土神だとすると、まずはその正面に一人を配置することになる。タゲを集めて耐えなきゃいけないから、この役目は挑発スキルも使える小燕にやってもらう」

「あいあいさっさ。今回は切り札のアイテム持ってきたからどーんとまかせてちょーだい」

小燕がガツンとガントレットに覆われた手で自分のアーマーの胸を叩く。パーティー内で最年少な上に最も小柄だが、ＣＭＯにおいて体格の優劣はあまり存在しない。彼女は間違いなくパーティーの頼れる壁役である。

そんな小燕に微笑を返し、次にフェルドが二つの小石を大きめの石の左右それぞれに一つずつ配置する。

ちょうど三角形で石を囲むような陣形だ。

「見やすいようにこうしたけど、実際は小燕に対する範囲攻撃のギリギリ外側っていう意味だと考えて欲しい。何でこうするのかは分かる？」

フェルドの問いに、鳳牙は手を挙げ、

「相手の攻撃を複数で喰らわないようにするためですよね？　例えば右側が俺で左側をアルタイルさんだと仮定して、小燕が狙われて

いる時は俺とアルタイルさんが、俺の時は小燕とアルタイルさん、アルタイルさんの時は俺と小燕って具合に」
「その通り。実際の範囲は一度見て見ないと分からないけど、フルヒールポットは五本しかないから、最大でも五回、出来れば三回攻撃をもらう間にその範囲を見極めて欲しい。場合によっては小燕も左右に動かざるを得なくなるかもしれないから、その辺も気をつけて」

かなり難しい注文だが、鳳牙もアルタイルも力強く頷く。

「……うぬ？　しかし、フェルド殿はどうするで御座るか？　この配置で拙者ら前衛三名は攻撃の重複は御座らぬが、拙者らに魔法を届かせるためにはどうしても火之迦具土神の攻撃範囲内にいなければならんのでは御座らんか？」

アルタイルの指摘は最もだった。魔法は長射程だが、さすがに神の攻撃範囲外から届かせられるほどではない。辛うじて正面に陣取る小燕には届くかもしれないが、さらに奥に行く事になる鳳牙とアルタイルには届かない。

そんな当然の疑問に対し、

「大丈夫。僕は基本的に小燕の後方に陣取るよ」
「ぬ？　それでは小燕殿と一緒に火之迦具土神の攻撃を浴び続けることになるで御座る。小燕殿は耐えられても、フェルド殿は大丈夫なので御座るか？」
「うん。さっき僕は火之迦具土神の攻撃は扇形に広いって言ったけど、それはあくまで魔法の範囲攻撃だけで、物理攻撃はそこまで広範囲じゃないんだ。だから僕はその物理攻撃が届かないギリギリの位置をキープしてみんなの回復をする」

その瞳に強い意志を宿し、フェルドが力強い言葉を発する。

全てがギリギリの綱渡り。どこかで一つのミスが生じた瞬間に崩壊しかねない、極限の戦闘。

「もう一度確認しておくよ。タゲは基本的に小燕が受け持つ。けど、どうしたって防御姿勢を多くとることになるから、削り役の二人は自分にタゲが向いてしまったら攻撃を中断していったん索敵外へ逃げる事。タゲが外れたらすぐさま攻撃に戻って欲しい」

小燕に比べれば、鳳牙もアルタイルも脆(もろ)い部類に入る。通常攻撃に関しては持ち前の回避力でいなせない事はないが、魔法攻撃は必中のため、集中攻撃を喰った場合瞬間的に蒸発してしまう。

フェルドの指示はもっともだった。

「削り役にタゲが向いてしまった場合は、小燕はとにかく自分にタゲを戻すことに専念して、タゲをもらわなかった方の削り役は調節して自分がタゲをもらわないように注意する事」

鳳牙、アルタイル、小燕の三人はフェルドの説明にそれぞれ無言で頷きを返した。

それらを確認して、

「で、これが今回の戦いで一番重要な話になる」

神妙な顔つきになったフェルドが、前置き付きの新しい説明を始める。

「火之迦具土神は神咆（ゴッドロア）っていうフィールド全体に効果を及ぼす高確率の気絶効果付きの範囲攻撃を持っているんだ。威力は大したことはないし、使う頻度もそれほど多くはないんだけど、対策無しにこれを喰らった場合は間違いなく全滅する。それで――」

しゃべりながら、フェルドがごそごそと何かを取り出し、ピンと指で空中に弾き上げた。弾かれた物はポンと軽い破裂音を立てて白煙を発し、その煙が渦の様に集まって、

「はいなー。呼ばれて飛び出てじゃっじゃじゃーん」

小燕とはまた違った元気のいい少女の声が聞こえてきた。
ただの白い煙だったはずの物は、いつの間にか巫女服を着た半透明のリスになっている。

訳が分からない。思わず鳳牙は疑問符のエモートを出現させ、それに釣られたかのようにアルタイルと小燕もエモートを出す。

唯一フェルドだけが黙って眼鏡の位置を直していた。

「さーさ見てってちょうだい買ってちょうだい。ご利益たっぷりのありがたーい御守りはいかが？」

そんな微妙な場の雰囲気をガン無視して、巫女姿のリスはてけてけと奇妙な踊りを空中で披露している。その頭上には『御守販売』と水色の字で出ており、露店のマークが付随していた。

「みんな、そいつから『耐絶の御守り』を購入してくれ。百ゴールドだから道中で獲得したお金で十分買えるはずだ」

言われて、鳳牙はトレードを選択し、露店の商品を確認する。
耐絶の御守りの他、耐氷・耐眠・耐痺・耐火・耐暗といった御守りも並んでいた。
指定された耐絶の御守りの性能を確認すると、『気絶無効』という文字が目に入る。続いて『耐久回数五回』という耐久値に加え、注釈で『一人一個のみ』と記されていた。
「その御守りで五回までなら気絶を無効化できる。でも逆に言えば、火之迦具土神に六回目の神咆を使われたら――」
最後まで言わず、そこでフェルドが言葉を切る。
「全てにおいて調整出来るか否かが明暗を分けるで御座るな」
「それでいて攻略に時間をかければかけるほど危険ということですね」
全開で攻撃を仕掛ければ自身にタゲが向き、安定性を欠いてしまう。しかし、消極的な攻撃では倒しきる前に御守りが壊れて全滅する。
削り役の二人は綱渡りどころか長時間に渡って針の穴に糸を通す作業を強いられるという事になる。
「どうする？　止めておくかい？」
フェルドが片目をつぶって嘲るような問いを放つ。
鳳牙とアルタイルは一度互いに顔を見合わせ、

「「冗談」」

同時に返事をした。ここまで来て、引き返すという選択肢など無かった。

「だよねだよね。もう小燕ちゃんはやる気全開なのですよ」

ふんふんと小燕が鼻息を荒くし、シャドーボクシングを開始する。身体がうずいて仕方が無いのだろう。

そんな様子を見て、男三人は苦笑する。

「よし。それじゃあ全員完全回復したし、いよいよ神の御前に参らせていただこうか。装備品に間違いは無い？　御影さんのマントは全員着用した？」

「はい」

「うぬ」

「ういさー」

全員、立ち上がると同時に真紅の外套をその身にまとう。

「それじゃ、突入だ」

フェルドの合図と共に、四人は神界門へと近づいていく。回転する巨大なリングに触れるか否かというタイミングで、視界は一瞬の内に切り替わった。

「……こ、れは……」

鳳牙は思わず声を漏らした。

火之迦具土神の決戦フィールドは周囲をマグマの滝に囲まれた巨大な円形の断崖絶壁である。そこかしこから突如吹き上がるマグマの柱は、見る者を恐怖させて止まないだろう。

だが、今は誰もそんなものに気を配ることは出来なかった。

視界が切り替わった直後から、鳳牙は、そして他の三人も、目の前の存在から視線を外すことが出来ない。

火之迦具土神（カグツチ）。このフィールドの絶対的な支配者。

なんと形容していいのか分からない。竜とも、獣とも言い難い容姿。

白を基調とした毛の様な皮の様な不確かなもので体表を覆い、ところどころに赤やオレンジの紋様が走り、その上をまるで生き物のように炎が踊っていた。

鳥の如く細く尖った、口なのだろうか？　わずかに覗く隙間からはゾッとするような鋭い歯と、獰猛な牙が見えた。

そしてなにより、あまりにも巨大だった。小燕は元より、アルタイルでさえ大きな爪一本程度のサイズしかないのではないだろうか。

今は伏せて眠っているが、立ち上がったとなればいかほどなものだろう。

その巨大な神を、今から狩るのだ。

鳳牙は身体が震えているのを感じた。恐怖ではない。武者震いだ。これから為す神殺しという難題への、どうしようもない高揚感。

早く、戦いたい。鳳牙の内にあるのは、ただそれだけ。

「なるほど。さすがは神様、というわけか」

フェルドが、自分を落ち着けるためだろう、わざと意味の無い言葉を口にしつつ、いつものように眼鏡の位置を直す。

「じゃあみんな、作戦通りだ。まずは相手の物理攻撃範囲を見極めるために、僕と小燕で戦闘を仕掛ける。範囲の見極めが終わったら鳳牙とアルタイルは散開してそれぞれ回りこんでくれ」

「了解」

「うぬ」

「あいさー」

鳳牙たちは再びそれぞれに顔を突き合わせ、右拳を伸ばしてコツンとぶつけ合う。

「よし。じゃあ小燕、行くよ！」

「小燕ちゃんの神殺し、見ても見なくても暴れちゃうよー」

眠りこけたままの火之迦具土神へ向けて、真紅の外套をたなびかせた小燕とフェルドが接近する。

『一番槍、てやあっ！』

火之迦具土神の元へ到達した小燕が、大剣を大きく振り上げて切り下ろす。ヒットサウンドとダメージエフェクトが生じた――次の瞬間、

「ウ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッ！！」

かっと目を見開いた火之迦具土神は、その目に煉獄の炎を携えて

雄叫びを上げた。
それは明確なる意思を持って、離れた位置にいるはずの鳳牙にも襲い掛かる。
全身を叩きつけられるような感覚を覚えて、鳳牙は思わず膝を突く。隣で同じように膝を突いたアルタイルを見ると、そのヒットポイントゲージが目に見えて削れているのが分かった。
慌てて持ち物ボックスの御守りを確認すると、耐久回数は四回に減っていた。

「うぬ。油断したで御座る。よもや目覚めの一撃に神咆とは」
「確かにダメージはそれほどでもないですが、衝撃は相当ですね。確かに、これをまともに喰ったら全滅しますよ」

鳳牙はアルタイルから視線を外し、火之迦具土神に相対する二人を見る。ヒットポイントなどのステータスはパーティーを組んでいるため離れた位置からでも確認出来た。
現在は二人とも全快状態だが、火之迦具土神が巨大な前足を振り下ろしたり激流のような火炎を吐く度にゴッソリとヒットポイントが削れ、次の瞬間にはまた全快に戻っていた。

そんな状態を二度三度と繰り返した頃、火之迦具土神の前足攻撃の時は小燕のヒットポイントだけ減ってフェルドのヒットポイントが微動だにしない事態が起きる。
次のタイミングではまた二人とも削れたが、その次ではまた小燕だけが削れた。

そんな事をまた二度三度続けたかと思うと、

『見切った。二人とも仕掛けて！』

フェルドから【ささやき】の合図が来る。

「アルタイルさん」

鳳牙はアルタイルの方を見て頷き、

「うぬ。煌星忍軍が一人、アルイタイル。いざ、参る！」

応えるアルタイルが宣言と共に駆け出すのと同時に鳳牙も走り出す。

火之迦具土神の吐き出す火炎から十分に距離をとり、鳳牙は相手から見て左サイドへ到達する。ほぼ同時に、アルタイルも逆サイドの位置に付いた。

鳳牙はチャットを【ささやき】に設定し、フェルド、アルタイル、小燕をその相手に指定する。

『仕掛けます』

『了解』

『承知に御座る』

『ごーごー』

鳳牙は勢いよく大地を踏込み、火之迦具土神へ向けて跳躍する。勢いのままに飛び蹴りを見舞い、勢いを失って落下する間に手技のスキルを間断なく叩き込む。

ターゲットすることで表示される火之迦具土神のヒットポイントゲージは、開戦からの攻防で二パーセントほど減少していた。

地面に着地するのと同時に火之迦具土神が大きく息を吸い込んでのけぞったのが見えたため、鳳牙は全力で後退するが、吐き出され

た炎に巻かれてヒットポイントを大幅に持っていかれる。

火属性ダメージが二割軽減されてのダメージである事を考え、鳳牙はその強烈さに戦慄を覚えた。

しかし、鳳牙は事前の打ち合わせ通りに焦る事無くフルヒールポットを使用し、ヒットポイントを全快させた。

とはいえ落ち着いてばかりもいられない。鳳牙は即座に攻めの軸をずらして再び火之迦具土神に接近し、スキルを連携させてダメージを稼ぐ。

鳳牙が接敵して二度目の火炎が放たれるが、今度は巻き込まれること無くノーダメージだった。だが、

『鳳牙。アルタイルも。そこまで離れると僕の魔法が届かない。もっとギリギリまで寄って』

フェルドの指示を受け、鳳牙は最初の軸と今の軸の中心まで場所をずらして攻撃を継続する。ちょうどアルタイルも火之迦具土神の巨体の向こうで同じような位置取りをし、水属性の罠玉をばら撒きつつ刀による斬撃を繰り出しているのが見えた。

そして三度の火炎。再び巻き込まれてしまい、二つ目のポットを使用する。

表示される火炎エフェクトから類推して位置調整を行い、再アタックを仕掛けようとしたところで、火之迦具土神が一際大きく息を吸い込んだのが見えた。

そして、

「ウ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッ！！」

「くっ……！」

二度目の神咆が全身を打つ。今度は膝を突かずにすんだが、放たれる衝撃波は別の意味で絶大な威力を誇る。御守りによってステータス異常にならなくても、強制的に瞬間的な気絶状態に陥らされているようなものだった。

『うー。御守りがあるのに無いような気がする件について』

まったく同じ考えを持ったのだろう。小燕からの【ささやき】が飛んでくる。

『攻撃判定付きなのが理由だと思うけど、避けられないからどうしようもないね。幸い呼び動作が大きいからとにかく気を付けよう。残り三回だよ』

『うぬ。水刃の罠玉を山ほど持ってきたゆえ、使い切るつもりで攻めるで御座る』

『俺もそろそろ『徹し』を混ぜていきます。タゲとっちゃった場合のフォロー、お願いします』

それぞれに状況を伝え合い、攻撃を続行する。

鳳牙はしばらく通常スキルでの攻撃を続けた後、一度間合いを離して火之迦具土神の動向を探り、次の一瞬で間合いをつめて火之迦具土神の体に掌を押し当てた。

――熱っ！

あくまでゲームなので耐えられないほどではないが、火の神の名前は伊達では温度だ。徐々にではあるが鳳牙は自分のヒットポイン

トが削れて行くのを確認する。

――長く触れるとダメージをもらうわけ、か！

リミテッドスキル『徹し』が発動し、火之迦具土神のヒットポイントゲージが目に見えて減少する。

すると、

「ヴァアアッ！！」

火之迦具土神の燃え盛る瞳が鳳牙を捉える。『徹し』の威力が高すぎてタゲが小燕から移ってしまったのだ。

――ちっ。予想してたけどさ。

前足の一撃をバックステップでかわしつつ、そのまま逃走を図るが、追撃の火炎によってダメージを被る。瞬時にポットを使うか否か思案するが、突然鳳牙の体が淡い光に包まれ、ヒットポイントが全回復した。

フェルドが魔法の範囲外になる前に回復魔法をかけてくれたのだ。タゲが移った直後から詠唱を開始していなければ間に合わない、絶妙のタイミングだった。

『すみません助かります』

『うん。とりあえず少し戦線離脱だね。……しかし、『徹し』であれか。さすがに神様ってところ？』

『小燕ちゃんのすーぱーがーどの上からでもものすっごいからねー。でも、まだ切り札には早いぜー』

『何だかんだでそろそろ三分の一を削ったで御座る。ここからが踏ん張りどころに御座る』

それぞれに元気な会話が飛び交う。精神的に余裕がある証拠だ。
一時戦線を離れている鳳牙は、残存物資を手早く確認。まだ十分に余裕があった。

――よし！

鳳牙から外れたタゲが安定して小燕に戻ったのを確認し、再び戦線に復帰する。先ほどは『徹し』を使う前にスキルを連携させて数多く攻め過ぎていた。
それ故に大ダメージで簡単にタゲを奪ってしまったのだ。
そこで鳳牙は高・中威力でクールタイムの長いスキルに絞って連携させ、必ずスキルが打てなくなる空白時間を設けることにした。そうする事で不用意にタゲが移らないように調節する。

しばらくは一進一退の攻防を続けるも、全員の連携が慣れてきたこともあって比較的安定している状態だった。

ところが、もうあと三分の一というところまで削ったあたりで、火之迦具土神が突然首を鳳牙とは反対方向、即ちアルタイル側へと向け始めた。

『うぬ。やりすぎたで御座る。一時退散で御座る』

サッサッと火之迦具土神の攻撃を掻い潜りながら、アルタイルが最後っ屁のように無数の罠玉をばら撒いて遁走するのが見える。
鳳牙と同じく火炎の追撃を受けたようだが、これも同じくフェルドの魔法で瞬時に全回復した。
そうこうしている間にばら撒かれた罠玉から高圧の水が次々と噴射され、火之迦具土神の身を切り刻んでいく。痛みによる憤怒の声

を上げた火之迦具土神は、攻撃の届かない場所に退避したアルタイルを激しく睨みつけ、

「ウ〝ア〝ア〝ア〝ア〝ッ！！」

神咆を発動。

鳳牙は再度身体をぐらつかせるが、すぐさま立て直して攻撃を再開――出来なかった。何故なら、

「ウ〝ア〝ア〝ア〝ア〝ッ！！」

『『『『な……』』』』

神咆の連続使用。全員の驚きの言葉が重なる。

それは今までに無い行動だった。これで御守りの効果は残り一回。

――もし次も同じような連続で来られたら……

最悪の展開が全員の脳裏を掠める。わずか数秒で、先ほどまでの行けそうなムードが消し飛んでしまったと思った――その直後、

『……ん？　ああっ！　そっか！　アル兄すぐ戻って！』

『う、うぬ？』

何かに気がついた小燕がやや焦った声でアルタイルに戦線復帰を求めた。

タゲ固定の安全性を考えれば彼はまだ戦線に復帰しない方がいいのだが、小燕の声に押される形で火之迦具土神の攻撃範囲内に戻ってきた。

幸いにも小燕のラッシュ攻撃でタゲは彼女に戻っているようで、

火之迦具土神が左右にふれることは無かった。

『小燕。急にどうしたんだい？』

スキルの乱発と防御無視の結果、みるみる減少して行く小燕のヒットポイントとスタミナを魔法で回復させながら、フェルドが問いかけた。

小燕は攻撃の手を緩めないまま、

『たぶん、火之迦具土神ってタゲとった人が攻撃範囲内にいないと、神咆を最優先で使ってくるんじゃない？　もしかしたら、通常とそっちの場合とで、クールタイム別に、設定されてるか――もっ！』

振り上げた大剣で斬撃を放ちながら小燕が返事をする。

その見解を聞いて、鳳牙ははたと思い出す。自分にタゲが移った場合とアルタイルにタゲが移った場合の相違点。それは回避中の追い討ちだ。

鳳牙はダメージ判定のある遠距離技を持っていないため、タゲが移った場合は回避に専念してとにかく逃げる事しか出来ない。

対してアルタイルは避けながら罠玉をばら撒いていた。火之迦具土神の攻撃範囲外に逃れた後も、彼の残した罠が自動的に火之迦具土神を攻撃し、タゲが残ったままになったのである。

『……ありえるね。それなら今の二回連続も頷ける』

『うぬう。だとすれば、拙者が最後に巻いた罠玉が余計だったという事で御座るか。相済まぬで御座る。かなりピンチにしてしまったで御座る』

『アルタイルさんのせいじゃ無いですよ。もし俺に同じ事出来たら同じ事やりましたし。そういう戦い方が出来るのが忍者の特性なんですから』

スキルを発動させながら、鳳牙は今までの火之迦具土神の攻撃パターンから見て神咆はあってもあと一回だと踏んでいた。

おそらく、神咆のクールタイムは異常に長い。クールタイム終了と同時に使われたとしても、残りを削りきる前に再充填出来る時間は無いだろう。

問題は別枠で設定されている神咆の方だ。この存在が疑わしい以上、鳳牙もアルタイルもタゲをとってしまった場合でも小燕が取り戻すまで魔法攻撃の範囲内には居続ける必要がでてきてしまった。

幸いなのは二回目で相手の攻撃範囲を見切ったため、フルヒールポットの残りが三つもある点だ。

下手に連続攻撃を喰ってフェルドの回復が間に合わない場合でも対処が出来る。

とにかく、今は慎重に削って行くしかない。そしてもしも次の神咆が来たとしたら、それはもうタゲがどうと言っている場合ではなくなる。決死の覚悟で全力全開。圧し切る以外にはなくなる。

刻一刻と時間が過ぎ、じりじりと火之迦具土神のヒットポイントが〇へと近づいていく。

そうして、その残りがあと十パーセントほどになった時、

「ウ〝ア〝ア〝ア〝ア〝ッ！！」

火之迦具土神が五度目の神咆を発動。衝撃波が鳳牙の身体を打ち

つけると同時に、ボッという何かが燃えるような音がして、持ち物ボックスの御守りが消滅する。

これでもう、神咆は防げない。だが、残りはわずかに十パーセント強。回復薬も十分にあり、クエストの達成はほぼ確定的だ。

そう、考えていた。だが、

『ふぇっ！』

どこか間の抜けた声と共に、火之迦具土神のタゲをキープしていた小燕の小さな体が宙を舞い、フェルドの頭上を越えてはるか後方へ弾き飛ばされた。

『えええええっ！』

小燕が驚愕の声を上げながら吹っ飛んでいく。

『吹き飛ばし攻撃！？　そんなの攻略にも、いやそれ以前に今まで一度も――』

突然の自体にフェルドが慌てた声を発し、

『まずいで御座る！　このままでは神咆で全滅するで御座る！』

アルタイルが弾き飛ばされた小燕の位置を見てがむしゃらに罠玉をばら撒いた。

しかし、罠玉の発動にはタイムラグがある。それは火之迦具土神が神咆の予備動作に入るには十分過ぎる時間だ。

全てを一瞬で認識し、その時には鳳牙はもうすでに火之迦具土神

に掌を押し当てていた。

『破っ！』

気合の声と同時に『徹し』を叩き込み、徹しに繋げて高威力のスキルを立て続けに放つ。

「ヴァアアッ！！」

鳳牙の連撃が功を奏し、火之迦具土神が範囲外の小燕に神咆を発動させる前にタゲを向けさせることに成功する。だが、

『ぐあっ！』

スキル発動直後の硬直を狙われ、鳳牙は火之迦具土神の前足の一撃をもらって地面を転がった。

『鳳牙！　くそっ詠唱が――』

フェルドの焦りの声を聞き、何とか起き上がった鳳牙は急いで持ち物ボックスからポットを選択して使用する。直後、火之迦具土神の火炎が襲い掛かり、回復したヒットポイントが再び大幅に減少する。

当然ポットのクールタイムはまだ消費されていない。だが、フェルドの回復魔法が発動し、鳳牙を全快させる。

ちらりと確認すれば、吹き飛ばされた小燕は大急ぎで戻ろうとしている最中だった。反対側でアルタイルの罠玉が発動しているが、タゲは相変わらず鳳牙のままだ。

攻撃範囲外に逃れることの出来ない鳳牙は、火之迦具土神の火炎

をかわす術が無い。甘んじて攻撃を受ける以外にない鳳牙は、タゲがアルタイルに移る前に残りのポットを瞬く間に消費してしまった。

『すいませんポット切れました』

『うぬ。拙者もあと二回分で――訂正、一回分になったで御座る！』

『げっ。連続で魔法使いすぎた。僕のマナポイントもやばい』

『めんごめんごやっと戻ったって、わおピンチ！　んじゃ残り十パー切ったし、小燕ちゃんの切り札いっくよー』

焦りの色を隠せない鳳牙たちに対し、戦線に復帰した小燕はどこか得意そうにそう宣言すると、大剣大上段に構えて振り下ろし、続く挑発でアルタイルに移っていたタゲを自分に向き直させた。

そして何を思ったのかその手から大剣を消滅させ、

『出でよ　サラマンダーシールド　！　全ての炎を喰い尽くせ！』

高らかな宣言と共に緋色に彩られた巨大な盾を出現させ、地面に突き刺した。

『説明しよう！　サラマンダーシールドとは、火属性モブのタゲを全て集中させ、その攻撃の全てを無効化させることが出来るのだ！

……ただし十回分だけね』

きゃはっ、と小燕が場違いな茶目っ気を披露し、鳳牙は思わずポカーンと棒立ちになってしまった。

フェルドもアルタイルも完全に隙だらけで突っ立っている。

そんなありえない空気を、

「ヴァアアッ！！」

火之迦具土神の咆哮と吐き出された火炎が破壊する。

気がついたときには火炎の激流が小燕をフェルドを飲み込んで――いなかった。火炎は小燕の出現させた緋色の盾が飲み込むようにして吸収し、まるで何事もなかったかのように微動だにしなかった。

『あ、これ出してるとあたし動けないから、鳳兄とフェル兄とアル兄、後はよろしくねー。残り九回分のうちにやっちゃってー』

ゴーゴーと小燕が手で合図を送り、そこでようやく三人は我に返り、次の瞬間には爆笑していた。

『あはは。切り札がよもやそれとは、恐れいったよ。……そういう事なら、詠唱長すぎてめったに使えないリミテッドスキル解放と行きますか！』

スッと眼鏡を位置を直し、フェルドはぼそぼそと呪文の詠唱を開始する。

『はっはっは。うぬ。ここからは後のことは考えぬで御座る。煌星忍軍流の圧殺術、とくと御覧じるで御座るよ！』

アルタイルは両手の指の隙間全てに罠玉を出現させ、火之迦具土神の周囲を回りながら大量にばら撒いていく。

『かはは。全力全開だ。スタミナ切れるまで攻め続けてやる！』

そして鳳牙は両の拳を打ち合わせ、親指を立てて自分の首のツボを刺激した。全身に力が駆け巡り、同時にヒットポイントが結構な速度で減少を始めた。

拳闘士系職のマスタースキル、『点穴(てんけつ)』の効果である。一時的に攻撃力が上昇するが、ヒットポイントに継続ダメージが発生してしまう。

魔法やアイテム等でヒットポイントを回復すると効果が切れてしまうため、格上との勝負にはまず使えないスキルだ。

しかし、今は全ての攻撃が回数限定で無敵状態の小燕に集中するため、全ての行動を攻撃一辺倒に振る事が出来る。

「ヴァアアッ！！」

火之迦具土神が火炎を吐き出す。しかし、それはまたも小燕の盾に吸収され、何の被害も与えられない。鳳牙は地面を蹴り、火之迦具土神へ連撃を見舞う。スタミナポットで無理矢理スタミナを回復させつつ、全てのスキルをモーションキャンセルで繋いでいく。

その間にも、あちらこちらでアルタイルの撒いた罠玉が水の刃を噴出させ、火之迦具土神の身を切り刻んでいった。

「ヴァアアアッ！！」

火之迦具土神が憤怒の咆哮をあげて様々な攻撃を放つが、タゲが小燕に固定されているため、そのことごとくが緋色の盾によって無効化される。

『あと四回分！　残り五パー切ったよ！』

もっともよく相手を観察できる小燕が、攻撃に集中する鳳牙たちに向けて適宜現状報告を入れてくる。

その声の直後に、

『鳳牙！　カウントダウン入れるから、こっちに合わせて『徹し』を撃て！』

フェルドの指示が鳳牙に飛ぶ。

『了解！』

威勢よく返事を返し、鳳牙は攻撃を止めて大きく後方へ飛びずさる。減ったスタミナをポーションで回復し、フェルドへ視線を向けて無言で頷いてみせる。

『よし……十！』

フェルドのカウントダウン開始と共に、鳳牙は再びスキルラッシュを開始する。ただし、今度はキッチリどの技からどの技へつなげればいいのかを明確に決めた上での連撃だ。

スキルの発動時間とモーションキャンセルのタイミング。消費するスタミナの量も計算に入れ、最適のタイミングでクールタイムを消費してスタミナポットを再使用していく。

『……五！』

『あと二回！　残り三パー』

『うぬ！　罠が切れたで御座る。しからば切って切って切りまくるで御座る！』

進むカウントダウン。刻一刻と迫る終わりの時。

『……三！』

『次最後！』

フェルドのカウントダウンに小燕の悲鳴が重なる。時間が無い。

『……一！』

『やっば壊れたもう無理！　あと二パー！』

『はあああっ！』

最後のスキルをキャンセルし、鳳牙はタゲ固定が解けて自分に向き直ろうとする火之迦具土神に掌を押し当てる。

『行け！　鳳牙！』

『行くで御座る鳳牙殿！』

『止めだ鳳兄！』

力強い皆の声を後押しに、

『破っ！！』

鳳牙は最後のスタミナを使い切って『徹し』を発動。ありったけの一撃を解き放った。

冷たいほどの長い静寂。それは本当は一瞬、そして錯覚ですらあっただろう。

そんな曖昧なる刹那の悠久を経て、火之迦具土神は静かに、そして巨大な地響きを伴って地に伏し、燃え盛る瞳の火炎を消失させた。

『……えと、勝った？』

地に伏した神を呆然と眺めながら、ヘルメットを外した小燕が恐

る恐る確かめるような声を出す。

『……うん。勝った』

フェルドが壊れた人形のようにカクンと頷き。

『勝ったで……御座るな』

アルタイルがゴキゴキと首を鳴らす。

『……倒した。……神様に勝った』

スタミナ切れで強制回復状態になった鳳牙は、ぺたんと地面に座り込みながら、目の前の巨体を眺めた。

四人ともその後しばし黙り込んだが、ややあって、

『いやっほう！　小燕ちゃん大・勝・利！』

『うわー。神って本当に四人で倒せるんだ』

『大金星に御座る。スクショを撮って忍者仲間に自慢するで御座る』

それぞれ大騒ぎを始めた。スタミナ回復中で動けない鳳牙だけ、その輪に入りきれない。入りきれない事で、鳳牙は重要な事を忘れずにすんだ。

『あ、神様消えちゃう前にルートしてもいいですか？』

『にゃ！　消えるのダメ！　鳳兄確保確保！』

『危ないところだね。消えたら苦労が水の泡だよ』

『うぬ。スクショは万全に御座る。遠慮なくルートするといいで御座る』

それぞれに促がされ、鳳牙は神に手を触れてドロップの確認をする。

その中身には、

『あ、魂あった』

『『『おおっ！』』』

運がいいのかそれとも確定なのか不明だが、御影の依頼品である『火之迦具土神の魂』がしっかりと混じっていた。ただ、不思議な事にアイコンの表示が無い。

そのことをやや不思議に思いながらも、鳳牙は自分の持ち物ボックスへ異動させるためにアイテムを選択して、突然急激な眩暈に襲われた。

――な……んだ……こ……れ……

声を発する事も出来ず、急速に視界が暗転していく。意識を失う直前に、仲間に助けを求めようとした鳳牙が見たものは、地面に倒れてピクリとも動かない仲間の姿だった。

その４（後書き）

第一章　ゲーム　はこれにて終了です。
次回からは第二章　バウンティハント　をお送りいたします。

その1

「……あれ？　いつっ……うあ……」

眠りから覚めるように目を開いた鳳牙（ほうが）は、青々とした空に出会った。次いで、突如襲い来る頭痛を伴う眩暈に吐き気を催しながらも、何とか倒れていた身体を起こす。

身を起こすと頭痛は急激に引いていき、眩暈も治まってしまった。

そうしてやっと、鳳牙は周囲の状況を確認する事が出来る。

そこは、ごつごつした岩の混じった地面が見渡す限りに広がっている場所だった。鳳牙の知識に照らし合わせれば、今いる場所はドルミナス高原というフィールドエリアに似通っている。

ただし、見渡す限り何も見えない、ぐるりと地平線に囲まれているほど広大なエリアではないはずだった。ところどころに鋭角に突き出た岩山が隆起し、もっと起伏に富んだ地形をしているはずなのだ。

――どこだ？　ここ。ってか、俺なんでこんな所にいるんだ？

鳳牙はプルプルと頭を振って、自分の置かれている状況を整理する。記憶が曖昧で、上手く物を考える事が出来なかったためだ。

まずは直近で思いだせる記憶を探っていく。

――期末テストが終わって久々にログインしたことは覚えている。

ログインした時、鳳牙はシルフェリシア大草原にいた。自分のログアウト地点を忘れていたためにやや驚いたが、すぐにフェルドと

連絡を取ってトリエルへ向かったのだ。

――皆と合流して、御影さんの工房へ行ったな。それで、神殺しの依頼を受けた。

御影からとある素材を手に入れてきて欲しいという依頼を受けて、鳳牙たちは神殺しに挑んだ。

神との激闘を制し、鳳牙たちは勝利した。

鳳牙は自分の手を握ったり開いたりして確認する。まだ、最後の一撃を放った手応えを覚えていた。

勝利に喜び、ドロップ品を確認して――

「――そうだ。あのドロップ品」

鳳牙は慌てて自分の持ち物ボックスを確認する。

予備のナックルや回復薬に混ざって、赤い炎を宿す水晶玉のようなアイコンを見つけ、それを確認する。

「火之迦具土神（カグツチ）の、魂……」

鳳牙の持ち物ボックスには、確かにそれがあった。

討ち倒した火之迦具土神から回収しようとして、鳳牙は強烈な眩暈を感じて意識を失ったのだ。異変を知らせようと意識を失う直前に仲間を見れば――

「っ！　皆は……」

意識を失う直前の記憶を思い出し、鳳牙は急いで倒れていた三人の姿を探す。だが、視界に映るのは草木の気配すら希薄な高原の大

地だけだった。

そもそも、火之迦具土神の決戦用フィールドで意識を失ったというのに、目が覚めると別の場所にいるというのもおかしな話だった。タイマー設定で相当な長時間決戦用フィールドにいると外に出されるという事であっても、神界門（スピリチュアルゲート）の近くに倒れているのが普通だ。

また、仮にモブに襲われて死亡したのだとすれば、設定されたホームポイントに自動送還されるはずのため、全く未知のフィールドに放り出される事などありえない。しかもその場にいた他の面々の姿はなく、鳳牙一人だけである。

全く意味が分らなかった。

それでも鳳牙はとりあえず確認出来る事は全て確認してみるかという事で、まずは姿の見えない仲間と連絡を取ることにする。

知り合った仲間を登録するフレンドリストを開き、そこから【ささやき】を送ろうとして、鳳牙は自分のフレンドリストが真っ白になっている事に気が付いた。

――あれ？

鳳牙は一度リストを閉じて、改めて開いてみる。しかし、リストは真っ白のままだった。

もとよりさして登録人数の多くなかった鳳牙だが、最低限フェルド達はリストに登録してあった。それが、今は何故か真っ白なのである。

――バグか？　なんだよ……

携帯の故障でのアドレス情報が飛んでしまった時のような悲しさを覚えつつ、鳳牙はキャラクターネーム直接指定による【ささやき】を試みる。
だが、チャットの設定が【ささやき】に変更できず、通常チャットのままになってしまう。

――おいおい。何だ真面目にバグってないか？

何度か設定変更を試みて、鳳牙は【ささやき】の使用を諦めた。
何か他に外部と連絡をとる手段が無いかと思案して、掲示板のことに思い至る。
ウィンドウを出現させ、掲示板を選択するも、こちらも一向に反応しない。バグが色んなところに派生しているようだった。

――GM（ジーエム）コールも使えないな……

鳳牙はウィンドウを閉じながらもう一度ぐるりと周囲を見回して、盛大な溜息を吐く。
見知らぬ場所で連絡手段も無く放り出されている状況は、遭難と言って差し支えの無い状態だった。

――まあ、何か不具合でてるっぽいし、いったんログアウトして掲示板とか見てみるか。

フリーズしたパソコンを再起動させるような感覚で、鳳牙は目を閉じてログアウトを選択する。認証画面で了承を選択し、すぐさまログイン時と同じようなピリッとした痛みが全身を、駆け巡らなかった。

「え？」

思わず声に出して、鳳牙は目を開いた。目の前には、広大な高原が広がっている。風が駆け抜け、鳳牙の全身を撫でて行く。

――ミスったかな。

何か手順を間違えたのだろうと思い、鳳牙は再びログアウト、了承と選択していく。今度は間違いない。そのはずだというのに、

「……なん、だ……これ？　ログアウト……出来無い？」

何度ログアウトを了承しても、鳳牙の意識がゲームから現実へ戻らない。鳳牙は依然、ゲームにログインした状態のままだった。

――なんだよこれ？　ログアウト出来ないって、そんな空想の物語、本当にあるわけが――

鳳牙の胸の内に、急速に黒い不安が膨らんでいく。

ＶＲゲームが現実になる以前から、空想上の物語としてゲームからログアウトの出来なくなる人々を描く物は多くあった。

ＶＲゲームが現実になって以後も、そういった都市伝説はまことしやかに流されていた。

だが、一国の代表のような権力者までごく普通に利用されるのがＶＲだ。その安全性は高く評価されていて、今までも事故らしい事故など一度たりとも起こったことは無かった。

鳳牙――圭介もまた、ＶＲにまつわる噂など信じていなかった。

そんな事はありえないと。あるはずが無いと。
しかし、それが今現実に自分の身に起きている。ＣＭＯから、ログアウトが出来ない。
――まてまてまてまて。落ち着け、何かの間違いだ。そう、間違いのはずだ。
圭介は心臓が早鐘を打ち、呼応するように体温が急上昇していくのが分る。顔や背中に汗が浮かび、肌を滑り落ちて行く。
自然と荒くなった呼吸がその身を揺らし、あごに集まった汗の雫が落ちて、乾いた高原の大地にごくわずかな染みを付けた。
「……え？」
圭介は足元に出来た汗の染みを見て驚愕の表情を浮かべる。恐る恐る手を伸ばして、自分の顔に触れ、その手に汗がべったり付くをの確認して、絶句した。
顔にかいた汗が手に付着する。そんな当たり前なことは、ＣＭＯでは当たり前ではない。プレイヤーキャラ鳳牙は汗をかかない。汗をかくのはプレイヤーである圭介だ。
リアルな感覚を共有するＶＲゲームだが、それは一部の話であって、発汗などの生理現象はゲームに反映されない。生身の人間は汗をかくが、ゲームのキャラは汗をかかないのだ。
だというのに、圭介ではなく鳳牙のままだというのに、その顔には汗をかき、手で触れれば手が濡れる。それはゲームではあってはならないことだった。それではまるで、ゲームが現実にでもなってしまったかのような、圭介が鳳牙そのものになってしまったかのようだった。

「なん……え？　なんなんだこれ？　え？　え？　なんだよこれ……」

鳳牙は両手で自分の顔を覆う。頭が混乱していた。理解出来ない。何がなんだか分からない。

「うっ……」

強烈な吐き気を感じて、鳳牙はその場に胃の中身をぶちまけた。二度三度と嘔吐を繰り返し、胃液すら吐き出して出るものがなくなっても、胃は痙攣を続ける。

地面に膝をつき、鳳牙は神に祈るかのように額を地面に押し付けながら胃の痛みに耐えた。

しばらくそのまま苦しみ続け、ようやく痛みが引き始めた頃、

「ｌｉｂ（リブ）。最後の一人を発見しました。ご案内を開始いたします」

突然、頭上から無機質な印象を受ける女性の声が聞こえてきた。

鳳牙はばね仕掛けの人形のように身を起こし、目の前に立つ人物を見た。

純白のフリル付きカチューシャを乗せた、黒というよりは青を内包する闇色といった綺麗なセミロングの髪。その髪と同色の無感情な瞳が鳳牙を映しこんでいる。陶磁器のように透き通る白い肌は、顔の部分だけ外気に晒されており、頬にほんのり朱をさしていた。

出で立ちはメイドというように相応しい黒を基調とした丈長のワンピースに、カチューシャと同じく純白のエプロンドレスを着用し、手にはおそらくシルク製の手袋をしている。

年齢は鳳牙とそう変わらなさそうな、少女だった。

「き……君は……？」

喉が焼けて張り付く鳳牙は、苦労しながらも声を吐き出す。

「ｌｉｂ。私は識別番号ＨＡＲ（エイチエーアールセブン）－七と申します。ウォンテッドネーム『銀狼』の鳳牙様」

メイド服の少女は、鳳牙に向かって静かに一礼した。

透明な声だった。ゾクリとするほどに淡々とした、無感情な声。

よく見てみれば、おかしな名前を名乗った少女の頭上には、ＨＡＲ－七と青色の字で表示されていた。それを見て、鳳牙は目の前の存在がノンプレイヤーキャラなのだと理解する。

ＶＲゲームにおいてはあまりにも機械的だったが、中身がいないキャラであるのならば無感情である事も頷けた。

「ＮＰＣがいるってことは、やっぱりここはまだＣＭＯの中って事だよな」

ひとまず自分以外の何かが存在することに安堵し、鳳牙はよろよろと立ち上がりながらぼそりと自分の考えを口にした。

「ｌｉｂ。正確には、私はＣＭＯにおけるノンプレイヤーキャラとは異なります。が、ほぼ同じものとお考え下さい。最後の質問に関しては『はい』と回答させて頂きます」

「な……」

鳳牙はメイド姿のノンプレイヤーキャラを驚愕の視線で見つめる。

ノンプレイヤーキャラは決められた台詞を決められた手順で返すように設定されている。特定の語句を含む話を振った場合に特殊な反応を返すキャラもいるが、今の鳳牙の独白のように、特に意味もない言葉に対して明確な意味を持った言葉を返せるはずが無かった。

加えて、今の回答は二つに分けて為されている。自身の位置付けと、鳳牙の現状について。

まるで人間同士で会話をしているような自然さだった。普通のノンプレイヤーキャラに出来るものではない。

「な……なんなんだよ、お前……」

得体の知れない恐怖に犯され、鳳牙は後ずさる。目の前にある存在が、急に恐ろしいもののように思えた。

「ｌｉｂ。先ほどお伝えしました通り、私は識別番号ＨＡＲ‐七と申します。ウォンテッドネーム『銀狼』の鳳牙様。貴方様をお迎えに上がりました」

先ほどと同じように、透明で無機質な声と共に、ＨＡＲ‐七という名称のノンプレイヤーキャラは鳳牙に向かって頭を下げる。

「ＨＡＲ‐七？　ウォンテッドネーム？　迎えに来たって、どういう事なんだよ！　お前なんなんだよ！」

わけが分らず、鳳牙は声を荒げた。状況が飲み込めず、気分が落ち着かない。

「ｌｉｂ。順に説明させて頂きます。ＨＡＲ‐七は私の識別番号に

なります。私の名前と思っていただいて構いません。ウォンテッドネームに関しては後ほど説明させて頂きます。ただいま各地に散っております方々をあるエリアにご案内させていただいております。そちらへは――」

メイド少女――ＨＡＲ‐七が左手を横に伸ばして何かを撫でるようにスライドさせる。すると、地面から半透明の何かが突き出し、次の瞬間には鳳牙のよく知るトランスポーターが出現していた。

「こちらのトランスポーターよりご入場下さい。最後の質問ですが、私は識別番号ＨＡＲ‐七と申します」

全てを言い終えて、ＨＡＲ‐七は静かにお辞儀をした。

完璧な会話だった。鳳牙の口走った言葉一つ一つに明確な回答をしている。

「……お前、ただのＮＰＣじゃないよな？」

「ｌｉｂ。私は鳳牙様の知識にあるノンプレイヤーキャラとは異なります。我々に関する詳細なご説明も、こちらのトランスポーターからご入場していただく先でご説明させて頂きます」

ちらりと視線を向け、ＨＡＲ‐七は鳳牙に対してトランスポーターの利用を促がしてくる。

やや頭の冷えてきた鳳牙は、そんな相手の態度はひとまず無視して、観察することに努める。

人間と大差の無い会話能力を有する青字キャラ。ノンプレイヤーキャラのようで全く違う。何もない場所にトランスポーターを出現させた事といい、システムをある程度いじくれる存在である事に間

違いは無い。
鳳牙がとっさに思い浮かんだのは管理者権限を有するゲームマスター[M]だが、もしそれならばこんな回りくどい事をする必要はない。何かしらの不具合が生じているＣＭＯ[G]の説明があってしかるべきだ。

――特に今はログアウトすら――

「っ！　そうだログアウト。ログアウト出来ないのは何でだ！？」
「ｌｉｂ。そちらに関する説明も、ご入場頂いた後でご説明させて頂きます。鳳牙様で最後になりますので」

ＨＡＲ-七が再びトランスポーターを指し示す。その淡々とした対応に鳳牙は苛立ちを覚えるが、すぐに頭を振って怒りを押さえ込む。

――これ以上の問答は意味が無さそうだな。

先ほどＨＡＲ-七は鳳牙を迎えに来たといった。ならば、鳳牙が相手の誘いに応じない限りは話が進まないという事になる。
不可思議な事だらけな上、現在位置は見渡す限りの高原。見える範囲には目標となりうる物も無く、ただ鳳牙とメイド少女とトランスポーターがあるのみ。加えてログアウトする事も出来ないとなれば、今はもう先に進んでみるしかない。

「……分かったよ。行けばいいんだろ？　行けば」
「ｌｉｂ。ご協力感謝いたします」

ＨＡＲ-七が深々と頭を下げる。

そんなＨＡＲ-七の様子を見て、鳳牙は先ほどから気になってい

る別の事を質問してみることにした。

「……なあ」

「はい」

「今は言わなかったけど、さっきから話し始める前に言ってる『リブ』って何だ？」

「ｌｉｂ。ご説明いたします。こちらは『ｌｉｂｅｒａｔｅ（リベレイト）』という言葉を短くしたものです。動詞ですが、意味は自由と解放。我々の間では相手に対する応答、つまり『はい』や『了解』などの代わりに用いております」

抑揚の無い声で、ＨＡＲ-七が答える。

何かの意図を持つ言葉だろうかと、鳳牙は考えた。ログアウトする自由を失い、ＣＭＯというゲームに囚われている今の状態を、盛大に皮肉っているとしか思えない。

そして、頭に血が上っている時は気にも留められなかったが、相手の言っている『我々』という言葉も気になる。

我々というからには、目の前のメイド少女以外にも複数名が今回の件に関わっているはずである。また、鳳牙で最後という事は、必然的に他にも案内されている誰かがいるという事になる。

鳳牙の脳裏に最後に一緒にいた三人の姿が掠めるが、頭を振ってその映像を消し去った。

知り合いが巻き込まれていればいいなどという考えは持つべきではない。むしろ巻き込まれていなければ助けを求められるかもしれないのだから。

「どうかなさいましたか？」

ＨＡＲ‐七が無表情のまま首を傾げている。

「……いや。行こう。案内してくれ」

「ｌｉｂ。ではこちらへ」

ＨＡＲ‐七に先導される形で、鳳牙はトランスポーターに向き合う。

――そうさ。行くしかないんだ。

覚悟を決め、鳳牙はトランスポーターに触れる。

景色が暗転し、数秒の間を置いて、新たな景色が生まれる。

足元には柔らかな草原が広がり、周囲にはポツリポツリと木が生えていた。そして、

「……劇場？」

鳳牙の前方、落ち窪んだ場所に青空劇場とでも言うべき舞台が見えた。座席も用意されており、そこには二十数名のキャラクターたちがたむろしているのが見える。

「なあ、ここが――あれ？」

振り向いた鳳牙は、そこにいるはずのメイド少女の姿が無いことに驚き、慌てて周囲を見回す。だが、影も形もなくなっていた。

――とにかく行ってみるしかないか……

ぽりぽりと頬をかきながら、鳳牙はゆっくりと劇場へ向かって歩いて行く。

劇場の近くまで来て、鳳牙はその場に集まるおそらく同じ境遇の面々に対して違和感を覚え、それがすぐに頭上に表示されているネーム群のせいだという事に気が付いた。

プレイヤーキャラクターのネーム群は本来『白字』で表記されているのだが、この場にいる者は皆『黄色字』で表記されていた。確認できてはいないが、鳳牙は自分もまたそうなっているだろう事を漠然と理解する。

しかし、鳳牙は黄色で表示されるネーム群をＣＭＯで見た事が無い。全く持って謎だった。

訝しみながらも劇場へ達すると、先にたむろしていたプレイヤーキャラクターたちが鳳牙の存在に気が付き、ひそひそと会話をし始めた。

「おい、あれ獣人の鳳牙じゃねえか？」
「ああ、間違いないな。あの職業は今はまだ一人だけのはずだ」
「あいつも巻き込まれてたんだな」
「ってかそんな事はどうでもいいだろ。マジなんなんだよこの状況」
「知らねーよ。それの説明があるってんだろ？」
「ゲームから出られないとかどんな不具合だよ」
「でも俺、別に一生こっちでもいいな」
「は？　俺はごめんだね」

がやがやとやかましい事この上なかった。それでも知り合いはいないかと思って人数を数えながら一人一人を確認していく。

――二十一……二十二……二十三……俺を入れて二十四人か。

劇場の前にいたキャラクターの中に、鳳牙の知り合いはいなかった。その事に安堵しつつ、しかし不安が重くのしかかる。

こういう時には知り合いが多ければよかったのかもしれないと、今更ながらに鳳牙は思った。

「……ん？」

ふと、劇場前から離れた場所、隅っこの方で人だかりの陰になって見えなかったキャラクターがいることに気が付いた。

ただでさえ小柄な上、体育座りをしているためにさらに小さな印象を受ける。

重厚なプレートメイルを着込み、バケツのようなヘルメットを被ったキャラクターだ。鳳牙はそれに見覚えがあり、頭上のネームにも間違いがなかった。

小走りにそのキャラに近づくが、相手はボーっと遠くを眺めているようで、鳳牙の接近に気が付いた様子は無かった。

「……小燕（シャオイェン）？」

鳳牙が名前を呼んだ途端、座り込んでいたキャラクターがビクリと身体を震わせ、ゆっくりと顔を向けてくる。

「……鳳、兄……？」

震える手でバケツメットを外し、その下から出てきたのは、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった小燕の顔だった。

「鳳兄っ！」

飛び上がる様に立ち上がった小燕が、鳳牙に抱きついてくる。ちょうど頭がお腹の辺りに来る身長差のため、鳳牙は小燕の頭突きをもろに腹に受けて呻くが、叱るわけにもいかずにただ頭を撫でてやる事しか出来なかった。

「こわ、こわか、た……。なん、で……、ログ、ウトでき……ない、から……」

「うん……」

落ち着かせるように、鳳牙は泣き続ける小燕の頭を優しく撫で続ける。

高校生の鳳牙でも思わず嘔吐してしまったほどなのだから、現実世界では中学に上がったばかりだという小燕にとって、どれほどの恐怖だったのか想像だに難くない。

さらに、この場にフェルドもアルタイルもいないとなれば、小燕の精神的な支えになる存在は鳳牙に出会えるまでいなかっただろう。隅っこで呆然としていたのは、おそらくそういった理由だ。

現状で、知り合い以外の誰かを気遣えるほど精神的に余裕のある者がいるはずもない。

――物語の主人公ならここで『もう大丈夫だ』とか言っちゃうんだろうけどな。

泣き止む気配のない小燕の頭を撫でながら、鳳牙は内心で溜息を吐き出す。
不安な事は自分も同じなのだが、年下の女の子が泣いている状況で強がれないほど男の子をしていないわけではない。
小燕の存在は、鳳牙にとってもすでに精神的な支えになっていた。何か明確な想いがあった方が、落ち着いていられる。

だからというわけでもないのだろうが、その変化に最初に気がついたのは、鳳牙だった。

「……ん？」

鳳牙は違和感を覚えて、視線を舞台の方へ向ける。そこに、

「な……」

思いの外大きな声が出ていたのだろう。鳳牙の声に反応して数人が同じように舞台の方を向き、

「……誰だ？」

誰ともなしにそんな事をつぶやいた。

「……御集まりの皆様、しばしの間、こちらへ注目してください」

凛とした通る声が、ざわめきの声を一瞬で静寂へと変化させる。
声の持ち主は舞台の上に立ち、総勢二十五人のプレイヤーをぐるりと見回した。

パリッとしたメイド服を着用しているが、鳳牙を案内してきたH

ＡＲ-七とは異なり、黒ではなく紺色を基調としたワンピースで、後はほぼ同じ服装だった。
また、顔立ちもＨＡＲ-七によく似ている。だが無表情だった彼女と比べて、こちらには明確な感情の発露がうかがえた。
頭上にＨＡＯ-ＭＩＫＯＴＯ（エイチエーオー-ミコト）という名前が青字で表示されている。鳳牙はそれに識別番号とは趣が異なる、意味のある名前を感じた。
「これより、当イベントの概要を説明させて頂きます。私、説明役を努めさせて頂きますＨＡＯ-ＭＩＫＯＴＯと申します。ミコト、とお呼び下さい」
ＨＡＯ-ＭＩＫＯＴＯ――ミコトはそう言って深々と頭を下げた。
「それでは早速ですが――」
「おいちょっと待てよ。イベントってなんなんだよ」
ミコトの言葉を遮って、一人のプレイヤーが声を発した。それに続いて、
「そうだ。イベントの説明とかどうでもいいから、さっさとログアウトさせてくれよ」
「ってか何偉そうに仕切ってんだよ。どうせお前がＧＭなんだろ？」
「イベントなんてどうでもいいからログアウトさせろよ」
突然の事でストレスが溜まっていたであろうプレイヤーたちが一斉に騒ぎ始め、口々に不満をぶちまけ始めた。
「お静かに願います。ただいまより詳細を説明しますので――」

少し慌てた表情をしつつ、なんとかミコトがなだめようとしているが、全く効果が無い。むしろ不平不満は罵声に変貌し、誰も彼もがミコトを非難し始めた。

「鳳兄……」

いつの間にか泣き止んでいた小燕が、周囲の雰囲気に気圧され、怯えた目で鳳牙を見上げていた。より一層強く鳳牙に抱きついてきており、鳳牙は身動きが取れなくなっている。

――ここまで来るともう収拾はつかないよな。

舞台の上で必死に声を上げるミコト。罵声と野次を飛ばしまくるプレイヤーたち。

数の有利も手伝ってか、プレイヤーたちが収まる気配はない。どころか、ついに舞台に上ろうとするものまで現れている。

舞台に上がったプレイヤーたちは、ずんずんミコトに近づいて行く。そんな姿を見て、ミコトの表情は焦りから、ゴミを見るような侮蔑の表情へと変化した。

「……煩いですね。少し静かに、ついでに大人しくして頂きます」

ミコトがスッと手を伸ばし、パチンと指を弾いた。途端、周囲が一気に静まり返る。

飛び交う罵声と野次が一瞬で収まり、舞台上でミコトに詰め寄ろうとしていた者たちも一斉に動きを止めて黙り込んだ。ただ、その表情だけが驚愕に支配されている。

――なん――しゃべれない？　ってか、動けないのか！

思わず言葉に出そうとして声が出ない事を。とっさに喉に手を当てようとして身体が動かない事を、鳳牙は瞬時に悟る羽目になった。周囲の状況からして、全員に同じ症状が出ているのだろう。

「……ふう。ようやく大人しくしていただけましたね。さて、それでは詳細の説明に入らせて頂きます」

大きな溜息を吐いた後、ミコトは何事もなかったかのように笑顔を作って話し始めた。

「まず第一に、今回のこれは『バウンティハント』というＣＭＯの公式イベントになります。皆様には当該イベントのスタッフのようなものとしてご協力いただきます」

ミコトが手を振って大きなスクリーンを表示させる。画面には目立った字で『バウンティハント』と明記されていた。

「さて、当イベントの内容ですが、この場にいる皆様にはこちらの方で行いましたランク付けに応じて、懸賞金を設けさせていただいております。懸賞金付きのキャラクターは頭上のネーム群が白色から黄色に変更されておりますので、もしも頭上のネームが白いままの方がいましたら申し出てくださいね」

手で庇を作り、ミコトが舞台上から彫像の如く固まって身動きの取れないプレイヤーたちを確認していく。

やがて全てを確認し終えたのか、満足そうに何度か頷いていた。

「さて、当イベントはすでに告知済みです。というか、もう始まっ

てます。掲示板に私の名義で詳細のスレッドを製作してありますので、後ほど閲覧可能になってから私の名前で検索をかけて閲覧しておいてください。皆様は第二陣になります。一週間後には第三陣、次の週に第四陣とし、計百名の賞金首が設定されることになります」

総勢百人。もしもそれだけの人数が同じ境遇に立たされているのだとすれば、現実世界で大きなニュースになっていることだろう。

何がどういう理由でログアウトできない状態になっているのかはまだ分からないが、いずれ何かしらの対応がとられるはずだ。

そう考えて、鳳牙ははたと気が付く。

もし鳳牙の考えの通りなら、今のこの状況、目の前でイベントがどうこう言っているミコトという存在はなんなのだろうか？

そんな鳳牙の葛藤を無視して、ミコトの説明は続いていく。

「懸賞金を得る方法はいたって簡単です。元よりＰｖＰが可能だったエリアを含む、タウンエリア等の戦闘禁止区域を除く全てのエリアで対象となる『黄色表示（イエローネーム）』を討伐できれば、ルートの権利を有する人が賞金を獲得できます」

そこまでの説明で、鳳牙はミコトの言うイベントの趣旨を正しく理解した。

バウンティハントといえば耳触りはいいが、結局のところ、この場にいる者たちに生贄になれと言っているのだ。狩られる側を演じろと。

「ただし、『黄色表示』同士、つまり皆様方は皆様方に対する戦闘行為は行えませんので、基本的には仲良くしてくださいね？　騙し合って互いを囮にして生き延びるのは構いませんけど」

分かりましたか？　とクスクス笑いながら首を傾げるミコト。

その様子に鳳牙は寒気を覚える。今の話の流れでその内容は、決して笑顔で言っていい内容ではない。

「今後様々なプレイヤーが懸賞金目当てに皆様を襲撃してまいりますので、ご注意下さい。あ、ちなみにこのエリア、『異端者の最果て』も戦闘禁止区域です。基本的にこの場所は皆様方と同じ『黄色表示』の方以外は侵入出来ませんのでご安心下さい」

きっちり手をへその下で重ね、ミコトが綺麗な角度でお辞儀をする。

身動きの取れないプレイヤーたちにとっては、その完璧すぎるお辞儀は馬鹿にされたようにしか思えない。

事実、体勢を起こしたミコトの表情は、愉快そうに笑っていた。

「あ、忘れてました。当然、皆様には反撃の自由が与えられています。見事プレイヤーキャラクターの撃退に成功いたしますと、持ち物ボックスに――」

ミコトが手を振り、スクリーンの映像が変更される。

そこには、星を模った宝石のようなものが映し出されていた。

「こちらのような撃退マークが出現します。撃退マークは襲撃者のランクによって手に入る数に差があります。襲撃者のランクはこちらの方で決定しておりますが、判別方法は特にありませんのでご了承下さい」

再びミコトが手を振り、スクリーンの映像が切り替わる。

「撃退マークは特定個数を集めることで、様々な特種アイテムと交換する事が出来ます。現在のＣＭＯに一般には出回っていない強力な限定アイテムになりますので、ご活用下さい」

スクリーンには見た事もない形をした武器や、怪しい色をした薬などいくつかのアイテム画像が表示されていた。

「こういった形で皆様には賞金首として活動していただくわけですが、皆様の真の目的は襲撃者の撃退ではありません」

ミコトがスクリーンの映像を変化させつつ、突然真面目な声で話し始めた。

――なんだ？

動けない鳳牙は、静かに相手の言葉に神経を集中させる。

「皆様の真の目的は、『異端者の最果て』から行ける専用フィールドエリア『世界の境界』の踏破と、その先にそびえるダンジョン『超越者の塔』を攻略することになります」

スクリーンの映像に天高くそびえる塔が映し出される。これが今の説明にあった塔という事なのだろう。

「超越者の塔を攻略した者は、この世界からの解放という特典を得る事が出来ます」

さらりと続けられたミコトの言葉に、その場の空気が一変したの

を鳳牙は感じる。

塔を攻略した者が世界から解放されるという事は、そのままゲームからログアウトが出来るのではないかという希望を想像させる。

実際、鳳牙も同じ事を連想した。よく考えてみればおかしなことなのだが、それでも希望が生まれたという事実は大きい。

「しかし、こちらのフィールドエリアとダンジョンはＣＭＯ最高峰の難易度設定となっております。撃退マークで入手できるアイテム無しではほぼ攻略は不可能かと思いますので、最初は地道に襲撃者を撃退することから始めることをお勧めします」

だが、続くミコトの説明で再び影が宿る。

つまるところ、しばらくはイベントモブとして活動しろということだ。

基本的に黄色表示のキャラしか入れない『異端者の最果て』に篭られてしまったのでは、せっかくイベントと銘打ったのが無駄になってしまうのだから当然だ。

黄色表示たちにも利益をもたらすことで、バウンティハントを活性化させる狙いなのだろう。

「黄色表示となりましても、基本的に皆様は普通のプレイヤーキャラと同じです。タウンエリアにも入場できますし、外部のフィールドエリア・ダンジョンを踏破・攻略する事が出来ます」

物資の補給などをしようと思えば出来るという事なのだろうが、鳳牙としてはわざわざ人目につく町に出入り出来るとは思えなかった。

「また、黄色表示同士以外でなくてもパーティを組めます。ギルドにも所属できますし、またギルドを作って一般のキャラクターを入れる事も出来ます」

正直、それらの措置は無用のように思えた。倒せば一攫千金の賞金首を引き入れられるとして、それに応じる賞金首たちがいるだろうか？　と鳳牙は思う。

いつ寝首をかかれるとも限らない。よほど信用が置けない限りは無理な相談だ。

「ちなみに、パーティを組んだプレイヤーキャラと、黄色表示の設立したギルドに所属させたプレイヤーキャラは『異端者の最果て』に招待する事が出来ます。招待したキャラは一緒に『世界の境界』や『超越者の塔』に連れて行く事も出来ます」

――これも同じ理由で却下だろうな。

どのような形でこのエリアに出入りするのか分からないが、このエリアを利用するもの全員の了解が得られでもしない限り、部外者を引き入れるのはリスクが大き過ぎる。

『異端者の最果て』はその存在を隠蔽しておくべきだ。

「その他事務的な事も含めて、全て我々を通して申請していただくことになります。ギルド設立時に無料のギルドホーム建設アイテムをプレゼントしておりますので、ご活用下さい」

ニコリと笑って、ミコトがスクリーンを消し去った。彼女は再度ぐるりと周りを見回して、

「以上で説明を終わります。えっと、騒がれても面倒なので、質問がある人は挙手を。順番にうかがいます」

ミコトの言葉と同時に、複数のプレイヤーが一斉に手を上げた。鳳牙も自分の腕だけが動かせるようになっていることを確認して、挙手する。

「えーっと、それじゃまずはそこの方。発言してもいいですよ」

ミコトに指名されたプレイヤーは、白銀の鎧を着込む若い剣士だった。彼は何度かぼそぼそと声が出せる事を確認し、

「おいてめえっ！　最初に公式イベントだって言ったけど、ログアウトさせずに何かを強要するなんて犯罪じゃねーのかよ！　んな公式イベントあるかよ！」

罵声交じりの大声を上げた。

しかしミコトは何処吹く風といった感じで、

「ｌｉｂ。お答えします。当イベントは間違いなく公式のイベントです。皆様をログアウト不可能な状況にしたのは確かに私ですが、これは犯罪にはなりません。詳細は申し上げられませんが、現実世界でも全く問題にはなっておりません」

事務的な返答をする。

「問題ないって、そん――」

質問していたプレイヤーが、再び口を閉ざして動かなくなった。

強制的に噤まされたようだ。

「質問は一人お一つまでです。時間もおしておりますので、後五回のみお答えいたします。それと、今は許しましたが次に暴言吐く方がいらっしゃった場合はその場で打ち切りますので。……それでは、次の質問の方は――」

ミコトが新たな人物を選ぼうと首を巡らせると、数人が急いで手を下ろした。おそらく同じ質問をしようとしていたか、もしくは質問ではなく文句を言おうとしていただけだったのだろう。

「それではそこの方、どうぞ」

次に指名されたのは、軽装のダンディなヒゲを生やした壮年のキャラだった。見るからに落ち着いた雰囲気のある人物だ。

「感謝する。では質問だが、我々が賞金首になるとして、撃退に失敗し討たれてしまった場合はどのような事になるのかね？　どこか牢屋のような空間にでも閉じ込められるか、あるいはネームの色が白に戻るのか、それとも――」

彼はそこで一度言葉を切り、やや逡巡してから、

「――死ぬのかね？」

周囲に衝撃を与える一言を放った。

それは都市伝説に存在する、ゲームから離脱出来なくなった事態に必ずと言っていいほどセットで存在する設定。

デスゲーム。ゲーム内の死が現実世界での死になる現象。

彼はそこを明確にさせるための質問をした。

その質問に対し、ミコトはすぐには返答せずに、ニヤリと口の端を釣り上げた。

「お答えします。バウンティハントにおいて討伐されたプレイヤーは――」

ゴクリと、その場の誰もが唾を飲み込んだ。ふつふつと湧きあがる恐怖が、いつ決壊するとも分からないような状況だ。

それを楽しむかのように、ミコトは大きなためを作っている。

そして、

「――消滅します」

ミコトの言葉にその場にいる誰もが息を呑んだ。

質問した男は大きな溜息を吐き出し、了解したと小さく呟いた。

ところが、

「……あのー、何かすごい沈んでますけど、この消滅は一時的ですよ？　ハントイベントが終了するまでの間だけです。イベントが終了すれば黄色表示が解消されて復帰できます」

不思議そうな表情で付け加えられたミコトの追加説明で、意気消沈していた面々が一気に表情に活気を取り戻した。質問者の男も安堵の息を漏らしている。

だが、そんな状況にあって、鳳牙は素直に喜んでいなかった。ずっとミコトの表情を注視し、その変化に気を配っている。

――一時的な消滅？　信じられるかよ。

そんな都合のいい話があるわけが無い。それ以前に、いつの間にかこの不可思議なイベントありきの話になってしまっているが、そもそも今この場にこうしている事がすでに異常なのだ。

その異常の中でとってつけたような救済があるとは到底思えない。その証拠に、

――ちっ。笑ってやがる。

鳳牙はミコトが一瞬ほくそ笑んだのを見逃さなかった。

そもそも、相手の言う事に嘘が混じっていない証拠などない。相手は決められた事しか出来ないノンプレイヤーキャラではないのだ。一ミリも信用する事など出来ない。

「さて、それでは次の質問ですが――」

その後も順調に質問が為され、新たに二つの事が判明した。

一つ。異端者の最果てには各種生産に必要なものがレア物を除き全てそろっており、酒場を含む銀行や露店要員なども建物オブジェクトと一緒に配置されているという事。

つまり通常の生活に関しては金さえあれば生きていけるという事だ。

そしてもう一つ。賞金首はプレイヤーキャラクターに討伐されない限り、つまりフィールドやダンジョンのモンスターに倒された場合は、異端者の最果てに自動送還されて生き返るという事。
その際のペナルティは死亡時の所持品を全部失う事となっているらしい。パラメーター関係のペナルティはないという事だった。

恐ろしくリスクが高いが、襲撃者からの死に逃げも出来るという事になる。

「――という事で、次が最後になります。最後の質問は……そこの獣耳さん、どうぞ」

最初から決めていたかのような速さで、ミコトが鳳牙を指名してくる。指名された途端、他のプレイヤーとは異なり身体の全ての自由が利く様になっていたので、鳳牙は軽く身体を動かす。
そうしてちらりと視線を下に向け、心配そうな目をしている小燕の頭をポンポンと叩き、鳳牙はミコトに向き直った。

「じゃあ、最後の質問をさせてもらう」

大体の事は先の四つの質問で理解出来ていた。
出来る事と出来ない事。やるべき事とやってはならない事。それらをさらに補強する質問をするべきなのだろうが、鳳牙はすでに質問する事を決めていた。
後で他のプレイヤーから顰蹙（ひんしゅく）を買うかもしれないが、聞いておかなければならない事だった。

だから、鳳牙は迷う事無くそれを質問する。

「お前、なんなんだ？」

ただ一言。ただそれだけ。

真っ直ぐにミコトを見据え、鳳牙は返答を待つ。

ミコトはそんな鳳牙の視線を真っ向から見つめ返し、

「名前を読み上げて返事にしてもよかったんですけど、それじゃつまらないですね」

やれやれと言うようにふうと溜息を吐いて、

「ｌｉｂ。お答えしましょう。ｌｉｂｅｒａｔｅ。私はそれを望むものであり、それを手段とするものです」

静かな声でそう言った。

鳳牙を貫いたはるか先を見つめるような、そんな目をしていた。

鳳牙はその目に気圧されて、何の反応も返す事も出来なかった。

「さて、質問は以上ですね。これ以降、私は特定の場合を除いて皆様の前には現れません。新しい質問事項などは――」

さっとミコトが手を挙げると、突如として数十名のメイドたちが出現し、舞台の上を埋めた。

髪色や髪型、瞳の色などの違いはあるが、顔立ちは全てミコトによく似ていた。

――ん？

鳳牙は整列するメイドの中にＨＡＲ-七の姿を見つける。彼女は何故か鳳牙の視線に気が付いたようで、それとなく目を伏せてお辞儀をしてきた。

「――皆様のご案内をさせていただきました彼女達にお申し付け下さい。皆様にはこのエリア限定ですが、メイドコールという機能を使用出来ます。待機している彼女達からランダムに選ばれてお伺いさせて頂きますので、よろしくお願いいたします」

ミコトはその他に【ささやき】チャットの変更点と、掲示板等の閲覧規制解禁について説明し、

「それでは、この後舞台にトランスポーターが出現いたしますので、まずは『異端者の最果て』の中心街で準備を整えてください。皆様の御武運をお祈りさせて頂きます」

ミコトに合わせて、全てのメイドがそろって頭を下げ、そのまま消えて行った。

その直後、全員に身体の自由が戻り、がやがやと騒がしくなる。再び罵声を上げる者。知り合い同士で今後のことについて話し合う者。おそらくは掲示板等を確認している者。様々だ。

「鳳兄……」

不安そうな声で、小燕が鳳牙を呼ぶ。

鳳牙はそんな小燕の頭を優しく撫でてやり、舞台上へ視線を戻す。ミコトの言った通り、一つのトランスポーターが出現していた。

静かに浮き沈みをしつつくるりくるりと回るその様はあまりにもいつも通り過ぎて、何故かひどく憎らしかった。

その１（後書き）

第二章　バウンティハント　その２からは不定期更新になります。
出来る限りの速度でＵＰできればと思いますので、よろしくお願いいたします。

その2

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　【公式】イベント開催【告知】

この度はＣＭＯをプレイしてくださり真にありがとうございます。

早速ではありますが、長期夏季休暇へ向けて新規のイベントを開催いたします。

イベント名は『バウンティハント』です。

イベント期間中は世界各地で『黄色表示（イエローネーム）』という頭上のネーム群が白でも青でもなく『黄色』になっているキャラクターが出現します。

このネームが黄色キャラクターが賞金首、討伐対象になります。

あの手この手でこれら賞金首の討伐を目指してください。

これらのキャラはかつてＣＭＯをプレイして頂き、現在はいわゆる引退という形でログインしていないかつてのプレイヤーたちのキャラ

クターを雛形に、人工知能が操作しているキャラクターになります。
（元のプレイヤー様にはご連絡の上、了解を頂いております）
そのため、ただのノンプレイヤーキャラとは異なり、様々な対応を
取って来ます。
例えば、複数で協力して皆様を撃退しようとしたり、出会ってすぐに
逃げようとしたり。
もしかしたら見逃してくれるように頼んでくるかもしれません。
それらに対する皆様の行動は自由ですが、対応の仕方によっては何か
特別なイベントが発生する事があるかもしれません。
もしかしたら、誰も知らないフィールドやダンジョンに行ける……かも。

また、賞金首には『ウォンテッドネーム』という二つ名が付いている
キャラクターも存在します。
基本的には次に説明する賞金首ランクの上位者に付けられるものですが、
稀に下位ランクのキャラにも設定されている場合があります。
『ウォンテッドネーム』付きの賞金首は一筋縄では行かない賞金首たち

ですので、見かけた際は注意しましょう。
『ウォンテッドネーム』付きを討伐いたしますと、ある特典が用意されてお
ります。腕に自信のある方は頑張って挑戦して下さい。
それでは次スレで賞金首ランクと賞金額、及びウォンテッドネーム付き
を含む賞金首たちの名称をご紹介していきます。
第一弾は二十五名の賞金首が現れます。
次の週には第二弾としてさらに二十五名。
最終的に第四弾で同数追加し、総勢百名の賞金首が出現いたします。
皆様奮ってご参加下さい。

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　ランクＳ　賞金　一千万　ゴールド

『賢人（けんじん）』　フェルド
『鉄拳（てっけん）』　竜虎

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　ランクＡ　賞金　五百万　ゴールド

『巨星（きょせい）』　アルタイル
『五色（ごしき）』　エルシュリー
ねるふど

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　ランクＢ　賞金　三百万　ゴールド

夜露死九
旅烏
マリアピン
ウシャプノス

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　ランクＣ　賞金　二百万　ゴールド

ＨＥＬＬＯ
ナヌーケイレス
じーニあす
ｋｋ
明日真

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　ランクＤ　賞金　百万　ゴールド

てすタメント
栗尾根
クヴァケコ
Ｊａｄｇｅ
オシリル

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　ランクＥ　賞金　五十万　ゴールド

投稿者名：ＨＲＯ-ＭＩＫＯＴＯ　【公式】イベント続報【告知】

この度はＣＭＯをプレイしてくださり真にありがとうございます。

皆様におかれましては長期夏季休暇いかがお過ごしでしょうか。

早速ですが、イベントの続編の連絡をさせて頂きます。

バウンティハントイベント第二弾！　新たな賞金首たちが追加されました。

下記のランク別に『Ｎｅｗ』の文字が付いているのが新しい賞金首たちです。

すでに討たれた賞金首には『討伐完了』と明記されています。

討伐状況は随時更新していきますので、ご確認下さい。

投稿者名：ＨＲＯ－ＭＩＫＯＴＯ　ランクＳ　賞金　一千万　ゴールド

フェルド
竜虎
鳳牙
ハヤブサ

New『賢人』
New『鉄拳』
New『銀狼』
New『迅雷』

投稿者名：ＨＲＯ－ＭＩＫＯＴＯ　ランクＡ　賞金　五百万　ゴールド

アルタイル
エルシュリー
ねるふど
小燕
ＤＡＭＣＵＳＴ
ヴぁーん

New『巨星』
New『五色』
New『鉄壁』
New『無音』

投稿者名：ＨＲＯ－ＭＩＫＯＴＯ　ランクＢ　賞金　三百万　ゴールド

夜露死九　※討伐完了
旅烏
マリアピン
ウシャプノス

――――――

鳳牙がバウンティハントイベントに巻き込まれてから、瞬く間に二日が過ぎた。

その間に、分かった事がいくつかある。

まず、鳳牙が意識を取り戻した日が八月六日であった事。

鳳牙たちが火之迦具土神（カグツチ）の討伐を行ったのが七月六日なので、丸一ヶ月もの空白期間が存在するという事になる。

その間ずっとゲーム内で気絶していたというのなら、生身の鳳牙――圭介の身体が大変な事になっているはずだった。

しかし、圭介は自分の身体に変調を感じない。もっとも、現在は鳳牙という存在が現実化しているような感覚のため、よく分からないというのが本音だった。

実際、今までのゲームとの最大の相違点は、ゲームキャラクターのままで生理現象が発生してしまうという事だった。

空腹をおぼえて物を食べれば満たされ、喉の渇きは飲料で潤せる。排泄行為も見事に催し、トイレという存在が今のところ見当たらない状況で、かなりの苦痛を強いられていた。

また、そういった行為が出来るという事で、少なくとも『異端者の最果て』においては禁止行為が存在しない可能性があった。現実世界で犯罪になる行為は本来システム側で強制的にブロックする仕様になっているのだが、この場所ではそれが機能しない。

そのため、鳳牙は小燕が妙な事に巻き込まれないように特に気を配った。他の女性プレイヤーたちも出来る限り複数名で行動するように心がけているようで、なんとなく男女間でギスギスした空気が漂っている。

今はまだ何も起こってはいないようだが、最終的には最大百名のプレイヤーが終結する事になると考えると、いつ何が起きても不思議では無かった。

もう一つ分かった事は、火之迦具土神の討伐メンバーは全員が巻き込まれてしまっているという事だ。

掲示板でフェルドとアルタイルの名前を確認した鳳牙は、すぐさま【ささやき】で連絡を取り、すでに異端者の最果てにいた二人とその日のうちに合流する事が出来た。

◆

「フェルドさん！　アルタイルさん！」

「鳳牙！　小燕も！」

小燕と一緒に劇場のトランスポーターを利用した鳳牙は、移動先で待っていたフェルドとアルタイルの二人と抱き合って無事を確認しあった。

「う～、フェル兄とアル兄もいてよかったよう」

「うぬ。あるいは巻き込まれていなければと思わないでも御座らんかったが、やはり仲間が一緒というのは心強いもので御座る」

小燕は再び軽くではあるが涙ぐみ、それに釣られたのかアルタイルが鼻をすすりながらうんうんと頷いていた。

鳳牙と小燕よりも一週間早く巻き込まれていたフェルドとアルタイルは、無闇に出歩かずにまずは情報収集と現状把握を行っていたらしい。

その結果判明した事の一つに、以前のコミュニティ関係が全て破壊されているという点が挙げられる。

具体的には、まず鳳牙も確認していたフレンドリストの初期化だ。

改めての登録は可能だったが、以前の交友関係は全てなかった事になっている。

次にギルドの脱退だ。

鳳牙と小燕がフェルドとアルタイルと合流した時、鳳牙は二人の頭上からギルドネームが消え去っている事に気が付いた。話を聞くと、おそらくは目が覚めたときにはすでになくなっていたのだろうという事だった。

言われてみれば、と鳳牙も劇場に集まっていたプレイヤーキャラクターたちを思い出す。

全員頭上にはキャラクターネームしか存在していなかった。あれは全員がギルドに属していなかったわけではなく、何らかの理由でギルドを脱退していたものもいたという事なのだ。

現在【ささやき】は『黄色表示』同士か、パーティーを組んだ一般キャラ及びギルドに所属させた一般キャラ以外には使用出来ない設定に変更されてしまっている。

そのため、フェルドもアルタイルもかつての仲間に連絡を取る事

が出来ないでいた。

最も、その点に関しては掲示板の告知で勝手に『引退』扱いになっている上、操作しているのが人工知能という――よく考えれば突拍子もないのだが――設定のせいで、すんなり話が出来るのかといえば微妙だった。

事実すでに討伐された賞金首は四名いるらしいが、その全てがかつての知り合いに会いに行った結果だというのだから、鳳牙としては実にやるせない思いだ。

「僕も最初は騎士団の団長に連絡とろうと思ったんだけど、そんな話を聞くとどうしたものかと思ってね。なまじ大きなギルドだから、待ち伏せされたら逃げ切れないだろうし」

仲間だった人たちを疑いたくはないんだけどね、とフェルドは悲しそうに目を伏せている。

「うぬ。拙者の煌星忍軍とて同じようなもので御座る。人員は少ないで御座るが、もしもを考えるとおいそれと連絡する事は出来んで御座る」

アルタイルが低く唸った。催眠罠なども使える忍者は、魔術師と並んである意味で賞金首たちの天敵とも言える存在だ。

ゲームから出る事の出来ない賞金首たちは、現実世界の情報を知ることができない。掲示板に大きなニュースの話題を投稿するプレイヤーがいるにはいるが、それはまったく重要な情報ではなかった。

そのため、可能であればログアウトの出来る協力者を見つけたいところなのである。

賞金に釣られずに話を聞いてくれるプレイヤー。それは赤の他人ではありえない。だからこその知り合いなのだが、その知り合いも信用しきれない。

どうしたものかと思案して、鳳牙は一人の人物を思い出す。

「……そうだ、御影さん」

「「「え？」」」

鳳牙の言葉に、三人の視線が集中する。

「いや、ほら、俺たちって御影さんから依頼を受けて、その後でこんな事になってるじゃないですか。だから、もしかしたら御影さんはこの状況に疑問を持ってくれてるかもしれません」

素材収集の依頼をしたメンバーが、素材を持って帰ってくることなくそろって引退するなどという事態が普通であるはずが無い。現実の顔が見えない付き合いであっても、一人二人ではないのだ。

「そうか。確かに御影さんならどこかのギルドに所属してるわけじゃないし、あの工房は元々他のプレイヤーもめったに近づかないエリアにある」

「うぬ。隠密行動にはうってつけの場所で御座るな」

「でも、どーやってカルテナの森に行くの？　ってか、あたしこのエリアがどんなところなのかも知らないんだけど……」

「ああ、そっか。小燕と鳳牙はここに着たばかりだもんね。えっと、何処だったかな……」

フェルドがなにやらごそごそと懐を漁ったかと思うと、

「あった」

突然目の前に大きな紙が出現した。紙の表面には左上に大きく書かれた『異端者の最果て』という文字と、規則性のない形に枠どられた図形、及び黒点とそこから線を引いた注釈が書き込まれていた。

「地図、ですか？」

ぱっと見の第一印象でそう思い、鳳牙が確認をとる。

「うん。露店で白地図とペンが売ってたから、二・三日かけてエリア全体を動き回ってみたんだ」

「拙者とフェルド殿で南北に分かれ申してな。このエリア何があるのかを探ったで御座る」

互いに地図とペンを持って何処に何があるのかを逐一書き込んでいき、最後に二つをあわせたものを清書したらしい。

鳳牙の知るＣＭＯには存在しなかったアイテムだ。おそらく、この場所でしか手に入らない代物だろう。

「とは言っても、建物関係は露店とかがあるこの中心地と、南東の外れにある劇場くらいだったけどね」

フェルドの指が地図の中心に打たれた黒点と、南東の窪地に打たれた黒点を示す。それぞれに『中心街』と『劇場』という注釈が書き込まれている。

「なるほど。それじゃあ、他にも打ってある黒点は何があったんですか？」

「南側のは畑オブジェクトだね。料理スキル持ちじゃないと使えないけど、食べ物の栽培が可能みたいだ」

そう言って、フェルドはそこから西へ行った黒点を指し、

「あとこっち側には猛牛（もうぎゅう）と轟鳥（ごうちょう）と王豚（おうとん）がそれぞれに群れを作ってた。試しに倒してみたんだけど、普通に無限湧きみたいだね」

「うぬ。北側には材木の採れる森に隣接して湖があったで御座る。淡水・海水系を問わず色んな魚が泳いで御座った。釣るなり倒すなりしてドロップを得る事が出来るようで御座る」

北西側に打たれた点をアルタイルの太い指が指し示す、続いて彼はそこからさらに北へ滑らせた。

「ここに鉱山もあり申したが、一番奥で金が採れる他は目ぼしいものは御座らんな」

フェルドとアルタイル双方の話を聞いて、劇場でのミコトとの問答を思い出す。レア物を除く生産に必要なものが全てそろっているというのは本当のようだった。

「ねーねー。露店には地図とペン以外には何が売ってたの？」

小燕が遠くに見えるカウンターのみ設置された露店を指差して尋ねている。

「露店かい？　えーっと魔法の触媒とか料理関係の調味料とか――」

「拙者の投玉・罠玉の元になる素材玉や、武具の基本材料なども売っていたで御座る。価格は特に高くも安くも御座らんな」

小燕の質問に、フェルドとアルタイルが連続で答える。

それだけの品揃えであれば、活動の拠点としては申し分ないと鳳牙は思った。不本意だが、なかなかに至れり尽くせりの感がある。

「そんなわけで、準備はきっちりここで出来る。あとは、最初の質問のこのエリアからいける場所についてだけど……」

フェルドは地図をしまい込むとなにやら一度動きを止め、直後に笛を吹くような音が大きく鳴り響いた。

「……？　フェルドさん、今のなんですか？」

「何って、メイドコール」

「え？」

さも当然のように言われ、鳳牙は思わず聞き返していた。それに対してフェルドが再び口を開きかけたところで、

「お呼びでしょうか？　ウォンテッドネーム『賢人』のフェルド様」

鳳牙たちから二歩ほど離れた位置に黒髪のメイドが音もなく出現していた。

「あ……」

そのメイドを見て、鳳牙は思わず小さな声を出す。

頭上に表示される名前は、ＨＡＲ‐七となっている。鳳牙を案内してきたメイドだった。

彼女はちらりと鳳牙を確認して、すぐさま視線をフェルドに戻し、

「ご用件を」
「ああ、ご苦労様。えっと、この二人にこのエリアから移動できる場所についての説明をお願いできるかな？」
「ｌｉｂ。ご説明させて頂きます」

深々と頭を下げて、ＨＡＲ‐七は空中を撫でるように手をスライドさせ、あの時のミコトのように何も映っていない真っ暗なウィンドウを表示させた。

「よろしいでしょうか？　……異端者の最果てから移動できるエリアは全部で五つあります」

ＨＡＲ‐七の指が動き、黒一色だったウィンドウに不気味な色をした空と、これまた植物たちが映し出される。入ったら二度と外に出られなくなりそうな、呪いの森と形容するのが相応しいような感じだった。

「まずは専用エリア『世界の境界』。画像は森のように見えますが、ところにより沼地であったり砂漠であったり草原であったり荒野であったりと、大変バラエティに富んだエリアとなっております」

まるで遊園地のアトラクションを紹介しているような雰囲気である。ただし、ＨＡＲ‐七の声に感情が乗っていないため、鳳牙は機械音声のナレーションを聞いているようだと思った。

「次に、『ドルミナス高原』の西北、崖下の神殿跡です」

ウィンドウの画像が切り替わり、朽ち果てた神殿が映し出される。

「おー。あの見えない壁で絶対に行けない神殿跡かー」

小燕が目を丸くしてウィンドウを見つめている。

小燕の言う見えない壁というのは、キャラクターが崖から落ちないように設定された移動禁止区域の壁の事である。ウィンドウに映る神殿跡はその崖の上から見る事の出来るオブジェクトで、いずれ地下ダンジョンか何かの入り口として解放されるだろうと言われていたものだった。

「ｌｉｂ。神殿跡から崖の上へは、専用のトランスポーターが御座いますのでそちらをご利用下さい。転送場所はランダムな範囲に設定されています。逆に崖の上から神殿跡に戻る際は、そのまま崖から飛び降りてください。自動的に異端者の最果てへ転送されます」

「うえ。アタシ、トビオリル、コワイ」

「安全は保障いたしますのでご安心下さい」

小燕の片言ボケにも真面目に返答しつつ、ＨＡＲ-七は残りのエリアについての説明を続けていく。

それ以降二つ目までの転送場所は、両方ともダンジョンであった。

『廃都ベルクドレム』のアドラ城。「惑わしの森」とも呼ばれる『アストレイの森』。

前者はモブの湧きが非常に多く、また再湧きも早い事。後者は地形がループしたり順路が変更されたりしてパーティーをバラバラにされる難所として知られている。

「最後がシルフェリシア大草原、エリアの中心地にある通称「雷神の領域」です」

ウィンドウには雷が直撃している巨大な避雷針が映し出された。

シルフェリシア大草原にはこの避雷針を中心に、かなりの広範囲に渡って間断なく雷が降り注ぎ続ける危険地帯が存在する。フィールドを通過するだけならわざわざその範囲を通る必要が無いため、何か目的でもなければまず近づかない場所だった。

移動可能な五つの場所を確認して、鳳牙はとあることに気が付いた。全ての移動場所が待ち伏せされにくいか、あるいは不可能な場所なのである。

考えてみれば当然だった。賞金首の出現位置が判明すれば、当然その場所に張り込んで不意打ちをかけるのが手っ取り早い。だが、移動可能な場所はその待ち伏せで長時間待機出来るほど生易しい場所ではない。

必然的に賞金首たちがエリア移動の隙を狙われる事は少ないが、

「これ、移動先からの移動がすでに大変じゃないか？」

鳳牙の疑問はそれだ。近づくのが危険な場所に転送場所を設定して待ち伏せ対策するのはいいが、そんな場所へ転送される賞金首たちもまた当然ながら大変である。

「ｌｉｂ。ご安心下さい。転送先のすぐ近くに一定時間専用のトランスポーターが出現し、同一エリア内の比較的安全な場所へランダムで移動する事が出来ます。移動先に待ち伏せの気配がある場合は最優先で選択肢から除外されますので、ランダム移動ポイント全てが待ち伏せ対象となっていない限りは不意打ちの危険性は皆無です」

淡々とＨＡＲ-七が追加の説明を行う。

――なるほど。一応は賞金首側にも配慮がなされてるってわけか。

鳳牙は内心で相手の言葉を反芻する。今の説明の通りであれば、運頼みの待ち伏せに遭遇する事もないはずだ。安心というには程遠いが、まあまあの折衷案だろう。

「以上で移動可能エリアに関する説明を終了させて頂きます。……他にご質問は御座いますか？」

汗一つかかず、あくまで無表情のままＨＡＲ‐七が確認を取ってくる。

鳳牙はフェルドを見るが、彼が首を横に振ったので、

「いや、もうない」

「ｌｉｂ。それでは失礼いたします。また何かありましたら遠慮なくコール下さい」

静かにお辞儀をして、ＨＡＲ‐七はゆっくりとその姿を透けさせて消えていった。

「さて、というわけで転送場所に関しては頭に入れられたかな？」

「はい」

「はーい」

鳳牙は頷き、小燕は手を挙げて応える。

「うぬ。しからば御影殿の工房へいかにして訪れるか、その作戦を練るで御座る。外は金に目が眩んだプレイヤーが溢れておる故、油断出来ないで御座る」

「そうだね。移動場所はもちろんシルフェリシア大草原だけど、帰りはどうするかだね。カルテナの森のもっと奥にドルミナス高原への一方通行もあるから、草原へ戻るかそっちへ行くか決めておかないと」

その後しばらくあーでもないこーでもないと議論を重ね、納得のいく準備に二日を要した。

◆

「それじゃ、メイドをコールするよ」

フェルドの言葉に、鳳牙たち三人は頷く。いつかのように笛を吹く音が響き渡り、

「お呼びでしょうか？　ウォンテッドネーム『賢人』のフェルド様」

目の前にメイドが出現した。頭上に表示されたネームは――

「あれ？　また君？」

ＨＡＲ‐七という文字列を見て、鳳牙が声を漏らした。

「ｌｉｂ。私では不都合が御座いますでしょか？」

特に気分を害するでもなく、ＨＡＲ‐七は淡々と鳳牙に質問を返した。

「いや、コールってランダムなんだろ？」
「ｌｉｂ。待機中の我々からランダムで参上いたします。なので、私が呼ばれた事におかしな点はありません。……もしもご不満であれば、再度コールしていただければ――」
「ああいや、別に深い意味はないんだ」

鳳牙はやや慌ててＨＡＲ‐七の言葉を遮る。なんとなくだが、最後の言葉にすねるような印象を抱いたせいだ。表情に変化はなく、声に感情が乗っているように思えないのだが、なんとなくそう思ったのである。

――まあ、錯覚か。

内心でそう納得し、鳳牙はそれ以上考えるのを止めた。

「えっと、もういいかい？　悪いんだけど、僕ら四人をシルフェリシア大草原へ転送して欲しいんだ」

鳳牙とＨＡＲ‐七のやり取りに首を傾げつつ、フェルドがＨＡＲ‐七に転送の依頼をする。

「ｌｉｂ。フェルド様、アルタイル様、小燕様、鳳牙様、以上四名をシルフェリシア大草原へ転送いたします」

ＨＡＲ‐七が両手を広げ、静かに目を閉じる。

「座標検索開始……転送ポイントスキャン開始……スキャン完了。トランスポーター起動」

ＨＡＲ‐七が呟くと同時に、鳳牙たちの足元に青白い光を放つ幾

何学模様が出現する。

「わおなにこれすげー」

「見た事ない魔法陣だな」

「うぬ。少々緊張してきたで御座る」

それぞれがそれぞれの反応を返す中、鳳牙は無言で目の前のメイド少女を見つめていた。

能力の解放で何らかの力場が発生しているのか、エプロンドレスやセミロングの髪の毛がふわふわと浮かび上がっており、なんとも不思議な光景だった。

「転送ポイント選択完了……座標固定……、完了」

すっと、ＨＡＲ‐七が閉じていた目を開いた。青を帯びた闇色の瞳が鳳牙を映し、まるで吸い込まれるような印象を受けた。

「準備完了です。最終確認になります。宜しいですか？」

ＨＡＲ‐七の問いに、フェルドが黙って頷いてみせる。

「ｌｉｂｅｒａｔｅ（リベレイト）。皆様の御武運をお祈りいたします」

ＨＡＲ‐七がその手を重ね、静かにお辞儀をしたのと同時に、鳳牙の視界は一瞬にして暗転した。

◆

その3

轟音と共に落雷が発生し、その都度大地が爆ぜていく。雷光は目を焼き、気を抜いた瞬間に視界を白く焼き尽くしてしまう。

そこは雷神の領域というよりも、雷の遊び場と言う方がしっくり来そうなほど、無秩序な雷が暴れまわっていた。

「いやあ、聞くのと実際に見るのと、あとその中にいるのとじゃ全然違うね」

顔を引きつらせながら、フェルドが気分を落ち着けるために眼鏡の位置を直した。

頭上にはチャットウィンドウによる吹き出しが表示されており、彼の台詞はそこに表示されていた。

雷の音が煩過ぎて声がまるで届かないのである。

「うぬ……これは凄まじいで御座る」

「うええ。なんも聞こえないなんも見えない」

アルタイルと小燕も同様に吹き出しを表示させ、両手で耳を塞ぎながらそんな文句を言っていた。

そして鳳牙は、

「……」

吹き出しを表示させず、うつむき加減にゆらゆらと揺れていた。何故か立っているのがやっとという感じである。

その様子を不審に思った小燕が下から鳳牙を見上げて、

「鳳兄どう――うわっ！　やばいまずいフェル兄！　鳳兄がうつろな目でグロッキーになってる！」

急に焦ったようにそんな長文を吹き出しに表示させた。

それを見て、

「あ、そうか。鳳牙って獣人だから、もしかしたら今の状態だと耳とか鼻とか普通の人間よりも敏感なのかも」

「うぬ。それは便利で御座るな」

二人がそんなのんきな答えを吹き出しに表示させる。

「フェル兄！　アル兄も！　そんな事言ってる場合じゃないよ早く移動しないと鳳兄が！」

怒りのエモートと一緒に小燕がジェスチャーを交えた発言を表示させ、鳳牙の手を取って避雷針の近くでくるくる回っているトランスポーターへ向かっていく。

フェルドとアルタイルは互いに顔を見合わせ、それぞれ肩をすくめたり頭をがしがしとかいたりしながらその後に続く。

そうしてトランスポーターによって移動した先は、先ほどまでの

騒音が嘘のように静かな場所だった。
さわさわと駆け抜けていく風が、地面に生える草木をざわめかせていく音だけが聞こえてくる。

「鳳兄、大丈夫？」
「……ああ、なんと、か」

心配そうに見上げてくる小燕に対し、鳳牙は何とか笑みを作った。
正直に言えば、未だに耳がガンガンしている上、そのせいで視界がぐるぐる回転している。落雷の轟音と衝撃で、三半規管をひどくやられてしまったようだった。

――まさかそういった能力まで獣人化してるとは気が付かなかったな。

思えば、やたら勘が鋭くなったような気がしていたのはこのせいだったのだろう。人の気配に敏感になっていたのは、気が昂ぶっていたせいでは無かったというわけだ。

「どうだい鳳牙。ちょっとは良くなった？」
「……あー、はい。多分歩く分には。全快まではもうちょいかかりそうですけど」

正直なところ、飛んだり跳ねたりはまだ難しそうだった。それでも、早く移動しなければならない。

鳳牙は多少ふらつきながらも一歩足を踏み出そうとして、

「そっか。それじゃあもう少し待とう」

フェルドの言葉に動きを止める。見てみると、当の彼は草の大地に腰を下ろした。

鳳牙の何故？　という雰囲気が伝わったのだろう、フェルドが肩をすくめて、

「だって、僕らは今お尋ね者なんだよ？　どこで誰に襲われるか分からないんだ。万全の体調で迎え撃つにこしたことはないさ」

そんなことを言う。

隣でアルタイルもうんうんと頷いていた。

「なんせ僕らの賞金合計額は三千万ゴールドだからね。慎重に行動してし過ぎるって事はないよ。ひとまず転送してきたばかりの内は安全度が高いってことなんだし、鳳牙の体調が戻るまではしばらく待機さ」

「うぬ。鳳牙殿が気にする必要はないので御座る。今後もっと大変な事態が起こるやも知れんで御座る。この程度の事を気にしていては互いに持たんので御座る」

「そうだよ鳳兄。鳳兄はパーティの主力アタッカーなんだから、鳳兄が欠けたらあたしたちも死んじゃうかもしれないんだからね」

「小燕、君のそれはちょっとしたプレッシャーだよ？　それにそれを言うなら僕らは誰一人が欠けてもパーティーとして機能を失うんだから、全員下手な事は考えちゃ駄目だよ」

それぞれの励ましを最後にフェルドが戒める。

鳳牙は胸の内に、温かな感情が宿るのを感じた。

「そうですね。危ない橋を渡る事も多くなるんでしょうけど、とに

かく生き延びて、何が起こってるのか知らないと」

大人しく鳳牙も地面に腰を下ろし、しばらくその場で休んでから、四人は移動を開始した。

街道は当然のごとく避けて進んでいく。街道は最短の移動ルートのため、数多くのプレイヤーが利用しているせいである。

賞金狙いのプレイヤーではないとしても、不用意にこちらの存在を気付かせるのは得策ではない。シルフェリシア大草原には森のように身を隠せる場所はないが、背の高い草が生えている場所なども多いため、屈みながら移動したりしゃがみ込んだりすることで一時的に身を隠すことは出来る。

実際、何度か一般プレイヤーに遭遇しそうになったが、何とかやり過ごすことが出来た。

そうして、何とか月森の町トリエルへのトランスポーターへと到着する。

「さて、一応タウンエリアでは襲われる心配はないけど、移動直後はどうしたってトランスポーターの近くに出る事になるから、万が一誰かがいて見つかってしまった場合、とにかく町を走り抜けてカルテナの森へ入るよ」

トランスポーター使用前に、フェルドが行動指針を確認する。

普段はほとんど人がいる事のないタウンエリアであっても、現在のバウンティハントイベント中においてはあまり楽観視するべきではない。

人の少ない場所ほど穴場という考え方も出来るためだ。

「あそこは目隠しになるものも多いし、何より薄暗くて視界が利きにくい。草原の方へ後退するよりはマシなはずだから」

確かに、隠れるという意味ではただっ広い草原よりもずっと向いている。

その分敵も身を隠しやすいのだが、御影の工房がある事もあって、四人ともカルテナの森のフィールドは熟知していた。地の利で負ける事はほぼない。

「それじゃ、一気に行くよ。町に入ったらとりあえず左前方の空き家の影に。いいかい？　三……二……一……ゴー！」

フェルドの合図で、全員が一気にトランスポーターに飛び込み、視界が切り替わると同時に打ち合わせ通り建物の影に潜む。

鳳牙はすぐさま辺りの気配を探り、ややあってからゆっくりと息を吐き出した。

フェルドが目で合図を送ってきたので、鳳牙はクリアの合図を返す。

「……よし。トランスポーターから見えない経路で手早くカルテナの森へ入ろう」

全員で頷きあい、町の反対側にあるトランスポーターを目指す。

トリエルは相変わらずノンプレイヤーキャラ以外は無人だった。人気のない道を進み、鳳牙たちはカルテナの森へのトランスポーターの見える位置に身を潜める。

「さてここからだ。全員、チャットを【ささやき】に設定して」

フェルドの指示が飛び、鳳牙はチャットの設定を【ささやき】に変更する。
声を外部に漏らさないためと、万が一声が届かないほど離れてしまった場合でもすぐに連絡を取れるようにするためだ。

『いいかい？　まずはアルタイルが先行。周囲の状況を確認後、僕、小燕、鳳牙の順番で移動するよ』
『はーい。何でアル兄が最初？』

小燕が先生に質問するように大きく挙手する。パーティーの壁役である自分が選考するべきではないかと言っているのだろう。
その質問に対しフェルドは眼鏡の位置を直しながら、

『アルタイルの回避力なら、もし向こうで襲われてもそう簡単に致命傷を喰う事はない。さらに足元に罠玉を撒けばうかつに近づく事も出来ないし、目隠しにもなる』

罠は即効性に欠ける分、効果範囲と持続性が優れている。不意を撃たれてもすぐに罠を撒いて後退すれば、追撃を防ぐ事は十分に可能だ。

フェルドの立案に、鳳牙は無言のまま次の言葉を待つ。

『一人ずつ行くのは魔術師の範囲魔法対策。全員が一度に喰らったら回復が追いつかなくなるからね。まあ向こう側に敵がいたとして、その編成次第で撤退か応戦かが決まるけど。……アルタイル、君のもたらす情報が僕らの命綱だ』
『うぬ。大役に御座るが、見事果たして見せるで御座る』

フン！　とアルタイルがボディービルダーのようなマッスルポーズを取り、黒装束がはち切れんばかりに膨らんだ。
小燕はやんややんやと手を叩き、フェルドは盛大な溜息を吐いている。

――うん。いつも通りだ。

鳳牙はそんな仲間の様子を楽しい気持ちで見ていた。このメンバーならきっと大丈夫だと、根拠もない自信が湧いてくる。

『アルタイルさん、お任せします』
『うぬ。しからば、そろそろ行くで御座る』

アルタイルは周囲をきょろきょろと確認し、サササッとトランスポーターに接近。その勢いのまま鳳牙の視界から消えていった。

自然と、鼓動が早くなる。まだ数秒しか経っていないというのに、すでに何分もの時間が過ぎ去ったような感覚にだった。
そうして、

『……クリアに御座る。周辺には誰もおらんようで御座る』

アルタイルからの【ささやき】が入った。

誰ともなしに安堵の息を吐き出し、続いてフェルドが周囲を確認しつつトランスポーターに侵入していく。

『いいよ。小燕もこっちに』

すぐに合図が来て、小燕がガシャガシャと鎧をこすらせながらト

ランスポーターに向かっていく。

鳳牙はそれを見届けつつ、再度周囲の気配を探った。タウンエリアのノンプレイヤーキャラには気配が無いので、今は誰の気配も感じられない。

『鳳兄いいよー』

小燕の【ささやき】を受けて鳳牙もトランスポーターへ接近し、そのままカルテナの森へ移動する。視界が切り替わると、先行した三人がすぐそこにいた。

『じゃあ行こうか。今のところ見つかった気配はないけど、ここからはなるべく先を急ごう』
『はい』
『うぬ』
『ういさー』

鳳牙たちはつい先日のようで、実際には一月以上も前に通った道を進んでいく。時折現れるモブをさっくりと倒しながら、四人は御影の工房へ急いだ。

そうしてしばらく進み続け、途中で鳳牙は小さな違和感を覚えた。

『……フェルドさん』
『なんだい？』
『何か、モブが少なくないですか？』
『そうかい？　まあ前回は団体にぶつかったからね』

その対比で少なく感じるのではいか、というのがフェルドの返答

だった。

確かに、鳳牙としてもそう言われればそうなのかもしれないという思いはある。だが、ちりちりとうなじが焼けるような、全身の毛が逆立つ感覚が、どんどん強くなっている。

鳳牙はより一層周囲に気を配った。カルテナの森には気配のあるモブが存在するため、ただ気配を探るだけでは何も分からない。だから、その動きに注意を払う。

――右前方に二体。通過した左に一体。……追って来る気配が無いな、今のはモブか。

進みながら、鳳牙は絶えず気配を探り続ける。頭の獣耳がピクリピクリと小刻みに反応していた。

――……左後方に気配が出たな。

突如沸いた気配を察知し、鳳牙は立ち止まってそちらのほうへ視線を向けた。

『鳳牙？』

急に動きを止めた鳳牙に気が付いて、他の三人も立ち止まる。それらを背中で感じながらも、鳳牙はじっと気配のする方を睨み続けた。

パタパタとリズムを取るように尻尾を揺らす。

……ふう。動きはな――っ！　いや、明らかに逃げて行った。今のは――

ギリッと奥歯を噛み締め、

『あっちに誰かいました。逃げていきましたけど、多分仲間を呼びに行ってます』

鳳牙は全員に警戒を促がした。

『『『っ！』』』

鳳牙の言葉を受けて、三人の顔色が変わる。

『急ごう。すぐに来ないのなら、その間になんとしても御影さんに会わないと』

『うぬ。戦闘の準備だけは万全に、速やかに移動するで御座る』

『緊急事態だよね。ヘルメット着用！』

全員で頷いて、四人は走り始める。御影の工房までは、もうあまり距離はない。隊列はトランスポーターへの潜入と同じ順で、四人は一列に森の中を進んでいく。

殿の鳳牙は、全神経を後方へ集中させていた。

――今のところはまだ誰も分かる範囲には近づいてきていない、か。でも、いつまでこのままいけるか……

緊張感が心臓の鼓動を早める。誰も、一言も発さずに先を急ぎ続けていた。

しばらく走り続けて、

『見えたで御座る』

先頭のアルタイルから【ささやき】が飛ぶ。

『状況が状況だ。このまま工房に入らせてもらおう』

フェルドが冷静な声で方針を決定し、

『ええ！？　御影のじーちゃん間違ってあたしたちの事切り捨てたりしないよね……？』

小燕が不安そうな声を上げた。

『それは行ってみないとなんとも言えないな……』

御影自身も相当なプレイヤーであることを考えると、賞金首イベントに普通に参加している可能性は大いにある。鳳牙たちの引退に対して不審を抱いていてくれたとしても、いきなり飛び込んだら切り捨てられても文句は言えないかもしれなかった。

『うぬ。ままよ、に御座る』

アルタイルが速度を上げ、いち早く工房の扉に到達。勢いよく開け放って中に飛び込んだ。続いてフェルド、小燕、鳳牙と続く。

工房は前回来た時と大きく変わったところは見受けられなかった。だが、最大の違いが一つある。それは、

『いない、か……』

フェルドが眼鏡の位置を直しながらやや思い溜息を吐き出した。

主、御影の不在。
工房の中には誰もおらず、ただ彼の愛用していたキセルがぽつんと作業台に残されているだけだった。

――くそっ。タイミングが悪かったか。

鳳牙は思わず工房の壁に手を叩きつけていた。
他の三人にしても、どうしていいか分からないといった感じに所在なさげである。

『……フェルドさん。このままここにいても追っ手が来る可能性が高いです。いったん戻って、出直しましょう』
『……そうだね。あ――』

鳳牙の言葉に頷きかけたフェルドが、はっと何かを思い出したように目を見開き、ごそごそとローブの内側を漁り始めた。そうして、ペンと紙を取り出す。

『書置きをしておこう。待ち合わせ場所を決めて……いや、掲示板か何かに時間を指定してもらえば、僕らでも確認出来る』
『うぬ。妙案では御座るが、あまり時間もないで御座る』
『分かってる。一分で書くから』

言うや否や、フェルドは紙に高速でペンを走らせ始めた。
瞬く間に紙に文字が書かれていき、

『よし。終わり』

本当に一分とかからずに書置きを完成させた。だが、

『フェルドさん、もう、というか元々手遅れだったっぽいです』

扉をわずかに開いて外の様子を見ていた鳳牙は、すでに工房を取り囲む複数の気配を察知していた。

『うぬ。見える範囲で四人で御座るな』

『少なくともあともう一人はいます。遠距離系ですかね？　魔術師だと厄介ですよ』

『アル兄と鳳兄なんで分かるの？　あたし二人しか見えない』

同じ様に外を探るアルタイルと小燕もそれぞれ敵を視認していた。そこへフェルドも加わり、ちょうどトーテムポールか何かのような状態で全員が戸口に集まった。

『なんか僕の苦労が無になったみたいでちょっと腹立たしいね』

きょろきょろと視線を巡らせるフェルドが、すっと手を伸ばして眼鏡の位置を調整した。

実際その通りなので、鳳牙もアルタイルも小燕も何も言わない。

――さて、あまり馬鹿もやっていられないぞ。

鳳牙の感覚で敵の総勢は五人。内一人が見える範囲にいない。見える四人はそれぞれ何らかの鎧を着込んでいたり武器を持っていたりするので、おそらくは近接系職で間違いはない。

となると、やはり問題は見えていない一人だ。

鳳牙は物理系の遠距離型ならいくらでも対処する自信はあったが、魔術師系に関しては別である。今のパーティーで魔法耐性があるのは司祭のフェルドとマジックプレート装備の小燕だ。
司祭のフェルドに直接戦闘は当然ながら不向きのため、小燕の運用がこの場を切り抜けるための鍵になる。

『さて、どうしようか？』
『さしあたって姿の見えない一人がどう攻撃してくるかですけど、もし魔法攻撃をしてくるようなら、小燕に突撃してもらうしかないと思います』
『あー、鳳兄もアル兄も魔法耐性低いもんね』
『然り。ならばその場合は、拙者と鳳牙殿で小燕殿の行く手を阻む輩を全力で排除する必要があるで御座るな』

仮にその場合、アルタイルが罠で牽制しつつ、鳳牙は各個撃破する形で障害を排除。小燕にはとにかく最優先で相手魔術師を殲滅してもらう他にないだろう。一時的にフェルドの防御がなくなるが、電撃作戦で瞬時にカタをつければ勝機はある。

『でも魔術師いなかったらどうするの？』
『その時は普通に戦えばいいさ。ただの物理屋なら何とか出来る』
『うぬ。見たところ名の知れたプレイヤーのようでは御座らん。いざとなれば罠をばら撒いて逃げるで御座る』
『……皆、僕の苦労を――まあいいや。とりあえずはさっきの案で行こう。タイミングは任せる。鳳牙、その見えない一人の位置を小燕に』

小さく溜息を吐いたフェルドが、矢継ぎ早に指示を飛ばす。
『アルタイルは最初から出来る限り罠をばら撒いて全体を牽制。鳳

牙は小燕の進行上の敵を優先排除。吹き飛ばし系のスキルも織り交ぜて囲まれないように注意して。小燕は多少のダメージを覚悟して鳳牙の指示通り隠れている敵を殲滅。全員の命は僕が預かる。いいかい？』

鳳牙は無言で頷き、他の二人も同様に了解の意を示す。

『幸いこの程度の範囲だったら工房の入り口から魔法が届く。序盤は僕の事は心配しないでいいから、とにかく速攻で場を支配するよ』

『はい』

『うぬ』

『りょーかい』

全員の返事を受けたフェルドが、すうと小さく息を吸って、指でカウントダウンを開始した。

鳳牙は扉に手をかけ、アルタイルの飛び出しを支援する体制をとる。

――四……三……二……一……！

フェルドの指がゼロをカウントし、ゴーサインが出る。

同時に、鳳牙は扉を開け放ち、アルタイルの巨体が外に躍り出た。続いて鳳牙も外へ飛び出す。背後からは小燕の気配も続いていた。

『煌星忍軍流玉吹雪の術！　とくと味わうで御座る！』

先頭を切ったアルタイルが四方八方に罠玉をばら撒き、それに混じるようにして周囲に潜んだ敵めがけて投玉を見舞い始めた。

「くそっ！　もう気付かれてたか！」
「構うことはない。いざ、勝負！」
「最低でも五百万の首よ。絶対逃がしちゃ駄目だからね！」

囲っている側がここまでの急襲を受けるとは思っていなかったのか、襲撃者側のプレイヤーたちはやや浮き足立っていた。
隠れつつも姿の見えていた四人が、応戦のためにその姿を完全に晒してくる。

――――『騎士（ナイト）』。『拳王（フィストマスター）』。あの軽装のは、『剣聖（ソードマスター）』か？　あとは『聖騎士（パラディン）』、と。

相手の編成を瞬時に確認し、鳳牙は呟くように【ささやき】にとばしてフェルドに伝える。
と同時に、

『はあっ！』

鳳牙は自分に向かってきていた剣聖の女を先手必勝と言わんばかりに飛び蹴りで吹っ飛ばした。

「きゃあっ！」

剣聖は女性らしい悲鳴を上げて空を飛んでいく。
なかなかに反感を買いそうな光景だが、鳳牙にしてみれば命がけなのだからそんな些細な事は気にしない。それ以前に、ここはゲームの世界なので男も女も関係ないのだ。

「しゃっ！」

鳳牙の着地を狙って拳王が素手スキルを繰り出してくる。その攻撃を身体をひねって掠らせながら回避し、流れるよう動きで相手の懐に身体を滑り込ませ、掌を相手の胸に押し当てる。

『破っ！』

遅滞なくリミテッドスキル『徹し』を発動。一瞬、相手拳王の身体が大きくビクリと震え、その全てから色を失って灰色となり地面に倒れた。

「げっ！？」

「一撃だと……？」

倒された拳王と隙をうかがっていた聖騎士の男が驚きの声を上げる。

鳳牙はそんなことには構わず、すぐさま棒立ちの聖騎士に攻撃を仕掛けようとして、

『ぐっ……』

急激な眩暈を覚えて思わずたたらを踏む。

「くっ！　何のスキルか知らんが、仇は討たせてもらうぞ」

その隙を見逃さず、聖騎士が剣を振るってきた。

――ちっ、やっぱり魔術師がいるか。

鳳牙はなんとか初撃をかわして地面を転がり、

『治癒（リカバー）！』

直後のフェルドの声と共に鳳牙は青白い光に包まれ、次の瞬間には嘘のように眩暈が消え去っていた。

『助かります』

お礼の言葉を返しつつも跳ね起き、鳳牙は聖騎士に相対する。

「ふん。持ち直したか。だが、俺の防御力はあいつとは段違いだぞ」

鳳牙の繰り出す攻撃を大きな盾で防ぎながら、聖騎士の男は声を上げた。

『聖騎士』は『騎士』や『重戦士』に次いで物理防御力の高い職である。加えて、僧侶の使用できる回復・支援魔法も使用できるため、準ヒーラーのような位置付けでもあった。

強固な防御で被ダメージを軽減し、いざとなれば自己回復が可能なため、ソロでもパーティーでもその生存率は抜きん出て高い。

「ははは。レア職とは言っても所詮は攻撃力の低い素手職。脆い拳王は倒せても、俺は倒せまい！」

鳳牙の攻撃で削られる自分のヒットポイントを確認して、聖騎士は高らかに笑いながら盾での防戦から片手剣による攻勢に打って出る。

鳳牙はステップを織り交ぜつつもその攻撃をかわしていくが、何回かに一度はいい攻撃をもらってしまう。

「そらそらどうしたどうした！」

調子に乗った聖騎士は、回避しつつも逃げ回る鳳牙を追撃し続ける。その結果、彼は元々いた位置から大きく御影の工房付近まで釣り出されてしまった。そして、

「ひっ！」

背後から聞こえた悲鳴に驚いた聖騎士が思わず振り返る。その隙を逃さず、鳳牙は相手の腹を蹴りつけて無理矢理間合いを取った。

その間にちらりと悲鳴の聞こえた方を見れば、

『魔術師討ち取ったりー』

高々と大剣を掲げて勝ち誇る小燕の姿が見えた。そのすぐ後に彼女は最初に鳳牙が吹っ飛ばした剣聖の女と交戦に入り、つばぜり合いを演じ始める。

「き、貴様、最初から魔術師を……」

体勢を立て直した聖騎士が、怒りで真っ赤になった顔のまま全身を震わせていた。

鳳牙は無言のままくいくいと手招きをして挑発を仕掛ける。ついでにフンと鼻で笑ってやるのも忘れない。

「人工知能風情が！」

鳳牙の行為が相当気に喰わなかったらしく、聖騎士の男はがむし

ゃらな一撃を放ってきた。気合の入った容赦ない一撃は、受ければ確実に大ダメージを喰らってしまう。だが、

『……金剛(こんごう)』

鳳牙は腰を落とし、両の拳を突き合わせた姿勢のまま、相手の攻撃をまともに受けた。

聖騎士の片手剣は振り下ろされるままに鳳牙の左肩口から斜めの袈裟懸けに剣閃を――走らす事は出来なかった。

「しまっ……！」

鋼鉄と鋼鉄を打ち合わせたような音と共に、聖騎士の顔が不味いというように歪む。彼の振り下ろした剣は、鳳牙の左肩で完全に止まっていた。大ダメージを与えるはずの一撃は、わずかばかりのヒットポイントを削ったのみで、その威力を失っている。

防御スキル『金剛』の効果だ。数秒間だけ爆発的に防御力を増大させ、相手の物理攻撃を受けとめる事が出来る。

――……それなりに痛いな。けど――

構えを解き、鳳牙は静かに聖騎士の白銀の鎧に手を触れる。相手は攻撃直後の硬直で動けない。その隙で、十分だった。

――俺の勝ちだ。

意識を集中し、触れた掌から相手へ向けて力を放出させる。

『破っ！』

鳳牙は聖騎士に『徹し』を叩き込み、その色を灰色へと変化させた。

「な……俺も、一撃……？」

驚きの声を漏らす聖騎士を無視して、鳳牙は視線を小燕の方へ向ける。

『と・ど・め・だあっ！』

小燕の飛び上がっての大上段を受けて、剣聖の女が灰色になって倒れるのが見えた。小燕はよっしゃあと言わんばかりに拳を振り上げている。

それを見届けて、鳳牙はアルタイルの方へ視線を移した。彼は工房の近くで最後の一人である騎士と交戦中である。

「くっ。正々堂々戦え！」

『うぬ。忍者に対して何を言うで御座る。これが忍びというものに御座るよ』

アルタイルが騎士の動きを制限するように罠を配置して行き、動きが鈍ったところを狙って投玉をぶつけている。

騎士の方は持ち前の防御力で何とかアルタイルの攻撃をしのいではいるが、多数の罠に少しずつ、しかし確実にヒットポイントを削られていた。

たまに剣で切りかかりもするのだが、回避に優れたアルタイルに

は掠る事すら出来ない。騎士にとって物理職系の相性では忍者は最悪の部類に入る。

「おのれちょこまかと……。この卑怯者め！」

『それは褒め言葉として受け取っておくで御座る』

【ささやき】設定で会話は出来ていないはずなのだが、傍から見ている分には完全に成立しているのが鳳牙としては面白かった。

加勢するまでも無さそうだとしばらく眺めていると、懐に手を入れたアルタイルが何かを投げる素振りを見せた。しかし、鳳牙の目には何も映ってはいない。

フェイクだろうかと首を傾げていると、アルタイルが発動した罠を避けた騎士に投玉を投擲し、さらに罠から遠ざけるように仕向けた。

――誘導してる？

アルタイルの行動に鳳牙がそんな印象を受けた瞬間、

『滅』

突然相手に背を向けたアルタイルが、顔の前で二本指を立てつつぼそりと言葉を発した。

それに合わせるかのように、

「うわあああっ！」

騎士の姿が突如発生した無数の火柱に包み込まれる。数秒後に火柱が消え去った後には、灰色になった騎士が倒れ伏していた。

「な、何で罠が……」
『貴殿が知る必要はないで御座る。罠隠しの術は秘伝で御座る』
肩越しに倒れた騎士を一瞥し、アルタイルは静かに歩み始めた。
『ふー。これで殲滅完了かな？　皆お疲れ様』
それぞれの戦闘が終結したのを見届け、フェルドが工房の戸口から声をかけてくる。
見た目の派手さはないが、三人をサポートしきったフェルドが一番の功労者と言っていい。鳳牙もアルタイルも小燕も、フェルドの支援を信じているから全力で戦えるのだ。
『それじゃ、一度異端者の最果てに戻ろうか。もうここにいる事ばれちゃったし、また別のプレイヤーが襲ってこないとも限らない』
フェルドの提案に、鳳牙も賛成だった。
襲撃に失敗した以上、撃退した面々の誰かが知り合いに【ささやき】を送ったり、掲示板に目撃情報を書いたりしかねない。
結局御影には会えずじまいだが、先ほどフェルドの残した書置きもある。ここは一時撤退が上策だった。
『物資にはまだ余裕はあれど、連戦は面倒で御座るな』
『だねー』
『それじゃあ、奥の一方通行からドルミナス高原へ抜けましょう。どうせなら向うからの帰還を試して見るほうがいいと思います』
『そうだね。そうしようか』
方針を固め、それぞれに持ち物などの最終確認をする。その過程

で、鳳牙は自分の持ち物ボックスに入ったままのアイテムを思い出した。

――そうだ。これを置いていけば。

鳳牙は御影の工房の中に入り、フェルドの残した書置きのそばに火之迦具土神の魂を残しておく。

書置きに加え、このアイテムが一緒であればきっと何らかのアクションを起こしてくれるだろうという期待を込めて。

『鳳牙、行くよ』

『はい』

呼ばれた鳳牙は工房を後にする。戸口から出る際、最後にちらりと工房の中を振り返った。

作業台に置かれた火之迦具土神の魂が淡い光を放ち、金属製のキセルの表面をわずかに光らせていた。

その３（後書き）

次からは真面目に不定期更新になりそうです……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8274y/

Chaos_Mythology_Online

2011年11月30日19時50分発行